光よあれ

私たちは主のもの 25人の証しシリーズ第2集

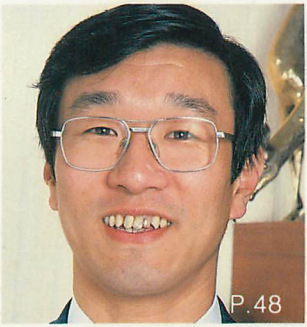


















光よあれ

私たちは主のもの 25人の証しシリーズ第2集

吉祥寺キリスト集会編

この世が自分の知恵によって神を知ることがないのは、神の知恵によるのです。
それゆえ、神はみこころによって、宣教のことばの愚かさを通して、信じる者を
救おうと定められたのです。

（Ⅰコリント　1・21）

光よあれ

私たちは主のもの　25人の証しシリーズ第2集

吉祥寺キリスト集会　編

まえがき

ゴットホルド・ベック

まず始めに、証しシリーズ「光よあれ」の第一集（既刊）を通して、大勢のかたが真の信仰に導かれたこと、また、それに続いてここに第二集を世に送り出すことができましたことを、心から喜び、感謝しております。

「時とともに移り変わる価値観」と「永遠に変わらない価値」

この第二集は、二つのまったく異なる価値観、つまり「時とともに移り変わる価値観」と、「永遠に変わらない価値」の差を明らかにするために書かれました。確かに、「価値」には、時間が経つとすっかり変わってしまうものと、時間を超えていつまでも真理であり続ける価値、すなわち永遠の神の秩序が支配している価値とがあります。このことを、少し考えてみましょう。

人間は年を取ってくると、「時とともに移り変わる価値観」が、いかに頼りにならないものであるかを身に滲みて知るようになります。自分が絶対だと信じていた価値観が少しずつ通用しなくなってゆくのを見るのは、悲しいものです。今の若い人たちは、老人が後生大事に守ってきた価値観などには目もくれないで、いつも新しいもの、変わったものを追い求めてゆこうとします。

しかし、人間の真の幸せと救いは、そのような「時とともに移り変わる価値観」とはまったく無関係です。私たちが、神の永遠に有効な戒めを、時代遅れだとみなして拒絶する時に、そこには悩みと苦しみだけが生じます。

「時とともに移り変わる価値観」はまた、日常生活での多くの風俗や習慣の中にも痕跡を残しています。確かに、五、六十年前にはこの上なく大切だと思われた習慣がありました。その習慣は、当時の人々にとって一つの心の支えとなり、助けともなっていました。今もなお、そのような習慣に立って生活することは可能であるかも知れません。また一方で、それらの習慣を捨て、新しいやり方を始めることは、必ずしも悪いことばかりであるとは言えないようです。この二十世紀には、新しいものによって古い殻の束縛から解放された事例が多くあるからです。

今まで大切にされてきたものの変化

ここで、何世紀も変わらずに続いてきたものが変化してゆく一例として、私の祖国ドイツの風俗習慣をご説明しましょう。

五、六十年前のドイツでは、食事の時、子供たちは大人から話しかけられない限り、話をしてはいけませんでした。また婚約した若い男女は、自分たちだけで散歩することを許されず、叔母さんとか家族の一員が常にいっしょにいなければなりませんでした。着るものや髪形も一定の型にはめられて、それをしないと除け者扱いされました。また、家庭の主婦は、日曜日には一週間のうちで最高のご馳走を作らなければなりませんでしたが、一家の主婦にとって、それは大変な負担でした。プールで泳ぐ時も、男女は高い壁で分けられていました。家族の誰かが亡くなると一年間は喪に服するのが常でした。喪に服している間は、黒い服を着なければならなかったのです。

しかし、今日のドイツの習慣は何と変わってしまったことでしょうか。食事の時、子供たちは、我がちに学校での出来事を楽しそうに話し合います。多くの家庭では、日曜日にはできるだけ母親を休ませようとして、ごく簡単な食事ですませるようになっています。年配の信仰者にはなかなか理解できないことのようですが、聖餐式の時に若者たちは、特に改まった服を着るということもなく、普段のままのラフな服装で聖餐にあずかり、真剣に主を礼拝しています。このようにして、長い間大切と思われていた習慣でさえ、時とともに変化してきているのです。

神の秩序に対する反抗

しかし、このような価値観や習慣の変化にもかかわらず、いつの世にも厳然として立つ、神の永遠の基準が存在します。たとえば、神の啓示によって与えられたモーセの十戒がそれです。

1 あなたには、わたしのほかに、ほかの神々があってはならない。
2 あなたは、自分のために、偶像を造ってはならない。
3 あなたは、あなたの神、主の御名を、みだりに唱えてはならない。
4 安息日を覚えて、これを聖なる日とせよ。
5 あなたの父と母を敬え。
6 殺してはならない。
7 姦淫してはならない。
8 盗んではならない。

9　あなたの隣人に対し、偽りの証言をしてはならない。
10　あなたの隣人の家を欲しがってはならない。（出エジプト記　20・3～17）

このような神の戒めは、私たち人間にとって、人生のある時期には腹立たしいもの、煩わしいもの、厭うべきもののように思われることがあります。なぜなら、神の戒めは、私たちを束縛するもののように思えるからです。しかし、それは大きな誤解です。

たとえをあげて説明すると、主なる神の戒めは、灯台のようなものだといえるでしょう。どんなに暗い夜でも、嵐でも、船は灯台の光によって安全に港に着くことができるのと同じように、私たちもまた、神の戒めに従うことによって、正しい道を歩むことができるのです。すなわち、神の戒めは、ちょうど病人にとって薬がなくてはならないものであるのと同じように、私たち人間にとってなくてはならない大切なものなのです。神の言葉は、私たちを守ってくれるものであり、心の支えであります。

あなたは私に、いのちの道を知らせてくださいます。（詩篇　16・11）

主なる神は、私たちが自分勝手な道を歩いて不幸にならないようにと戒めをくださったのです。今日の時代の特徴は、一言でいえば、主なる神の秩序に対する反抗であるといえましょう。

「あなたには、わたしのほかに、ほかの神々があってはならない」。これこそ、モーセの十戒によって与えられた、神の第一の戒めであります。何と多くの人が、主なる神を除け者にして、自

分勝手に欲望と快楽の生活に身をゆだね、滅びへの道を歩いていることでしょうか。

また、特に注意しなければいけない間違った思い込みは、物質的、社会的な改造によって、新しい人間を造ることができるという近代的進歩思想であります。しかし、人間は、主なる神のみことばと霊によって新しく生まれ変わること以外には、決して、社会主義によっても資本主義によっても、救われることはありません。

「安息日を覚えて、これを聖なる日とせよ」。日曜日は、肉体、魂、霊の休息のために、神によって人間に与えられている特別の日です。しかしその日曜日に、何と多くの酔っぱらい運転による交通事故が起こることでしょうか。日曜日とは、いうまでもなく、神のみことばとの出会いによって潔められるべき日であるにもかかわらず、多くの人は、それとまったく正反対のことをしているのです。

結婚と家族の崩壊

「あなたの父と母を敬え」。モーセの律法の第四の戒めは、家族を守ります。神の御心は、家族全体が健康で幸せになることです。しかし、今日の多くの人々の考え方はどうかといいますと、年老いた父母をないがしろにしたり、また一家の中心となるべき若い父親と母親自身が、たとえ結婚してもうまくゆかなければ離婚して、幸せな結婚生活を見出すまで何度でも再婚すればよいと考えたり、あるいは、はじめから結婚などしないで同棲すれば、いやになった時いつでも離れられて自由でいいと考えたり、敬われるべき親自身が勝手な行動をして家庭を崩壊させています。

「殺してはならない」。第五の戒めは、胎内の児を守るものですが、今日の世相はそれと反対に堕胎が多く行われています。堕胎は人間の生命を殺すだけでなく、精神的にも大変な苦悩と圧迫をもたらします。これも大きな神の戒めに対する反逆です。

しかし、神の戒めに対する反抗のもっとも恐しいものは、姦淫ではないでしょうか。「姦淫してはならない」。姦淫は、神の第六の戒めに逆らう、恐しい罪です。

聖書は、決してセックスを否定するものではありません。

神はまた、彼らを祝福し、このように神は彼らに仰せられた。「生めよ。ふえよ。地を満たせ」

（創世記　1・28）

また、主なる神は、お互いの喜びのために男と女をお造りになったと聖書にははっきり書いてあります。結婚生活の外では、いかなるセックスも認められていませんが、結婚生活の中では認められているだけでなく、神の御心でもあるのです。このことが正しく守られないと、人間の生活はめちゃめちゃになり、大変な混乱状態がもたらされることになります。

次のようなイエス様のみことばは、何と深刻な意味を持っていることでしょうか。

もしあなたがたがわたしを愛するなら、あなたがたはわたしの戒めを守るはずです。

（ヨハネ　14・15）

そもそも聖書によると、結婚というものは、死に至るまで、お互いに愛と忠実を持ち続ける生

活の絆なのです。

だれでも、情欲をいだいて女を見る者は、すでに心の中で姦淫を犯したのです。

（マタイ　5・28）

また、この神のみことばに照らして見る時、私たちは皆、主なる神に対して負い目を持っている者であることを認めざるを得なくなります。しかし、罪を、神に対する債務として卒直に認め悔い改めて神のみことばを全面的に受け入れるかどうかによって、大変な違いが出てきます。

悪魔の見せかけの勝利

このような混乱状態、日曜日を聖なる安息日として守らず、反対に汚れた行いをしたり、結婚生活以外に乱れた異性関係を持ったり、結婚生活の崩壊、家族の崩壊などの酸鼻をきわめた不幸な状態などを目の当りに見ると、私たちはいったいどうなってしまうのか、不安だらけになってしまいます。肉体的にも精神的にも、深刻な挫折がますます増えてゆくことは、決して不思議ではありません。これらは神の戒めと秩序に反抗する人間への、神の裁きです。神の裁きとは、私たち人間が勝手なことをするときにそれを止めさせないで、むしろ勝手にさせておくということそのものにあります。そしていつか、間違っていたことに気が付く時、神から離れていることがいかに平安や祝福と無縁な状態におかれるものであるかを知るのです。

このような混乱状態におちいった人に対して、周囲の人々が激しく怒ってみたところで、それ

は何の役にも立ちません。また、落度をあげつらって裁き責めることも、その人の心をかたくなにさせるだけです。何らかの救いの道があるとするならば、それはその人自身が神様の前に立って全面的に自己の非を認める悔い改めの道だけであります。

目を覚ますことの必要性

あらゆる悩みと絶望は、永遠に有効な、ゆるぎない主なる神の基準から、私たちが離れてしまった結果です。

さあ、主に立ち返ろう。主は私たちを引き裂いたが、また、いやし、私たちを打ったが、また、包んでくださるからだ。

（ホセア　6・1）

聖書に立った真の喜びのおとずれとは、次のことです。すなわち、あなたはありのままの状態で主のみもとに来ることを許されているのです。神は、あなたが今までのような状態に留まることをお許しになりません。あらゆる債務、あらゆる過ちはすべて、必ず赦されます。神の救いと償いは、主イエスの愛、すなわち罪人をも愛する深い愛と、私たちの罪の身代りとなって死んでくださった十字架における犠牲の死に基づいています。主なる神は、悔い改める罪人を赦し、義と認めてくださいますが、決して、罪そのものをあまく見ることはなさらないのです。

この証しの本には、自分の人生の主導権を、主イエスに明け渡した多くの人たちが証しをしています。その人たちは、苦悩や混乱や重荷を抱いて、イエス様のみもとに行きました。そして、

イエス様は、その人たちすべてに、新しい始まりを与えてくださいました。

あなたもそのことを、今日、体験することができます。主イエスは、あなたの人生を根本的に変えることがおできになります。主イエスは、生きる望みと確かな心の支えを与えてくださいます。

どうかあなたも、神様を受け入れ、主イエスにあなたの人生を捧げることをなさってみてください。そうすれば神の恵みによって、あなたの人生もまた、ゆるがぬ基盤の上に立った人生となり、主が栄光を顕される価値ある人生になります。

目次

まえがき……7

光よあれ　私たちは主のもの　25人の証しシリーズ　第2集

1　神のみことばを土台として……辻田　浩康　19
2　偶像から解放されて……宮田　清枝　34
3　曙からお昼過ぎまで……松見　敬三　48
4　すべてを主の御手に（妻の証し）……古田　康子　62
5　すべてを主の御手に（夫の証し）……古田　稔　76
6　主、わが力、わが巌……今村扶貴子　85
7　駆けのぼりし、主の道……染野　茂夫　115
　アルコール症からの解放
8　御手の中で……鈴木三枝子　133
9　主の御名はほむべきかな……重田　定義　149
10　主は私の羊飼い……野口とも子　170

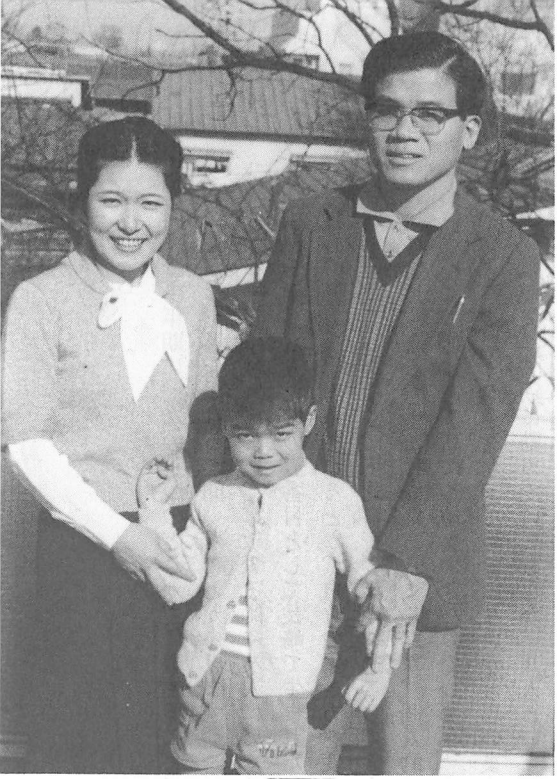
目　次

15人の証し（カラー刷り）……97～104
●主の恵みによって…尾崎英昭
●神の国と義を第一に求めなさい…新見稔
●むなしさからの解放…渡辺二郎
●わが家の「主」…小川泰徳　●幼な子の口を通して…今川務
●神からの言葉…高田博之　●天路歴程の記念碑…大庭治夫
●若き日に創造主を覚えよ…竹本誠一　●神のみまえに…岡本広海
●「子よ。しっかりしなさい」…白木慎一　●真理を求めて…上田利恵
●感謝と賛美の日々へ…富山廣栄　●信仰への過程…松田茂
●重荷から解放されて…高橋正一　●死の恐れからの解放…近藤千秋
無限の宇宙にある神……ゴットホルド・ベック　183
あとがき……208
基礎的なみことば……222
「実を結ぶ命」のおすすめ…224　「光よあれ」第1集のおすすめ…226　次号予告…229
吉祥寺・高松・土佐山田キリスト集会のご案内…230

神のみことばを土台として

辻田　浩康

一九三九年長崎に生まる。長与小、長与中、長崎西高を経て長崎大学経済学部卒業後、三菱信託銀行に入社。福岡、名古屋、札幌、東京、横浜の各本支店を転々とし現在自由ヶ丘支店勤務。趣味は読書。家族は妻美智子さん、長男英雄君、次男哲也君。



▲'80年12月3日。浩康氏バプテスマ(洗礼)の日、美智子夫人、哲也君と。



◀吉祥寺の社宅の庭で家族全員。

おいたち

人間は青少年期に、次の三つのどれかを体験することによって、その人の人生観や人間形成のうえに大きな影響を受けると聞いたことがあります。一つは貧困であり、一つは戦争であり、一つは偉大な思想に触れ、また、尊敬する師や友人にめぐり会うことだそうです。

昭和十四年、八人兄弟の五番目として長崎で生まれた私は、貧困と戦争は体験しましたけれども、肝心の偉大な思想に触れるとか、自分の生き方を変えられるほど影響を与えてくれる人に巡り会うということもなく、平凡に青少年期を過ごしてきました。

戦争の時に生まれ育った私ではありましたが、個人的に戦争の影響を受けて人生観が変えられるというには、私はあまりにも幼なすぎたのでしょう。戦争は人を殺しあうこと、原爆は恐ろしいことぐらいしか分からなかったのではないかと思います。

当時、私の父は国鉄に勤めていましたが、八人という子沢山のため、戦後の食糧難時代は、食べることにも事欠く状態でした。その上、父は原爆で家族を失った同僚をしばらく下宿させたり、乏しい給料の中から親戚を援助したりしていました。このような状態でしたから、父は勤めのかたわら、親戚の荒果てた畑を借用して開墾し、私たち兄弟は小さい時から畑の手伝いをさせられました。その当時は、私たちの家庭だけでなく、多くの家庭が、生きていくために貧困と戦っていたのかもしれませんが、私は子供心に、貧乏に苦しむ父母を安心させるには、大学を出て一流企業に就職することだと現実的なことを考えていました。

幸いにも、自宅から通える地元の大学に入学でき、四年間の大学生活は、在籍していた剣道部

で心身を鍛練するとともに、余った時間はほとんど、農業の手伝いをやるか家庭教師のアルバイトで過ごしました。

青年期には、「人生とは何か」「生きている目的は何か」など、自分の生き方について考える時期があるのでしょうが、私自身は、哲学や文学に関するものをじっくり腰を据えて考えたり、味わったりするのは苦手でして、目先の現実の生活だけを見てきたように思います。

また、就職や結婚という人生において大きな決断を要することにおいても、自分自身であれこれ深く考えて自分で選んだというより、人生の先輩である先生や両親の勧める道を選んでおけば間違いも少なかろうと、就職は恩師の勧めてくださった金融機関を選び、結婚は父母の賛成する人がよいと現在の妻と結婚しました。

私のこのような性格は、良く言えば従順だし、悪く言えば主体性がないのかもしれません。

子供たちよ。主にあって両親に従いなさい。これは正しいことだからです。

「あなたの父と母を敬え」。これは第一の戒めであり、約束を伴ったものです。すなわち、

「そうしたら、あなたはしあわせになり、地上で長生きする」という約束です。

（エペソ　6・1～3）

この聖書のみことばを、結婚する当時の私は知りませんでしたが、結婚生活十八年目をさほどの問題もなく迎えた現在、このみことばは私にとって真実であると言えましょう。

このようにさしたる悩みもなく、淡々とした気持で、平凡に過ごしてきましたから「神に頼る」

気持などさらさらありませんでした。こんな私が神に出会えて、永遠に失うことのない希望に満ちた人生に変えられたことは、誠に、神のあわれみと恵みにほかなりません。

妻の受洗

私どもは昭和四十一年に結婚しましたが、子供がなかなか与えられず、そのことは妻にとって大きな悩みでした。人間の力ではどうにもならないことがあるのだと気づいた妻は、「神の存在」について漠然と考えるようになったようです。妻はその頃から、「私ども夫婦にも子供を授けてください」と、漠然とした神に対して祈るようになり、結婚四年目に長男、その二年後に次男を授かりました。

次男が幼稚園に入園し、そこで知りあった吉祥寺キリスト集会のかたに誘われ、妻は集会に集い始めました。そして「以前は、子供を授けてくださいと漠然とした神に祈っていたけれども、聖書の学びを通して本物の神に出会った」とだんだん熱心になり、洗礼を受けることを決意し、私や私の両親の許可を求めました。

私は、信仰の自由は憲法で認められていることだし、たとえ夫であっても反対する権利はあるまいとすんなり許しました。ただし、その信仰を自分にまで押しつけられるのはごめんだと思いました。私の母からも、その当時、私どもの次男がひどい喘息に悩まされていたので、妻の苦悩を思いやり、きっとわらにもすがりたい心境なのだろうし、信仰は本人の自由だからと好意的な返事が届きました。

昭和五十三年五月に洗礼を受けた妻は以前とは変わってきました。それまでは、火曜日の聖書学び会には熱心に出席していたようですが、日曜日にはちゃんと家にいてくれました。ところが受洗と同時に、日曜日も早起きして洗濯や昼食の仕度までやるべきことを済ませると、そそくさと、子供たちを連れて礼拝に出るようになりました。私は仕方がないので、妻たちが出かける二十分位前に起きて朝食をとり、皆が帰ってくるまでごろごろして過ごし、午後一時すぎに、家族がそろったところで遅い昼食をとるというのが日曜日のパターンとなりました。

神に対する抵抗

主イエスを信じなさい。そうすれば、あなたもあなたの家族も救われます。
（使徒　16・31）

イエスを告白しない霊はどれ一つとして神から出たものではありません。
（Ⅰヨハネ　4・3）

妻はいつまでも私を放っておかず、その年六月の「父の日」には、私に聖書をプレゼントしてくれました。また、妻は、日常会話の中で、いつのまにか「罪」とか「イエス様」とか「神の裁き」を話題にするようになりました。

「最初の人間アダムが罪を犯したので、その子孫である人間は誰でも罪人なのよ。あなたも例外ではなく、罪人の一人なのよ」

「冗談じゃない。私は何も悪いことをしていないし、警察にお世話になったこともない」
「でも、神を神としてあがめず、自分勝手に生きているでしょう。聖い神様の目から見れば、罪人です。人間は誰でも真の神であるイエス様を信じなければ、やがて神の裁きの時がくるのよ。『人間には、一度死ぬことと死後にさばきを受けることが定まっている』(ヘブル　9・27)と聖書に書いてあるから」
「どうして神はイエス一人でなければいけないのか。日本にだって、日本古来の神々がいるではないか」
「日本古来の神々は偶像で、人間が勝手に造って神と呼んでいるにすぎないでしょう。『神を、人間の技術や工夫で造った金や銀や石などの像と同じものと考えてはいけません』(使徒17・29)『この世界とその中にあるすべてのものをお造りになった神は、天地の主ですから、手でこしらえた宮などにはお住みになりません』(使徒17・24)と聖書に書いてあるのよ。お願いだから聖書を読んでください」

このような会話が私と妻の間でなされるようになりました。
結婚して十数年、その間、たいした争いもなく、比較的穏やかな日々でした。遅く帰宅しても小言ひとつ言わず迎えてくれましたし、また、私も夫婦喧嘩は嫌いでしたから、私に非がある時は素直に自分の非を認めていました。しかし、信仰の話、聖書の話になると、お互いに譲らず、口喧嘩こそしませんでしたが、何となく後味の悪い冷やかな空気になっていきました。

妻たちよ。自分の夫に服従しなさい。たとい、みことばに従わない夫であっても、妻の無言のふるまいによって、神のものとされるようになるためです。（Ⅰペテロ　3・1）

妻はだんだん無口になりました。しかし、妻にプレゼントされた聖書を開くことは、妻に対して白旗を揚げることになります。私は聖書には手を触れず、そのかわり、聖書に関する解説書を買い求め、読みあさりました。例えば聖書は、歴史上どういう位置づけにあるのかと思えば「歴史としての聖書」（山本書店）を読み、同名の映画を観たりしました。しかし、聖書を読まず、聖書に関する解説書ばかり読んでいる間は、なかなか聖書のみことばの真髄に触れ得ず、心の糧とはなりえませんでした。今にして思えば、遠まわりをしたものだという気がします。例えていえば、饅頭を眺めて、この饅頭はどういう材料が使われているのか、栄養的にはどうなっているのかと研究ばかりして、実際に食べて味わうことをしないのと同じだと思います。饅頭は食べて味わうことに値打ちがあり、眺めて研究したところで饅頭の味はわかりません。私のしていたことは、まさに饅頭を眺めてばかりいるのと同じでした。

その年の八月、私は、会社の長期休暇制度を利用して、同僚と二人で、ヨーロッパ五ヶ国旅行に出かけました。ローマやパリ、ロンドンの観光地を巡り、西洋の国々がいかにキリスト教文化に支えられているかを知りました。聖書が与えた影響の大きさを目の当たりにして、聖書に対する偏見が少しずつ薄れ、聖書を読んでみたいという気持に変えられていきました。

そして、十月十日、初めて吉祥寺キリスト集会に足を運びました。教会は厳粛で窮屈な所かと

想像していたのですが、ベックさんが流暢な日本語と大きな暖かい手で歓迎してくださり、また、集会の皆さんの暖かい雰囲気に触れて、帰り道に妻に「良い教会に導かれて良かったね」といったことだけは覚えています。

決断

その年の十一月、軽井沢バイブルキャンプへの誘いを受けましたが、会社の全国会議の資料作りのため、いつも以上に忙しく、聖書の学びどころではないと、誘いを断っていました。それにもかかわらず、不思議なことに、神の導きとしかいいようがないのですが、急に参加したい気になり、前夜は遅くまで残業して仕事をかたづけ、翌朝四時に、集会の飯守さんの車で軽井沢へ向かいました。車中の私は寝不足と初めてのキャンプに対する緊張や不安で暗い気持でした。

晩秋の軽井沢はまさに神が創造されたというにふさわしい自然の美しさでした。そして、老若男女のクリスチャンの方々が、神の前に平等で序列がなく、喜々として奉仕されており、また、笑顔の絶えない雰囲気は、永年サラリーマン社会しか知らない私にとって驚きとともに安らぎを与えてくれました。私はこのキャンプに参加して、これまでの自分の生き方について反省したり神についていろいろ考えさせられました。

私のサラリーマン生活は豊かな人生、充実した人生を目標としているはずでした。しかし、現実の姿は、会社での地位、名誉、金銭、その他いろいろな欲望を持ってサラリーマンとしての見果てぬ夢を追い続け、そのため、仕事仕事と、まるで仕事が生きがいのようになっていました。

また、いつも会社の上司・同僚と行動を共にせねば、何か群れから取り残されたような不安な気持になって、仕事の後は酒や麻雀の付きあいも大切にし、それも仕事のうちと自分自身に言い聞かせて遅く帰宅するのを当然としている日々でした。

しかし、仕事を第一としてきて、停年を迎えた人たちが、生きがいを失くして、急に老け込む姿を見聞きすると、明日は我身と一抹の不安が心をよぎることもあるにはありましたが、そういう自分のみじめな姿を想像することは意識して考えまいとしてきた私でした。

働く者は労苦して何の益を得よう。
その一生は悲しみであり、その仕事には悩みがあり、その心は夜も休まらない。
私が手がけたあらゆる事業と、そのために私が骨折った労苦とを振り返ってみると、なんと、すべてがむなしいことよ。風を追うようなものだ。

（伝道者の書　3・9、2・23、11）

人生はやり直しがきかないのだから、悔いのない人生を送りたい、他人の眼ばかり気にするのではなく、どっしり構えた納得のいく歩みをしたいという願望が強く湧くと同時に、ひるがえって今の自分には仕事を取り去ったら何が残るのだろうかというみじめな思いにもなりました。ましてや将来、年老いた夫婦が共通の人生目標をもたず、それぞればらばらの価値観でばらばらの生き方をすれば、夫婦のきずなはどうなるのだろうかとも考えました。

軽井沢に集っているクリスチャンたちの喜々とした姿、確信に満ちた生きざまの背後にあるも

のは一体何なのだろうか。本気になって聖書を学んでみようと思いました。

この美しい軽井沢の星空を眺めていると、私にも神の存在は認めることができました。この星空が偶然にできたとは思えませんし、小さな星ひとつ人間の手で動かすことはできません。とすれば、神と呼ぶべき偉大な方がいらっしゃるに違いないと納得がいきました。けれども、なぜイエスが神なのか。神様とイエス様との関係が理解できませんでした。

わたしが道であり、真理であり、いのちなのです。わたしを通してでなければ、だれひとり父のみもとに来ることはありません。

（ヨハネ　14・6）

神はみこころによって、満ち満ちた神の本質を御子のうちに宿らせ、その十字架の血によって平和をつくり、御子によって万物を、ご自分と和解させてくださったからです。

（コロサイ　1・19、20）

たとえ、人間の法律にはそむかなかったとしても、人を憎んだり、ねたんだり、自分勝手な自己中心の生活をしている人間は、完全で聖なる義なる神の御前で、誰一人として「自分はただしい」といいうる人はいないと思います。すべての人間は神の御前に罪人であります。私も例外ではありません。

神は、愛の神であると同時に聖なる義なる神であります。神は、私どもが罪ゆえに苦しむ姿をあわれまれ、神の愛をもって救おうと考えられましたが、人間の罪は裁かねばなりませんでした。

人間は救いたい。しかし、罪は裁かねばならない。この神の思いが、イエス様の十字架のみわざとなって成就されたのです。神の御子であるイエス様は、人間の代わりに、父なる神の裁きを十字架の上で受け、そして、神の全能の力により、三日目によみがえり、今も生きて、私どものためにとりなしをしておられます。まさに、イエス様は、父なる神と人間の橋渡しをしてくださり道そのものとなってくださったのです。

軽井沢から帰って、次の週より家族とともに、礼拝に出かけるようになり、私の心の目は少しずつ開かれてゆき、神とイエス・キリストと私の関係がはっきりとわかるようになりました。

昭和五十三年十一月十九日（この日は妻の誕生日でした）、聖書のみことばがすべて理解できたわけではありませんでしたが、イエス様は神の御子であり、私の救い主であると確信して、この方に従っていこうと決心し、私は洗礼を受けました。私にとって洗礼は、今までの古い自我が死に、新しくイエス様とともに歩もうとするスタートラインでした。私の葬式であり、入学式であったといえるでしょう。

神は働かれる

冒頭に、人生観を変えるきっかけとなり得るものとして、貧困、戦争、偉大な思想・人物との出会いについて触れましたが、私の場合、貧困や戦争は、さほど私自身に影響を与えませんでしたが、聖書のみことばに触れ、イエス様に出会ったことは、私や私の家族に大きな変化をもたらしました。

一つは「私は何のために生きているのか」、私自身の生きている意味と目的がはっきりしたことです。それまでの私は仕事だけの人生でした。しかし聖書によれば、神が人間を創造された目的は、人間が神をあがめ、神に栄光を帰すような日々を送ることであります。私も仕事そのものが人生の目的ではなくて、神に喜ばれ、神の御名があがめられることにつながる手段として仕事も一生懸命にやるというように変えられました。

あなたがたは、食べるにも、飲むにも、何をするにも、ただ神の栄光を現わすためにしなさい。

（Ⅰコリント　10・31）

二つめは、聖書のみことばが心の支えとなって、どんな時にも心の奥深いところで平安があるという点です。クリスチャンになったからといって、悩みや問題がまったくないというのではありません。ただ、日常生活において問題が生じた時、全能の神に頼ることが許されています。そして、神はすべてのことを働かせて益としてくださるとの約束がありますから、問題に振りまわされてばかりいるのではなく、必ず神はこの問題を通してもご自身の栄光を現わしてくださる、との信仰による平安がいつも与えられています。

わたしは、あなたがたに平安を残します。わたしは、あなたがたにわたしの平安を与えます。わたしがあなたがたに与えるのは、世が与えるのとは違います。あなたがたは心を騒がしてはなりません。恐れてはなりません。

（ヨハネ　14・27）

三つめは、家族が、神のみことばを土台として歩み出し、イエス様によって、一つ心にされたことです。私たち家族は毎日のように失敗をします。けれども、失敗に終るのではなく、失敗を通して、神の戒めを体験的に教えられ、ひとつずつ学ばされています。子供が親につく小さな嘘でも、神は必ず明らかにされます。口先で親をごまかしたつもりでも、神をごまかすことは決してできないのだと知った子供は、神を恐れることを学びました。

思い違いをしてはいけません。神は侮られるような方ではありません。人は種を蒔けば、その刈り取りもすることになります。（ガラテヤ　6・7）

また、子供がクリスマスのプレゼントにもらったばかりのおもちゃを友達に壊され、人を心から赦すということの難しさを知ると同時に、イエス様は、自分のすべての罪を赦してくださっているという神の大きな愛を覚えて、人を赦すことを学びました。

お互いに親切にし、心の優しい人となり、神がキリストにおいてあなたがたを赦してくださったように、互いに赦し合いなさい。（エペソ　4・32）

最後に、イエス様が次男になしてくださった大きなみわざについて記します。

次男は赤ん坊の頃からひどい喘息に苦しんでいました。私ども夫婦は、全能の神を信じた時から、この病気を取り除いてくださいと祈り続けてきました。

またイエスは道の途中で、生まれつきの盲人を見られた。弟子たちは彼についてイエス

に質問して言った。「先生。彼が盲目に生まれついたのは、だれが罪を犯したからですか。この人ですか。その両親ですか」イエスは答えられた。「この人が罪を犯したのでもなく、両親でもありません。神のわざがこの人に現われるためです」（ヨハネ 9・1〜3）

このみことばを読んだ私どもは、次男にも神のわざを現わしてくださると信じ、神のわざとはいやされることだと思い込んでいました。しかし、喘息はなかなか治らず、一年のうちで、冬の間を除き、毎晩のように咳に苦しみ、夜はほとんど熟睡できない状態でした。ある夜、ひどい発作で寝ていることができず、妻は一晩中せおって過ごしたことがありました。あまりのつらさに、妻は神に対して、つい愚痴をこぼしてしまいました。「どうして、この子はこんなに苦しまねばならないのですか。私ではなくどうして幼いこの子が」と。

その時、私どもは「ただ神を信じているというだけではなく、神のなさることすべてについて自分を明け渡して、受け入れなければならない」ということを学ばされました。

私どもは、神に対して、ヨブのように言わざるをえませんでした。

ああ、私はつまらない者です。
あなたに何と口答えできましょう。
私はただ手を口に当てるばかりです。
一度、私は語りましたが、もう口答えしません。
二度と、私はくり返しません。（ヨブ 40・4〜5）

しかし不思議なことに、その時から、次男は、ひどい発作は起こさなくなり、学校にも無欠席で通学できるほど丈夫になりました。

神のなさることは時にかなって美しく、私どものような小さな家庭の中でさえも、最善をなしてくださっています。神に感謝します。

神、その道は完全。
主のみことばは純粋。
主はすべて彼に身を避ける者の盾。

（Ⅱサムエル　22・31）

▼会社の玄関で。辻田浩康氏。



偶像から解放されて

宮田　清枝

東京都に生まる。練馬区立第三小学校、豊島ヶ丘中学、高校を経て、山脇服飾美術学院に学ぶ。中学生の時に知り合ったご主人哲さんとは、10年越しの恋愛の末結婚。真見ちゃん、千佳代ちゃん、万起子ちゃんという三姉妹の力強き母である。



▲'69年10月17日、小さなケーキに注目。



▲米国からのお客さまを迎えてご家族全員集合。

◀'82年4月18日、ご主人哲氏のバプテスマ(洗礼)の日。

イエス様を信じるまでの私の人生を、あれこれ振り返ってみますと、物欲のままに、ただ物質的なものだけを求めて生きてきたことがわかります。高校を卒業するまでは、学校の規則に従わなければならないので、イヤイヤながらでも従ってきました。でも勉強は嫌いですから、親の意見に逆らって、大学はやめて専門学校へ行くことになりました。この学校に入る前は夢がいっぱいあったのですが、専門をものにするまでの根気はなく、結局は花嫁修業に終わってしまいました。それというのも、そこでの毎日は、勉強に行くというよりも、ファッション・ショーに行くような感じで、デパートや商店を見て歩き、洋裁店に入っては気に入った形の洋服を作ってもらう、というのが日課のようになっていたからです。この物質の欲は、両親がすべてかなえてくれるので、不平があるわけはありません。でも両親は、「こんな我がまま娘は嫁のもらい手がない」といつも口ぐせのように言っていました。自分自身を持て余していた私は、本当に親の言うとおりの、どうしようもない娘だと自分なりに反省していました。

花嫁修業奮戦記

こんな私はお見合いでは絶対結婚できない、と思っていましたので、それならば恋愛結婚以外にはないと本気で思い込みました。現在一緒になっている主人ですけれども、高校時代からあこがれていたので、絶対に自分の力でものにしてやろうと決心しました。ところが、こればかりはお金を出しても買えないし、何とか好かれようと努力をしても、人の心を動かすことはできません。その上、ほれた弱みに付け込まれ、主人は、無理を承知でいくつかの理想の条件を私につき

つけてきたのです。これには参りました。当然そんな条件に合うものは、私には何ひとつありません。とても悲しい日々が続きました。努力しても、自分を急に変えることはできないし、ごまかしても、すぐに地がでてしまうし、もう自分自身がいやになり、自信がなくなりました。でも主人を自分のものにしたい一心から、その条件に少しでも近づこうと思い、家事を覚え、よその家庭はどんな生活をしているのかを勉強しようと、住み込みのお手伝いさんになりました。その時の両親は、私をただただかわいがってくれていたものですから、心配でたまらない様子でした。それでも、我がままに育って、洗濯ひとつしたこともない私の行く先を案じて、働きに出してくれたのでした。そこでの生活は、朝六時に起き、夜の一時か二時頃まで働くといった厳しいものでした。一週間辛抱できれば次の一週間も辛抱できるのだから、と自分に言い聞かせながら働きました。今与えられているこの仕事をきちんとやらなければ、と一生懸命でした。月に二回休みをもらい、家に帰ることが唯一の楽しみです。家での休暇を楽しみ、再び仕事にもどる時、父は車で送ってくれるのですが、別れぎわに父の目から涙が流れるのを何回も見ました。そのうちに父は、電車で帰りなさい、と言って送ってくれません。私は別れを悲しむ父親の愛を感じ、とても嬉しく思いました。そのことだけではなく、父がいつでも私のことを心配してくれているのを感じていました。やがて家庭の中の仕事はだいたいできるようになり、様子もよくわかりました。でも自分は少しも変わりません。主人の条件には、少しも近づけませんでした。でもあまりに私が主人に従順になろうとしているので、主人はあきらめて、全部の条件を取り下げてくれました。

ところが今度は、主人の両親に結婚を反対されることになってしまいました。そこで私たちは

駈け落ちしてしまったのです。この時は、私に何の物質的な欲望もありませんでした。好きな人と一緒に生活ができれば、何もないアパート生活でも、楽しくてしようがありませんでした。二ヵ月後に、友人たちが会費制の結婚式を計画してくださいまして、私たち二人はまだクリスチャンではないのに、聖ドミニコ渋谷カトリック教会で、式を挙げることができました。父は出席しませんでしたので、よその結婚式に招待されて行くたびに、娘にこんな結婚式をさせてやりたかったと思うそうです。父親の夢をここでも壊してしまったのです。

ああ結婚

結婚して間もなく、長女が生まれました。そこでアパートが狭くなったので、今度は自分の家が欲しくなりました。この時も、父は私を不憫に思い、協力してくれたおかげで、家を手に入れることができました。立て続けに次女が生まれました。でもそうとう運が強いと思っていた私にも、バチが当たり始めるのです。次女が九ヵ月になった頃から、首のまわり、わきの下、ももに腫瘍ができ始めました。どこの病院に連れていっても、検査、検査とひねり回すだけで、全然原因もわからないのです。薬をつけると、よけいひどくなるのです。三十九度ぐらいの熱が二、三週間続くことがしばしばあり、腫瘍とリンパ線のはれの痛みで毎日泣くという状態が四年以上も続きました。その間、あっちこっちのお医者さんに子どもを連れていくと、「こんなにひどくなるまで放っておいて、だらしないお母さんだ」としかられてしまいました。

主人は結婚しても、公認会計士の勉強を続けていましたが、なかなか合格しません。とうとう

あきらめて別の仕事をすることになりました。しかし経験のない新しい仕事はどうもうまくいきません。朝早くから夜遅くまで働いても、毎日雪だるま式に借金が増えてゆきます。それでも、主人は一度もイヤな顔を家庭に持ち込むことはなかったのですが、仕事、仕事でほとんど家にはいませんし、私の方は、お金がないからイライラするし、子どもは見すかしたようにギャーギャー泣くし、何のために私は生きているのかわからなくなって、しょっちゅう死んだらどんなに楽になるだろうと思いました。でも両親に親孝行していないし、善い行いもしていない自分にとっては、今自殺したら地獄しかないと思うと、死はとても怖いものでした。そのような中で私は、医者に信頼することもできないし、実家に行ってもお金はくれるけれど、子どもの病気や、主人の仕事をよくしてくれるわけではないので、何かにすがりたいと思うようになりました。

苦しい時の神頼み

私の実家は先祖を大事にしますので、月一回はお坊さんが拝みに来ます。私の心配ごとをお坊さんに相談しました。するとお坊さんはすぐに拝んでくれました。そうしますと、主人の実家の先祖に水の事故で亡くなった者がいるというのです。本当にいるのです。水死の霊というのは成仏できないので、因縁を取り払うには大変だというのです。宮田家はもう絶える家だから、ご先祖のご供養をしなさいと言われたので、毎日拝んでもらいました。もう「絶える家」と言われているので、これから先どんな災難が起こってくるのか恐ろしくてしようがありません。

供養をしても、子どもの病気は悪くなる一方なので、今度はお光り様に見てもらうことにしま

した。これは手から出る熱で病気を直すという霊験です。主人も子どもの頃に頭中おできができ、このお光り様で直った体験がありますので、すがる思いで死にかかっている子どもを車に乗せて、一時間半かかって連れて行きました。毎日そこに通っているうちに、十日くらいすると元気になってきたように見えました。はれ物はいっこうによくなりませんが、生気のなかった子どもの顔が少しづつ元気な顔へと変わっていきました。このお光り様でも先祖のことを言うのです。このような因縁の深い家に嫁に来たのだから、この因縁を浄化することが嫁の務め。そのためには天照大神を拝み、苦しんでいる人を霊気によって直してあげることを、今度は私が他の人に分かち与えなくてはなりません。いつも泣きあかしている子どもと一緒ですし、なかなかこれも思うようにゆきません。

八百万の神々

それでは今度は名前が悪いのではと、姓名判断で見てもらうことにしました。病気もちの子どもは、生まれてすぐに姓名判断によって選んで付けた名前ですから、別に悪い名前ではないのですが、私と主人の名前が悪いというので、変えることになりました。その姓名判断の先生は方位も見られるので、毎月一回、方角の良い神社でお水とお土をもらい、お札を買ってきて神だなに祀りなさい、と言います。家からなるべく遠い神社がよいといわれますので、私たち家族と私の母は、毎月一回、一日がかりで遠出をしました。そして医者からの薬がなかったので、井戸水をたくさんもらってきては、薬がわりに子供につけてあげたり、飲ませたりしました。

神だなは関東各地の神社のお札でいっぱいです。先祖からの因縁や運命は、神や仏に変えてもらうよりしかたがないけど、自分の行いは自分で直さなければいけないと思い、今度は実践倫理に通うことになりました。早起き会とも言います。朝四時に起きて毎日通いました。朝の三つの誓いを心にしっかりと留め、今日一日、感謝の生活を送るように努力します。三ヵ月くらい続けているうちに、支部長さんが私の相談に応じてくれることになりました。私の声を聞くなり、「あなたの声が悪い。亭主を尻に敷く悪い声だね。もっと女らしい声を出さなければ、ご主人の仕事はよくなりません」と言うのです。アーア、とうとう声まで変えなければいけないかと思うとウンザリします。「あなたは親の反対を押し切って結婚したから子どもが病気をするのです。親孝行をしなさい」。とても気にしていることをズバズバ言われるのですが、解決の道を見つけることができません。この時は小さな子どもが三人いましたので、病気は絶えずありました。すべて私の悪い行いのせいなのです。

とにかく、ありとあらゆるものにすがって一生懸命努力して、子どもや家族のために良い人間になろうと思いましたが、なかなか思い通りにはならないし、心の中はイライラして、怒ったり、恨んだり、憎んだり、子どもを叱りたいと思ったりする気持ちをただ抑えるだけで、うわべは少し変わったように見えますけど、心の底は少しも変わってはいません。私は、心の中が変わらないのでは解決にならないと思いましたが、善い行いができるようになんとか努力しようと思いました。

それでも足りずに、千手観音菩薩様を祀っている大日講というところにご縁がありまして、こ

こにも子どもの病気と、主人の仕事がよくなるようにしてください、と頼みに行くことになりました。ここもご先祖です。時々しか行かなかったお墓参りに、月一、二回からやがては毎週一回ずつ行くようになりました。それまで、お経はお坊さんが読むものだと思っていたのが、大日講に入信してからは私自身が、意味もわからないのに、般若心経を朝に昼に夜に夜中にと読むようになりました。お経を読むことによって心は落ちつき、私は救われる思いでした。千手観音の顔も大好きでした。とても静かで優しい顔をしていました。千本の手によって、多くの災いから護ってくれるような気がしました。

さらに、滝にうたれて悪霊を追い出す滝修業に月一回行ってからだを清めました。けれども、これらをすべて続けてゆくには、大変なお金が必要です。ご先祖を供養するための護摩供養には、うちの場合十万円はかかります。滝修業も一人五千円で、家族五人ですのでとてもお金が続きません。私は会費だけ納めて、特別のご供養は頼むことができないものですから、待遇も、いごこちもよくありません。自分たちの生活のためや、レジャーに使うお金はあっても、先祖供養に使うことのできないケチな腹の中、と神様に見すかされているだろうと思うとなにか後ろめたさを感じながらも、この宗教に入っていればいつかはよくなるだろうと、すがる気持ちで三年間通いました。

その時点ではそのまま続けるつもりでした。その生活で満足させようとしていましたが、家庭内の不満と、やり場のない淋しさと哀しさがいつも心から離れません。毎日二、三度は死ぬことを考えるのです。もうこれ以上惨めになりたくない気持ちと、これから先、もっともっと恐ろし

いことが起こるのではないかという不安から逃げたかったのです。でも善行のできない者が死んだら、地獄しか行かれないと思うと、死はとても怖いものです。

満たされぬ思い

そうこうしているうちに、次女が幼稚園に通う時期がやってきました。またもや問題が出てくるのです。入園式の日から、毎朝幼稚園へ行くのをいやがります。家の前から八時十分にスクールバスに乗せて幼稚園に行かせます。でも幼稚園の門に立ったまま、中に入ろうとしません。帰りの時間の午後一時半まで、毎日幼稚園の外に立っていました。親と子の闘いでした。かわいそうに思いました。何度か幼稚園をやめさせてしまおうと考えました。でもここでやめさせてしまったら、小学校に入学しても同じことをやるようになってしまうだろうと思い、心を鬼にして、毎日叩くなどして行かせました。何回も歩いて帰ってきてしまうのですけれど、そのたびに子どもは叩かれるものですから、幼稚園の門の所に立って、終わるのを待っているようになりました。かたくなにも一年間続けました。まだ親の自由になると思っていた、この小さな子どもの心の中に、私はひとつも入っていかれません。子どもの持つ悩みさえ解決してあげられないのです。母親の資格のなさをつくづく感じさせられました。何を教えてあげたらよいのだろう。私はその都度その都度、何となく解決しながら生きてきたのですから、これが正しい、これが間違いですと、はっきり子どもに教えることのできない自分を思い知らされました。子は親の鏡といいます。私に似たら絶対良い子に成長するわけがないと思い、なるべく私から離して、誰か尊敬できる人に

子どもを育ててほしいな、と思う心でいっぱいでした。

そのようなことを考えているうちに、主人の友人である大野好則さんの奥さん、久美子さんがお琴を教えているというので三人の子どもに教えていただくことになりました。毎週一回通いました。二、三年通っているうちに、大野夫妻がクリスチャンであることと、家庭集会が琴のおけいこが終わってから晩にあることを知りました。何回も何回も家庭集会に誘われましたが、私は仏教を信仰しているし、拝んでいればいつかは願いもかなう時があると思い、このままの生活をまじめにコツコツやっていれば、と自分に言い聞かせて、お断わりしました。正直なところ、この上さらにキリスト教にかかわったら、完全に気狂いになると思って、宣教師のベックさんや、飯守さんが来るという集会の日は、琴が終わると急いで逃げて帰りました。ところがある日、大野久美子先生に、一度ベックさんの話を聞いてみないことには、聖書や信仰について何もわからないでしょう、といつもより強く言われ、なんとはなしに、ちょっとだけ聞いてみようという気になりました。その日に初めて開く聖書でした。その時のメッセージは、意味はよくわからないし、何を言っているのかさっぱりわかりませんでした。でも今まで知っていたこととは、まったく違った世界に触れたと思いました。メモをしておいて家で読み返さなくてはと思い、メモをとりましたが、家に帰ってそれを読み直しても、まるでわからずに終わってしまいました。それから二、三日後、ベックさんと一緒に、お祈りしました。何が何だかわからないうちに、どんどん話が進んでいってしまいます。二週間後に洗礼式です。その二週でまず聖書を読まなくてはと思い、読み始めました。本などあまり読んだことのない私が、どこにも行かないで毎日、朝から晩

まで読むものですから、主人がびっくりしてしまいます。変わったなあ、と言うのです。でも何回読んでも理解できないし、頭に入ってこないのです。漢字にはふり仮名がふってあるから、三歳から読めるというのに、どうして私にはわからないのだろう。何とか理解しようと努めますが全然わかりません。「そうだ、キリストが神さまなら頼めばよい」。そこで聖書を開く前には、必ずお祈りをしました。わかってもわからなくても読んでいるうちに、旧約聖書から、

わたしは、あなたをエジプトの国、奴隷の家から連れ出した、あなたの神、主である。あなたには、わたしのほかに、ほかの神々があってはならない。あなたは、自分のために、偶像を造ってはならない。上の天にあるものでも、下の地にあるものでも、地の下の水の中にあるものでも、どんな形をも造ってはならない。（出エジプト記　20・2～4）

というみことばを強く示されました。これは私にとっては恐ろしいことばでした。神社のお礼が何十枚もあり、大切に持っていたからです。しかしそのような偶像礼拝から解放してくださる神さま、天地を創造された唯一の神さまに信頼することを決心しました。偶像礼拝から解放された私はとても自由になって、朝は聖歌を口ずさみ、爽快な心で一日を迎えるようになりました。今まで不満に思っていた主人のことも、イエスさまを知るために必要であったのだ、と気づかされました。子どもの病気もすぐに治っていたら、こんな頑固な私はイエスさまを知ることができなかったと思います。

偶像から解放されて

以前はあれほど熱心だった先祖のご供養も、吉祥寺キリスト集会に集って、聖書は先祖のご供養を何と言っているのかを知ることができて、その恐ろしさで、イヤ気がさすようになりました。クリスチャンは、おそらくそうではない人たち以上に、死んでしまった人に対して感謝の念をもっていると思います。でも聖書ははっきりと、祖先崇拝も偶像礼拝であると言っています。死んだ人の霊は、イエスさまのみもとにいるか、または死者の国にいるかのどちらかなので、この世にはいないのです。ですからいくら供養をしても、そのことによって、死んだ人の霊に働きかけることはできないのです。死者、祖先崇拝の背後には、悪魔がいます。悪魔が、多くの人が本当の神に出会って、救われることを邪魔しているのです。けれども、私が聞いたところでは、多くの教会がそのようなことを知らないで、あるいは人々から誤解されたくないために、祖先崇拝に対してはっきりとした態度をとらないでいるそうです。でもこれは神さまが悲しむことですし、そのようなあいまいな態度によっては、決して人々の心が、生けるまことの神さまに開かれるということはありません。

今まで自分自身が悪い人間だと気がつくと、すぐ地獄に落ちると思っていましたから、何とか自分は悪い人間ではない、と打ち消そうと悩みましたが、イエスさまは次のように言われます。

医者を必要とするのは丈夫な者ではなく、病人です。わたしは正しい人を招くためではなく、罪人を招いて、悔い改めさせるために来たのです。

（ルカ　5・31、32）

私は罪人なのです

彼らの口には真実がなく、その心には破滅があるのです。
彼らののどは、開いた墓で、彼らはその舌でへつらいを言うのです。（詩篇　5・9）

義人はいない。ひとりもいない。悟りのある人はいない。神を求める人はいない。すべての人が迷い出て、みな、ともに無益な者となった。善を行なう人はいない。ひとりもいない。彼らののどは、開いた墓であり、彼らはその舌で欺く。彼らのくちびるの下には、まむしの毒があり、彼らの口は、のろいと苦さで満ちている。彼らの足は血を流すのに速く、彼らの道には破壊と悲惨がある。また彼らは平和の道を知らない。彼らの目の前には、神に対する恐れがない。（ローマ　3・10～18）

この姿は私です。恐れと虚勢を完全に取り去ってくださり、罪を自覚させてくださり、一足一足成長させてくださる私の神が、

すべて、疲れた人、重荷を負っている人は、わたしのところに来なさい。わたしがあなたがたを休ませてあげます。（マタイ　11・28）

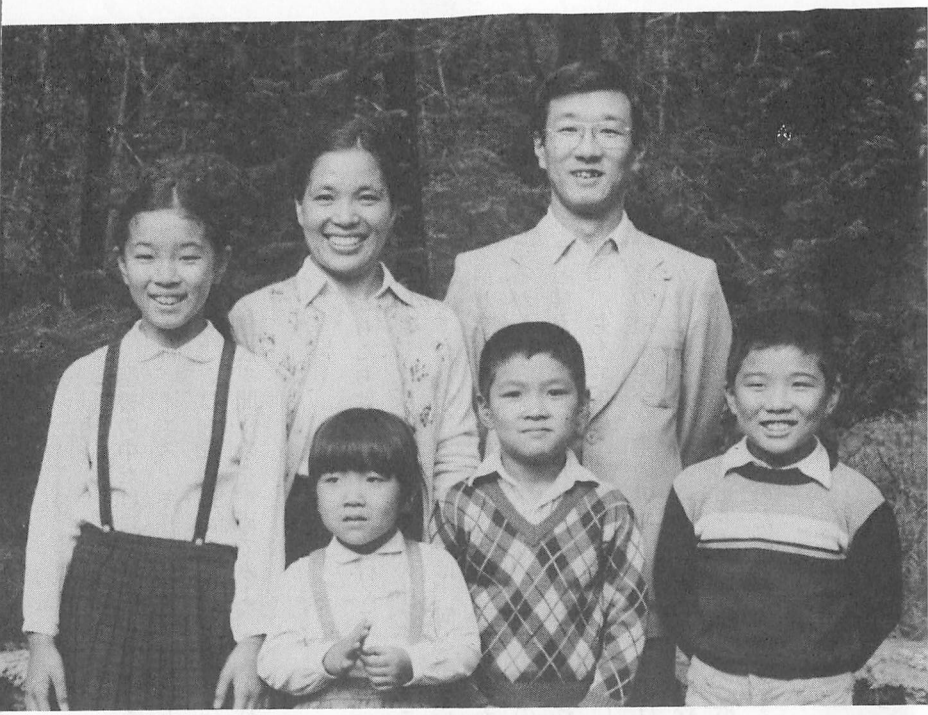
と約束してくださいました。イエスさまの救いにあずかることができて、今本当に感謝しています。子どもの病気も快方へと向かい、その子どもに「真理はひとつ」と教えることのできなかっ

た私でしたが、今は、聖書の中だけに真理があることを教えることができます。母親としての責任は、子供に聖書の神、イエス・キリストを教えることのほかはないと思っています。

主を恐れることは知識の初めである。わが子よ。主と王とを恐れよ。
わが子よ。訓戒を聞くのをやめてみよ。そうすれば知識のことばから迷い出る。
（箴言　1・7、24・21、19・27）

現在三人の子どもたちは、日曜学校へ行くことを第一にしています。親と子の関係が、子どもの成長とともに崩壊してゆく社会の現状の中で、主イエスに委ね、信頼することができ、多くの不安も主に解決していただけるというのは、何と素晴らしい特権でしょうか。あのようにいろいろな神さまを信じていた私ですから、そのうちにまたかわるのではないかと主人は思っていたそうです。ところがしばらくすると主人は、「清枝、本物の神を見つけたね。清枝は天国に行かれていいなあ…」と言うのです。主人もイエスさまのあわれみによって、救われることができました。私の家の中心に、主イエスがいてくださることを感謝しています。

神、その道は完全。主のみことばは純粋。主はすべて彼に身を避ける者の盾。まことに、主のほかにだれが神であろうか。私たちの神を除いて、だれが岩であろうか。この神こそ私に力を帯びさせて、私の道を完全にされる。彼は私の足を雌鹿のようにし、私を高い所に立たせてくださる。戦いのために私の手を鍛え、私の腕を青銅の弓をも引けるようにされる。
（詩篇　18・30～34）



▲'83年秋の軽井沢修養会。ご家族全員。

曙(あけぼの)からお昼過ぎまで

松見　敬三

一九四八年岩手県九戸郡に生まる。三人兄弟の三番目。盛岡市立桜城小、下橋中、県立盛岡一高を経て上智大学でドイツ語を学ぶ。安宅産業に五年半在籍後、日本IBMに移籍。趣味は読書、西洋古典音楽鑑賞、植物を種子から育てて大きくすること。家族は妻とみえさん、長女晶子さん、長男透君、次男光君、次女純子さん。

家庭集会　練馬区上石神井一-五〇八-一サンハイツ田中一〇三

電話〇三-九二九-五二一六（日時は不定期）

信仰のきっかけ

見よ。国々は、手おけの一しずく、はかりの上のごみのようにみなされる。
（イザヤ　40・15）

聖書にはこのように、私たちが大きいと考えている国家でさえも神様のはかりの上ではごみのように小さなものだと書かれています。ましてや、総合商社の一つや二つ、生まれようが消滅しようが、驚くには当りません。

私は昭和四十六年に安宅産業に入社しました。当時安宅産業は巨大な総合商社の一つで、不沈艦のように思われていました。古くから堅実経営で知られていた会社で、私もその風評にひかれて入社を希望し、それがかなった次第でした。しかし、この不沈艦と思われていた巨大な総合商社は、六年後には跡形なくこの世から消滅してしまったのです。

当時は就職の決定が早く、私も四年生になった春の五月には早くも行く先が決まっていました。その五月の連休に、ふとしたことから私は軽井沢のバイブルキャンプというものに参加することになり、同級生の越智君といっしょに五月二日の夜、まだ寒風肌を刺す軽井沢の駅に降り立ち、タクシーでキャンプを目指していました。

目的地に着くと、そこには広い敷地の中に二、三の建物があり、灯の洩れている明るいガラス戸に近づいてみると、ちょうど集会が終ったところらしく、一人の女性が聖歌を歌っているのが見えました。三十人ほどの小さな集会でした。私たちは入口のガラス戸を通して中の様子をしばら

くうかがっていました。夜は更けて、九時頃だったと思います。
そのときちょうど、私の人生も光の見えない真夜中の状態でした。

当時の私は、真面目な方の学生だったと思いますが、精神的にはスタミナがなく、自信喪失の出口なし、劣等感と優越感の混在、対人関係への不安とおもねりと失望、ガールフレンドの不在、麻雀の仕方を知らない、翌年には社会へ出る不安、自分の性格がいやだ等々と憂うつな日々の中にあり、国電四谷駅近くのパブでウォッカを飲んで憂さを晴らしたりして酒の有難味を覚えながら、人生の真夜中をさ迷っておりました。

そのような生活のある日のこと、四谷の大学の構内で、憲法の相沢久教授と出会いました。私は大学におりながら、一般に先生方を敬遠する方でしたが、いっしょにいた越智君が近よって話を始めたので、私も仕方なく言葉を交しているうちに、相沢先生がいつかのゼミで、吉祥寺のドイツ語聖書クラスの紹介をされたことを思い出しました。

話の途切れの助け舟のつもりの一言が、人生の正道へ導かれるきっかけとなるのですから、神はどういう所で働かれるか分かりません。思いもよらず私の方から申し出て、吉祥寺のドイツ語クラスに紹介していただくことになり、この数分間が人生の分かれ道となりました。

このようにして、吉祥寺のベック宅でのドイツ語聖書研究会を皮切りに、水曜日の集会、軽井沢での修養会と誘われるままに、私は聖書に親しんでゆきました。

軽井沢でのことですが、そこに参加していたある方にお会いしたときに、彼が、私の知人によ

く似ていたので、少し考えさせられることがありました。その知人は、その時から一ヵ月前に、自殺していたのです。私が相沢先生と吉祥寺集会に初めて集う前の日に、私の母が上京し、その知人が自殺したというニュースを持ってきました。この人は田舎の米屋さんで働いていた人で、私の家に米を届けてくれていたこともあり、独特の岩手弁で話す人でした。彼はその後上京して大学に学び、昭和四十三年の岩手県人会で私は彼に会いました。その時の話では、彼は苦学している様子でしたが、いずれアメリカに渡るんだと言って大層元気でした。しかしその後は盛岡に帰り、私が夏休みに帰省したときは、東京の話を聞きたがっているということを耳にしました。母も私に会いに行くように勧めました。しかし私は億劫に思ってついに一度も尋ねて行きませんでした。その彼が自殺したというニュースは私にとってショックでした。原因は失恋によるものでクレゾールを飲んでのことだったと、母が持ってきた田舎の新聞の切り抜きに書かれていました。私が彼を尋ねて行って親しい友人になっていたとしても、結果は同じことであったかも知れません。しかし自分の人づきあいを億劫がる性格が彼を自殺させてしまったような気がして、良心の呵責を覚えずにはおられませんでした。

このようなこともあったので、軽井沢の帰りの汽車で集会の蘇畑さんと話しているうちに、ほんとうに自分が一体どこに向かって進んでいるのかとひどく不安になり、このままだと自分の行きつく果ては滅び以外にないということがはっきりと分かってきました。今のままの人生を続けるのが良いか、聖書に従うのが良いかという決断を前にしましたが、後者の方に分がありそうだという予感が強くなり、雨風にかかわらず吉祥寺の集会へ通い続けました。

そのうち、自分の罪が少し分かり、自分はそのままでは滅びるということが分かり、イエスの十字架による罪の赦しを受け入れ、私は昭和四十五年六月吉祥寺集会で洗礼を受けました。

洗礼を受けて、初めのうちはクリスチャンになった嬉しさが続きましたが、やがて自分の罪がいよいよ明らかになり始め、イエスを受け入れたときよりもいっそう自分の罪の深いことを見るようになりました。この時から、古い自分自身との対決が始まり、それは今に至るまで続いています。しかし、「罪が増し加わるところには恵みもいや増せり」のみことばの通り、自分の本当の姿が明らかにされるにつれて、十字架で流されたイエスの血潮の意味と必要性がよく分かるようになり、礼拝の中心がイエスの十字架のみわざであるということが体験的に分かってきました。自分の高慢さやうぬぼれに気がつくと、ほんとうに赤面する思いがして、自分が自分自身のことを何も知らなかったことを思い知らされます。神と人との交わりを通して初めて、私たちは自分の姿に気がつくものです。

福音集会のメッセージの中に自分の姿を指摘された思いがして、ハッとしたことは何度もあります。集会につどい、みことばを聴くことによって、聖書の正しさに目が開かれていきました。しかしまだ人を見たり、古い性質を表わしたりの信仰生活でした。悔い改めも不完全であったと思います。ですから神は身の回りの出来事を通して私の高慢を砕こうとされました。

就職と信仰

私が昭和四十六年四月に安宅産業に入社した頃の私の信仰はそういう状態でした。不完全な悔

改めが社会生活の中での信仰を危うくしていました。大人の世界は甘美と不信仰の世界でした。

学生時代が終わり、社会に出ると、そこは大人の世界です。今まで行ったこともないようなところにも連れて行ってもらい、社会生活の中の「自由」を味わっているうちに、もう信仰は窒息しかけていました。商社の仕事は忙しく、とても信仰どころではないという考えが日増しに大きくなり、遂に二週間ほど集会から遠のいてしまい、五月の軽井沢キャンプにも参加できないだろうと思い、自分が信仰から離れるのはもう時間の問題であるとさえ思うようになりました。「浮き世の風と波にもまれて」という聖歌がありますが、その中に歌われている「強き錨」がまだ私には無かったのです。

しかしいよいよもう危ないというある日、集会の宮田さんからの一本の電話によって私は再び二十日ぶりに集会につどいました。この電話がなかったら、私は別の哀れな道を歩んでいたに違いありません。

初めての軽井沢から一年目の軽井沢の祈り会で、どうか私の信仰を新たにしてくださいと祈りました。しかしこのあとの出来事を考えてみると、主なる神は私に全面的な信頼と悔い改めとを要求されていたことが明らかになってきます。主は徹底的なお方です。

結婚と信仰

武蔵境にある独身寮の屋上で私は時々、自分に良き配偶者が与えられるようにと祈っておりました。酒を飲むわけでも、遊ぶわけでもありませんから、帰寮後は何となく空しくつまらないの

でそのような祈りになったと思います。

そのように祈ったことも忘れた頃の九月の半ばに、集会のある方から私に結婚の話が舞い込みました。その相手はもちろん今の私の家内ですけれども、結婚に至るまでには、家内も私もそれまで味わったことのないような苦悩を経験することになりました。

当時の家内は信仰的に弱っていたようで、その結婚話を紹介してくださった方は、家内の信仰を支える意味もあって、私に結婚の話をもってこられました。

その事情を聞いたので、私はもし自分がこれを断れば、彼女（家内）は、もしかしたら信仰から離れることになるかも知れないと思ったので、それから二週間後にお受けする旨の返事をしました。しかしこのような決断は私の高慢な心から出ていたことが後になって明らかになります。

家内との交際は始まったものの、私にはどうしても喜びがありません。しかし家内の方は有頂天になって喜んでいました。このアンバランスな二人の状態のままで、翌月、集会で婚約発表しました。それまで私たちの間を知る人もなかったので、この突然の発表は、瞬時の当惑をさえ集会に与えたのですが、そのあとでは多くの方がたが喜んでくださいました。

しかし家内の喜ぶ様子を見たり、集会での祝福の言葉を聞いたりするうちに、私の方はだんだん憂うつな気分になってきました。私の母への連絡の不手際による誤解なども重なって、この憂うつはやがて絶望的な気持ちに変わり、傍目にも何かおかしいと感じられるようになりました。

翌年一月に、ドイツからベックさんが戻ってこられ、すべてが明らかにされる時がきました。婚約中の身だというのに、全然喜びのない私の様子に不審の念を持たれたベックさんは私を部

屋に招いて、事情をくわしく聞いてくださいました。私は現在の悩みをありのままにお話しし、結婚に対しては義務と同情が八十パーセントで、彼女（家内）に対する愛情は、二十パーセントぐらいしか無いと思われることも正直に言いました。この数字は、今でもからかい半分に私たち夫婦の間で出てきて、そのたびに私は弱るのですが、今ではもちろん、家内への愛情は二十パーセントなどといったものではなく、「百パーセント」に達しております。

しかしこのとき、ベックさんははっきりと、「愛情のない結婚は、止めるべきだ」と言われました。

私たちの結婚についての様々な言葉の中で、この一言はずしりと重く、そしてそれまでの私の高慢な思いと態度を打ち砕かずにはおきませんでした。また、この日、この時のことは強烈な印象として残り、私は、その日が二月六日の日曜日であったこと、また部屋の床のカーペットの柄がどのような模様であったかを鮮烈に覚えています（よほど頭が上がらなかったのでしょう）。このことはすぐ家内に伝えられ、私はもちろん、有頂点の彼女の喜びは打ち砕かれることになりました。この日から集会の何人かの方がたも私たちの苦しみ、重荷を分かちあって祈ってくださるようになり、私たちはといえば、お互いに徹底的に砕かれて、すべてを主のみこころに委ねるほかはない、という状態に置かれました。

会社と独身寮を往復する私は、ある夜、中央線武蔵境の駅から寮への道を歩きながら、すべてを主にお委せし、そして、はじめて平安をいただきました。そして、すべてを主が成しとげてくださるという確信を与えられ、私は解放され、主ご自身が私たちの重荷を負ってくださるという

ことを、初めてこの時学びました。

あなたの道を主にゆだねよ。主に信頼せよ。主が成し遂げてくださる。（詩篇　37・5）

また、その頃、田原米子さんのテープを、集会でお聴きする機会がありました。その中で、米子さんのご主人が語られた言葉によって、私は自分たちの結婚が、主のみこころであると心から確信できるようになりました。ご主人の言葉は、大体次のようなものでした。

「人間が生まれつき持っている愛とは、知識を愛するとか、仲間を慕うとか、かわいいからとか、要するに自分が気に入ったもの、愛しやすいものを愛するにすぎない。しかし愛し続けるということは、容易なことではない。結婚していっしょに朝晩顔をつきあわせてみると、今まで見えなかったいろいろな欠点も、見えてくる。人間の愛は、何々をしてくれたから愛するという小さな、勝手な、条件つきの愛にすぎない。しかし聖書の愛は、価値があるから愛するという愛ではない。主は、愛する価値のまったくない者を、愛してくださる、という愛である。私たちは、この神様の愛に満たされたときに、ほんとうに人を愛することができるようになる」

私たちは、この頃から主の祝福を覚えはじめ、主とともに歩むことのすばらしさを少しずつ教えられてゆきました。私たちの結婚は、信仰と切り離して考えられないばかりか、まさに結婚問題を通して信仰そのものを教えられる結果になりました。苦しみを通してすべてを主に委ねることを学んだのは、まだ信仰の幼なかった私たちにとって、最大の収穫でした。困難な出来事の中にこそ主の御声が聞かれます。このようにして、確信を与えられた日の翌々週、昭和四十七年五

月に、私たちは、今度こそほんとうに祝福されて婚約式を挙げることができました。また、この婚約式では、星淑子さんが救われ、また十月の結婚式の三日後に、新見節子さん（当時の小林節子さん）が救われたことは、主のみこころの大きな現われであり、私たちにとっても喜びの思い出となりました。

安宅産業の崩壊

このようなことがあって結婚した私たちですが、結婚後三年経った頃、私が勤めている会社に大変な問題がもち上りました。安宅産業は、石油の三国間貿易に行き詰まり、六百億円という膨大な債権の焦げ付きを抱えているということが、毎日新聞にスクープされ、明るみに出てしまいました。昭和五十年十二月七日のことでした。

この時点では誰も、会社がやがて崩壊して消滅するなどということは、想像すらできなかったと思います。しかし、それから九ヵ月後に、会社は希望退職の募集に踏み切り、さらに一年後には伊藤忠商事に吸収合併されて、伝統ある安宅産業は名前も形も無くなってしまいました。三千五百名いた社員のうち、千余名だけが伊藤忠商事に移籍し、あとの二千五百名余りの社員は、散り散りになってしまいました。当時の二年間というもの、安宅の社員は、やがて自分の会社が消滅するという、いわば沈みゆく船の上の人にも似た気持で勤務していたと思います。

スクープの後、年が明けて昭和五十一年一月二十日になると、それまで無かった労働組合が急遽結成され活動を始めましたが、私は人よりも主に頼るべきだと考えて、組合には加入しません

でした。多少の孤独と不安がありましたが、聖書の中の、「民よ。どんなときにも、神に信頼せよ」というみことばによって励まされていました。しかしその後、三月十九日に組合がストを決行し、組合員が座りこんでいる会社の廊下を通って自分の机に行こうとするときに咎められ、組合員である同期の社員と言い争ったときの空しさは、忘れることができません。

合併が発表された頃は、皆伊藤忠に行けるという甘い期待がありましたが、事態が進展するにつれ、その期待は、男子七百人という数字によって落胆に変わってゆきました。

希望退職募集の噂が流れ始め、いよいよ会社の崩壊が始まった頃の日曜日、元気なく集会で食事をしている私のところへ新見さんがきてくださり、新見さんの勤務する日本ＩＢＭという会社で人を募集しているので試験を受けてみないかと勧めてくださいました。新見さんの奥さんの節子さんは、かつて安宅で勤めていたということもあって、新見さんは特に私の置かれている情況を心配していてくださいました。しかし、自分が転職するということが現実となるべきその勧めの言葉に、私は一瞬ドキッとしたことを覚えています。

転職の可能性について考えなかったわけではありませんが、現実となると話は別です。ですから転職のお勧めにその場では即答できませんでしたが、その夜、新見さんの家に招かれたときに私は、もし道が開かれたらその道に歩むことを決心して、お勧めに従うことにしました。

採用試験の八月十二日は日曜日であり、集会での礼拝を終えてから私は試験場に行きました。自分にとっては生活をかけた重大な試験であったはずですが、不思議な平安が与えられていたことをよく覚えています。しかしその後の面接試験が自分でもどうも思わしくなく、一ヵ月以上過

ぎても何の連絡もないのでほぼ諦めかけていると、新見さんが通知の遅いのはかえっていいことだといって励ましてくださいました。そして合併一年前の十月九日に採用通知があったので、私は安宅を去る決意を固め、十月三十日付で退職しました。生まれて初めての辞表提出でした。当時同僚たちは伊藤忠との合併のための書類作りで忙殺されており、それを尻目に退職するのは心苦しく思われたのですが、私は主が開いてくださった道を歩み出しました。

主に仕える如く

安宅時代、中の中ぐらいのサラリーマンであった私は、コンピューターのコの字も知らないのにＩＢＭという会社に入ってしまいました。何も知らぬということは恐れを知らぬということでもあります。主が開かれた道であるという確信が無ければ途中で挫折したかも知れません。

一口にコンピューターといっても、必要な知識は膨大なもので、機械そのものはもとより、プログラムの知識から人前での発表のテクニックまで訓練され、私はとても吸収できずにすぐに消化不良に陥りました。転職を果たしたという喜びは悩みに代わり、精神的には絶えず圧迫感を覚え、肉体的には帰宅後すぐに眠りこけるほどに疲労が溜っていきました。

しかし訓練というのはいつでも辛いものであるはずです。当時の私の心構えは不十分であり、甘えていたとさえいえるほどです。罪の性質である高慢も見逃すことができません。自分の歩みを振り返ると、自分の責任で事態を悪くしていることがほとんどです。

しかし主はこの愚かな者をも顧みてくださり、悩みを通してへりくだりへと導いてくださり、主

に仕えるように仕事にも仕えることを教えてくださいました。主ご自身が自分を卑しくして地上を歩まれたことの重さを理解できるように思えてきました。

キリストは、神の御姿であられる方なのに、神のあり方を捨てることができないとは考えないで、ご自分を無にして、仕える者の姿をとり、人間と同じようになられたのです。キリストは人としての性質をもって現われ、自分を卑しくし、死にまで従い、実に十字架の死にまでも従われたのです。

（ピリピ　2・6～8）

今年は昭和五十九年。転職後早くも七年以上が経ちました。どじなことばかりを積み重ねながらも、次第に仕事にも馴れ、仕事に対する態度を聖書から教えられました。特に、次のみことばには、私たちサラリーマンがとるべき仕事への態度が示されていると思います。

人のごきげんとりのような、うわべだけの仕え方でなく、キリストのしもべとして、心から神のみこころを行ない、人にではなく、主に仕えるように、善意をもって仕えなさい。

（エペソ　6・6、7）

終わりに

私の人生はやっとお昼過ぎになりました。イエス様を知るまでは真暗闇でした。ですから自分自身のことさえ何も知りませんでした。十三年前から主の光の中を歩んで、自分の罪の性質が照らされて明らかになってゆくばかりですが、それは悲しみではなく、かえって主の十字架への感

謝となっています。自分の内側から出てくるものには確かに何も良いものがありません。しかし主ご自身と聖書から受け取るものは良いものばかりです。私は何度主を裏切ったか分かりませんが主は一度も私を裏切られたことがありません。そしてこの方が私を永遠に導いてくださると信じております。私の母や兄弟たち、そしてこの証しを読まれる方がたが聖書を真剣に読んでくださり、主イエス様をご自分の人生に迎え入れてくださること、これが今の私の一番大きな願いです。



▲'81年秋の軽井沢修養会の時、右から辻田氏、尾崎氏、松見氏、大庭氏、野田氏、上野氏。



▲'79年秋、ご主人と庭で。

▼'82年1月集会での証し。



すべてを主の御手に

（妻の証し）

古田　康子（みちこ）

東京都大田区に生まる。北糀谷小、大森六中、都立八潮高卒。三井銀行本店人事部人事課を経て結婚。家族は夫稔さん、長男雅一君、次男知士君。趣味は木彫。

家庭集会　八王子市谷野町九一六－一三三　電話〇四二六－九一－五〇七九（日時は不定期）

風はその思いのままに吹き、あなたはその音を聞くが、それがどこから来てどこへ行くかを知らない。御霊によって生まれる者もみな、そのとおりです。（ヨハネ 3・8）

昭和五十六年六月二十八日、私たち夫婦は、吉祥寺キリスト集会において洗礼を受けました。それは生涯における記念すべき感謝の日でした。

人は、新しく生まれなければ、神の国を見ることはできません。（ヨハネ 3・3）

人は、水と御霊によって生まれなければ、神の国にはいることができません。（ヨハネ 3・5）

ニコデモは、「老年になって、どのように生まれることができるのですか」と、イエス様に質問しました。のちに、私がそれと同じ問いかけを心の中でつぶやくとは、思いもよらないことでした。私は、母の胎からまるで当然のようにこの世に生まれ、命が誰によって与えられたか、などとは考えることもなく生きてきました。岐路に立たされた時、面倒なこと、いやなことはなるべく切り捨て、自分に都合のよいように安易な道を選んできました。

しかし、聖書に接するようになり、その選択方法では二進も三進も行かず、それがどんなに罪の姿であり、愚かな姿であるかをはっきり知ることができました。確かな基準があり、確信を持って従っていけるものがほしいと思いました。

従うこと、このことを主によって徹底的に訓練されました。「自分を捨て、自分の十字架を負い、そしてわたしについて来なさい」（マルコ　8・34）のみことばはきびしいものでした。「自分を捨てて従う」「従うことにより自分を捨てる」この二つがあとになり、さきになりましたが、主は右の手をさしのばされ、一歩一歩導いてくださいました。主は、御霊を私たち夫婦に送ってくださりまったく新しく歩み出す真実の夫婦につくりかえてくださいました。主の御名を賛美いたします。

姑（はは）の看病を通して

わがたましいよ。主をほめたたえよ。
わが神、主よ。あなたはまことに偉大な方。
あなたは尊厳と威光を身にまとっておられます。
あなたは光を衣のように着、
天を、幕のように広げておられます。
水の中にご自分の高殿の梁を置き、
雲をご自分の車とし、
風の翼に乗って歩かれます。
風をご自分の使いとし、
焼き尽くす火をご自分の召使とされます。

（詩篇　104・1～4）

私が救いにあずかるために、主は十五、六年前からすでに計画を持っていらっしゃいました。もちろんその時それを知るよしもありませんでしたが、苦しみ、悩みは大部分外から与えられるものだと思います。それを受け取る側の受け取り方の大小によって日常はずい分違ったものになります。私は、結婚による姑との同居を大きな悩みとして受け取りました。主人は一人息子で、父親はすでに亡く、母親と二人の生活を長くしていました。私の母はこの結婚に反対していました。しかし、結婚前から姑の人柄をよく知っていましたし、姑もやさしく気を遣ってくれていましたから、絶対にうまくいくと確信してスタートしました。けれども、人間的な確信ほど根拠がなく、状況によって変わりやすいものはないことを思い知らされました。表面的には目立ちませんでしたが、確執はかなりありました。姑はやさしい人です。私との間に感情的なトラブルがあっても、他人に対し、いつも私のことをほめている人でした。

私には、自分のしていることがわかりません。私は自分がしたいと思うことをしているのではなく、自分が憎むことを行なっているからです。私は、私のうち、すなわち、私の肉のうちに善が住んでいないのを知っています。私には善をしたいという願いがいつもあるのに、それを実行することがないからです。私は、自分でしたいと思う善を行なわないでかえって、したくない悪を行なっています。もし私が自分でしたくないことをしているのであれば、それを行なっているのは、もはや私ではなくて、私のうちに住む罪です。そういうわけで、私は、善をしたいと願っているのですが、その私に悪が宿っているという原理を見いだすのです。

（ローマ　7・15、18～21）

毎晩、明日からはやさしい態度で接しようと決心しました。そう決心し、床に入るのですが、朝になるとみことばの通り、私の思いとはまったく反対のことを行っていました。絶望を感じていました。私は私の罪をおおい隠すために、主人に対し愚痴を言わないことを守るようにしていました。そんな膠着状態が続くうちに、姑が重症の糖尿病であることが分かり入院いたしました。退院後、食事療法のためにカロリー計算をしながらの毎日の食事の仕度は、長男も小さいこともあってかなりの負担でした。血糖値の上下も気になることのひとつでした。その後、二、三年たって、今度はガンと診断され入院手術しました。腸ガンのため人口肛門がつけられ、いろいろトラブルがあって、その後始末に泣きたくなることもしばしばでした。ガンは五年間姑の身体を蝕み、転移するたびに入院をくり返しほんとうに気の毒でした。いわば、爆弾をかかえているという緊張状態が続きました。私は肉体的、精神的にまいっている時もあり心の中で解放を求めていました。他方、表面的には、かゆい所に手の届く、よく気のつく模範的な嫁を装っていました。五十年の夏、姑は昏睡状態に入り、私は病院に泊りこむようになりました。その間、主人は仕事仕事。ちょうどその頃、新しい仕事のためオフィスを開く準備もあり、病院には週に一度くらいしか顔をみせることができませんでした。ある晩、姑は意識なく、静かに眠っていました。ついうとうととしていますと、姑が私を呼びました。まさかと思い返事ができませんでした。「ママ」と再び呼びました。そして、「ありがとう」といいました。全身が凍りつく思いでした。翌朝亡くなりました。母の最後の言葉で、私自身そのものがひっくり返されました。嫁の鏡と言われつづけていた虚飾が全部はがされたのです。私は過労のため三ヵ月ほど寝たり起きたり食が進まず点

滴をしてもらったりの生活でした。毎晩、夢の中に姑が出てきました。「ありがとう」の言葉とは反対のうらみつらみを言う姑が、現実と過去の混沌とした中にいました。私はそのころ、姑の写真を直視することができませんでした。

問われた夫婦生活

姑の面倒をみることに追われつづけて、主人のことを意識することなく過ごしてきた十年間。姑への愛を、完璧に義務を遂行することにすりかえていた私。それを看破されないために主人の目を常に意識していた私。立ち止まって気がついた時、主人と私の間には、何一つ接点がありませんでした。事態はどうであれ、姑を真中にしてつながっていた夫婦でした。主人の目は完全に外に向けられていました。生活をやりなおすべく、意志の疎通をはかるべく、さまざまな方法を試みました。しかし、一方的な努力で虚しさは増すばかりでした。主人は夜中に帰るのはまだいい方で、明け方あるいは帰らない夜もありました。汗して働くのは家族のためとは建前で本音は自分の欲望、満足感を追い求めつづけている夫。家庭は本来の家庭の姿を消していました。一日に三分あるかないかの会話。これは夫婦ではない、子供にとって父親ではない。この生活形態は一体何なのか、自分は一体何者なのか、どの方向へ進むべきなのか。まさに、アイデンティティ・クライシスの状態でした。主人は、そんな私をいつまで女学生気分かと冷笑していました。夫を月給運搬人とあきらめ、自分の精神的自立、向上をはかり、何かを求めてエネルギーを使いました。しかし何によっても満たされることはなく、むしろ虚しさをカバーするためにもがいてい

る自分がはっきり映し出され憐れにさえ思えました。暗たんたる思いの中で次第に主人に対し、許せない感情は増し、憎しみさえ感じはじめました。ひそかに別れることを考えはじめました。そんな状態の中で家が手ぜまになってきたこともあり八王子に家を建てることになりました。結婚以来はじめて同じ目的を持ったのです。楽しいひとときでした。けれども建ち上がると共にすべては終りました。環境は変わりましたが、精神状態は以前とすこしも変わりませんでした。

人はみな草のようで、その栄えは、みな草の花のようだ。草はしおれ、花は散る。

（Ⅰペテロ　1・24）

初めて聖書を手にして

五十四年の一月に入って間もなくの頃、突然預金残高を聞かれました。しばらく無収入になる旨もちらりと言っておりました。会社で何かあったのでしょう。聞いても、常に何も話してくれないことに慣らされていましたのでくわしくは聞きませんでした。結局は持てる力を結集し、家庭を犠牲にして造りあげた会社を放棄したのでした。二ヵ月の浪人生活を経て新しい仕事に入りました。私は二ヵ月の間、さらに家庭について深く考えました。四六時中共にいましたが二人は別々のことを考えていたようでした。私たちの家庭はまさに砂上の楼閣でした。土台がないのですから、ひとつの波で崩壊するのは目にみえています。この時私はニコデモのように新生を、光を求めたのです。そんな時、あるひとから家庭集会に誘われました。聖書との関わりは皆無でした。しいていえば現在高三と中三の息子たちがカソリック系の幼稚園に通っていたことぐらいで

した。その時の講話に心動かされることもありませんでした。その頃家庭集会に集う時間的ゆとりはありませんでした。それでも集うことができたのはやはり導きとしか考えられません。聖書は知りませんでしたが、その中にかくされた宝があって、現在の状態からの脱皮の一助となるのではないかと考えました。初回のメッセージは正直言って期待はずれでした。罪、咎、贖い、救い、耳なれない言葉と文章の言いまわしになじめませんでした。ここには、私の求める解決はないと短絡的に結論を出しました。しかし、なおかつ集会に集いつづけることができたのは、みなさま方の心からの祈りによる主の導きと感謝しております。聖書に対しては熱心でなく集っておりましたが、少しずつ意識が変わってきました。しばらくして、未信者であるのに集会のために家を解放することを申し出ました。ベックさんが賛成され、集会が開かれるようになりました。心が晴れていた状態ではなかったのですから、集ううちにこれは聖書を徹底的に読まなければ前進しないと分かりました。

もし人の罪を赦すなら、あなたがたの天の父もあなたがたを赦してくださいます。しかし、人を赦さないなら、あなたがたの父もあなたがたの罪をお赦しになりません。

（マタイ　6・14、15）

このみことばに目が釘づけになりました。何回もくり返し目で追いました。姑を心から愛することのできなかったことへの良心の痛みから解放されずにいた私。積み重ねた十六年の結婚生活の結果残っているのは夫への愛でなく憎しみ。イエス様は、あなたが罪赦されたいならまず人を

赦しなさいと語っています。夫を赦すなら私の罪も赦される。果して無条件に夫を赦していくことができるであろうか。さらに追いうちをかけるように次のみことばが目に入りました。

妻たちよ。あなたがたは、主に従うように、自分の夫に従いなさい。（エペソ　5・22）

これはひどい。赦せない人を赦してさらに従っていきなさいとは……。今まで自分のやり方でやってきて駄目だったのだから、すべて結果はイエス様にあずけて、みことばに従ってみましょうと思いました。自己放棄でした。そして祈りました。

「私は私自身の罪も顧みず夫を裁いていました。憎しみやうらみの端切れを夫に貼りつけ、パッチワークを作りあげていました。赦すことができなくなってしまいました。イエス様は私の罪が赦されるためには夫を赦しなさいとおっしゃいます。赦すことができるかどうか分かりません。赦すことができますように助けてください」。

すぐに完全に赦すことは人間にはできません。自分の思いが先行しそうな時、心の真中にみことばを絶対的なものとして据えました。日々、みことばに頼るうち、赦され、解放され希望を持つことができ、光がさしこんでくるようでした。

キリストにお会いして

ある時家庭集会のあとベックさんとお話しする機会がありました。直感的に何かを感じました。イエス様は私にみことばを与えてくださり、自由と解放の道を歩ませてくださりほんとうにあり

がとうございます。けれども教会に束縛されるのはいやです…私はベックさんにこれは陰謀ですと言いました。死んでいった人、生きている人、数えきれない人間の罪のためにたった一人のイエス様が十字架にかかることで罪が赦されることが分かりませんとも言いました。ベックさんはにこやかにほほえんでいらっしゃり、ご自分がかつて示されたみことばを読んでくださいました。そしてベックさんと一緒に祈りました。そのあと、身体中の力がぬけてしまいベックさんの証しだけがぐるぐる頭の中を回っていました。

天の下では、何事にも定まった時期があり、すべての営みには時がある。生まれるのに時があり、死ぬのに時がある。植えるのに時があり、植えたものを引き抜くのに時がある。

（伝道者　3・1、2）

神のなさることは、すべて時にかなって美しい。

（伝道者　3・11）

決断の時だと思いました。決心はしたもののその後しばらくの間主に奉仕している集会の皆さんのように喜びが感じられませんでした。暗中模索ながら祈りました。「聖霊を与えてください。喜びを与えてください」。ある日、婦人集会に集い、メッセージのあと、聖歌四〇四番を賛美している時、「かえれや、かえれや、と主はいま呼びたもう」のくだりにきたとき涙があふれてきました。血管の中に何か新しいものが流れこんだようでした。自己主張、自己憐憫、わがままで罪だらけのみじめな私を、主のもとにきなさいと呼びかけてくださる。十字架を示して呼びかけていてく

だされた主の愛を、ニコデモの質問の答えを、体験的に知りました。

みことばの約束

ちょうど一つの違反によってすべての人が罪に定められたのと同様に、一つの義の行為によってすべての人が義と認められて、いのちを与えられるのです。（ローマ　5・18）

目の前が開けるというのはこういうことなのでしょうか。この福音を主人に知ってもらいたいと切実に願いました。そうしなければ、夫婦の建て直しはできません。

信者でない夫は妻によって聖められており、また、信者でない妻も信者の夫によって聖められているからです。そうでなかったら、あなたがたの子どもは汚れているわけです。ところが、現に聖いのです。（Ⅰコリント　7・14）

主イエスを信じなさい。そうすれば、あなたもあなたの家族も救われます。（使徒　16・31）

このお約束がありますから、主は必ず主人に憐みをかけてくださるでしょうと確信しました。主人は大学時代に聖書を読んだことがありましたが信じられず否定的でした。私が聖書に接し、家庭集会に集ったりすることは、自分に関わりのない限りご自由にということでした。主人の救

いのために祈りつづけました。信じて祈りなさいと主がおっしゃっている通り、目があいている時はいつも祈っていました。主は女が男に教えることを喜びませんから（Ⅰテモテ2・12）無言で主の栄光を現わしていかなければなりません。神に従うしかありません。みことばは「夫に従いなさい」と命令しています。

神を愛するとは、神の命令を守ることです。その命令は重荷とはなりません。

（Ⅰヨハネ　5・3）

百パーセント従うことのむずかしさ、「はい」を言う時、私は言いたくないのです。主に頼らざるを得ませんでした。主の栄光のためである時、従うことに喜びがあります。主人に従うことによって、当然日曜礼拝には出られませんでした。しかし、主に従っているからこの世の主人に従うことができたのです。みことばは真理です。主は、神と自分との関係を正しく保つことをも助けてくださいました。そのうち、さり気なく集会の様子や、メッセージの内容を話題に出すことができるようになりました。主は確実に主人に働きかけてくださいました。主に感謝します。主人は自ら、二冊の聖書関係の本を買ってきて読みはじめました。その年の誕生日に聖書をプレゼントしました。次のみことばを添えました。

ふたりはひとりよりもまさっている。ふたりが労苦すれば、良い報いがあるからだ。どちらかが倒れるとき、ひとりがその仲間を起す。倒れても起す者のいないひとりぼっちの人はかわいそうだ。

（伝道者　4・9、10）

主人は熱心に聖書を読みはじめました。海外出張の折にも聖書を持って行くようになり、米国に滞在中の友人に自分の聖書を置いてきたこともありました。中学二年だった長男に対しても、聖書を読むようにきびしく言いつけていました。五十六年の春の軽井沢キャンプに、はじめて主人と共に参加することができました。そこで、主人ははっきりと主に従う決心をし、祈りました。主は何とすばらしいお方でしょう。人にはできないことを神はしてくださいます。会話のなかった私たち夫婦の間に会話が戻りました。以前とは違い、聖書を中心にした自由で充実した会話です。また主は、長男、次男に、それぞれにかなった環境を起してくださり、語りかけてくださり、はっきりと神様を信ずる者へと変えてくださいました。五十八年四月、二人ともバプテスマを受けることができました。

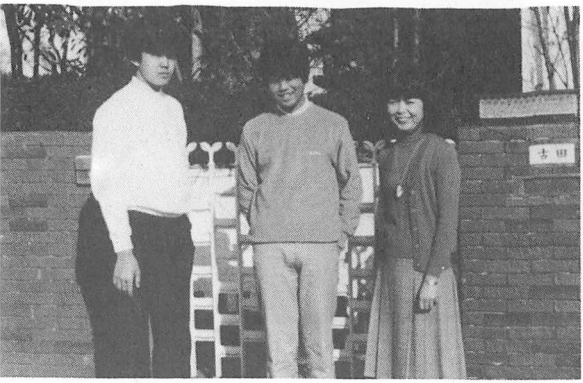
あなたがたは自分の罪過と罪との中に死んでいた者であって、そのころは、それらの罪の中にあってこの世の流れに従い、空中の権威を持つ支配者として今も不従順の子らの中に働いている霊に従って、歩んでいました。私たちもみな、かつては不従順の子らの中にあって、自分の肉の欲の中に生き、肉と心の望むままを行ない、ほかの人たちと同じように、生まれながら御怒りを受けるべき子らでした。しかし、あわれみ豊かな神は、私たちを愛してくださったその大きな愛のゆえに、罪過の中に死んでいたこの私たちをキリストとともに生かし、——あなたがたが救われたのは、ただ恵みによるのです。

（エペソ　2・1～5）

私たち一家、日々主を真中にして食事ができる喜びと幸いを感謝し、御名を賛美しております。

見よ。わたしは、戸の外に立ってたたく。だれでも、わたしの声を聞いて戸をあけるなら、わたしは、彼のところにはいって、彼とともに食事をし、彼もわたしとともに食事をする。

（黙示録　3・20）



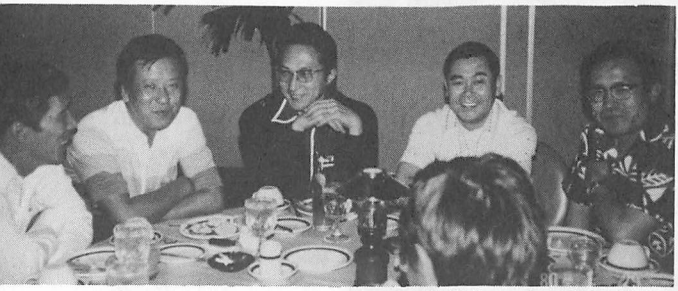
▲二人の息子さんと家の門で。



▲'83年7月、軽井沢の修養会にて、八王子の方々と。



▲'81年1月、パリ島の子供たちと康子さん。



▲'80年1月、ハワイにて会社の方々と。

すべてを主の御手に

（夫の証し）

古田　稔

一九三九年東京都品川区に生まる。大間窪小、荏原三中、都立八潮高校を経て、日本大学理工学部電気工学科卒。現在、インテル・ジャパン㈱に勤務、営業本部長。家庭は、妻康子さん、長男雅一君（高三）、次男知士君（中三）、柴犬の竜馬クン（八才）。趣味は読書、音楽、ゴルフ、釣り。

家庭集会　八王子市谷野町九一六－一三三　電話〇四二六－九一－五〇七九（日時は不定期）

▼'82年1月15日、ご夫婦で証しの日。



「人間が神との関わりを濃厚に持っていた古代から、神を否定しまた忘却してしまった現代までの永い歴史の流れの中において、人間は、はたして本来あるべき姿の人間の幸福をかち得てきたのであろうか。確かに科学は想像もつかない速さで進歩し、あらゆる消費物資は巷に満ちあふれ、際限のない欲望をかり立てている一方では、精神的荒廃による不幸な出来事は世界に満ち満ちている。人間は一体何を目的としてどこへ行こうとしているのであろうか」などと日本のむし暑い夏の夜に考えるには、えらく大きな問題を引っ張り出してきてしまったことを後悔しながらも、ふと心に浮かんでくるのは、何年か前の自分だったらこのようなことは決して考えなかったであろうという思いと、自分はずい分と変わってしまったなという驚きと、それにしても本当に助かったという満足感というか、幸福感というか、精神的な充実感であります。

私が神の存在を知ってというよりも、神がその存在を聖書を通して私に知らしめ、恵みによって私をその神の子イエス・キリストを信じて従ってゆく者へと導かれたのは、昭和五十六年のことでありました。私がその時まで想像もしなかったクリスチャンになるということが、どの様にして起ったのかを記すつもりですが、「なぜ」という理由ではありません。それは聖書の言葉に、

この世が自分の知恵によって神を知ることがないのは、神の知恵によるのです。

（Ⅰコリント　1・21）

とあるように、人は決して理屈では神を知ることがないからです。ただ一つの方法は信じ求めることによって神の恵みによる啓示を受けることです。聖書には次のように書いてあります。

すべてのものが、わたしの父から、わたしに渡されています。それで、父のほかには、子を知る者がなく、子と、子が父を知らせようと心に定めた人のほかは、だれも父を知る者がありません。（マタイ　11・27）

あなたがたは、恵みのゆえに、信仰によって救われたのです。それは、自分自身から出たことではなく、神からの賜物です。（エペソ　2・8）

私の四十年の過去といっても平凡な男の人生に特に異常なことが起きたわけでもなく、よくある話なのですが、たまたま、仕事の分野が電子工業の最先端をゆく半導体集積回路の業界であったということが、それなりの変動を私に与える結果となりました。この分野の産業は、米国に端を発し、歴史はまだ二十年くらいなのですが、すでに電子計算機から自動車、家庭用品などのあらゆる電子・電気製品に組込まれているほどに急成長した産業であります。

米国系企業に身を置いた私は、この分野の急成長のために経験者の層の薄さを反映して、次々と勧誘を受け、そのうちのいくつかを階段を昇るように移っていったのでした。好条件と地位とはそれにつれて当然上ってゆくのですが、それはあくまでも自分の努力と能力とで勝ち取ったものであると誤解し、自負しはじめていました。営業部門にいた私は、熾烈な市場競争に勝ち抜くために、国内、国外を問わず、昼夜の別なく働いていたのですが、やはり世の男の常として、仕事の付き合いという錦のみ旗を振りかざしては、夜の世界での生活もエスカレートしてゆきまし

た。仕事が好調に進展していったのは、実際は単に時期がよかったという理由だけなのですが、己の力のせいである、という思い上りにとらわれて、自分の考え、自分の意志、自分の欲望、すなわち自分がすべてであるという利己的な人間に変わっていることには気がつきませんでした。

一方、家庭では、妻は家にいることの少ない夫の病弱な母親と、二人の幼な子との生活に疲れ夫婦の間は単に形だけのものに変わっていました。私の母の死などもあって、妻は真剣に離婚などを考えはじめていた様子でした。家庭の雰囲気を変えることを考えて、八王子に家を造り引越しましたが、こちらの生活態度が特に変わっていないために、夫婦の間が好転することもありませんでした。妻はこの頃から近所に住む、吉祥寺キリスト集会に集うクリスチャンの方々と付き合いはじめ、聖書に近づいていった様子でした。私からの禁止にあいながらも隠れて集会などに出ていたようでした。今から四、五年くらい前のことになります。

私の方は、当時、米国企業の日本支社を任されていましたが、経営のことに関して親会社との間に意見の相違があり、自分が絶対正しいと思う道だけは確保しておきたいという信念もあって、考えに考えた末、その会社を退社することにしました。その時、私の持った感慨は、「今まで一段一段と階段を登ることに汗水たらして働いてきたのは一体何のためだったのだろうか。今まで家庭をないがしろにして、自分の欲望を絶対なものとして生きてきて、何がこの私の手に残ったのだろうか」ということでした。私は、幸福の青い鳥は、地位とか、金銭とか、物とかによってのみ、手に入れることができる、という現代の迷信を信じていたことを、その時気づかされました。自分のエゴイズムを満足させるべく、絶対的でないもの、単なる幻影にすぎないものを、今まで

追い求めていたことを知った時、一瞬にして血の気の引いてゆくような虚脱感におそわれました。自分の半生を、絶対的でないもののために、空費したことに「しまった！」と思った時のやり場のない絶望感から、どうやって抜けだすか、私にはその時、何らの方法も見通しも持ち合わせていませんでした。ただ、自分の力で何とかしなければ、何とか解決できると考えていましたが、二ヵ月間ほど、自宅にこもって読書にふけったり、考えたりしてはみたものの何の手立ても得ることができませんでした。

妻はその頃から、聖書の話などを折をみては出してきました。宗教などは、弱い人間のすがるもの、という偏見を持っていた私は、いっさいを無視し、耳を貸すことさえしませんでした。宗教が必要な場合は、日本人の宗教がある。葬式の際の仏教などのように、何も外国からの輸入品に頼ることはないではないか、などと思っていました。しかし、この件に関しては私の間違いで、仏教も根本的には、れっきとした輸入品であります。神道にしても、太平洋戦争の敗戦によってその真の姿を露呈しているように、単なる祖先崇拝なわけです。多くの日本人がそうであるように、宗教に対する無知と偏見は、当然私にもあったわけです。

そのような私に、聖書に対する興味を起こさせたものは、妻の日常の態度の変化でした。その頃の妻は、今までに比べて、明るく快活になり、素直になり、不平を言わず、物を欲しがらず、子供を叱らず、亭主の身辺の世話を良くやくように変わっていたのでした。(以前は全然しなかったというわけではないのですが)その変わりようがあまりにも大きいので、何となく不気味にも思ったのですが、一体何が妻をここまで変えたのであろうかと、色々と様子をうかがった結果、

その原因は聖書であり、吉祥寺キリスト集会であることが判明しました。夫である私に絶望していたに違いない妻を、このように生きかえらせる聖書とは、キリスト教とは、一体何んなのか、今までの自分の生きざまに絶望していた私にも何らかの指針が得られるかもしれない。という考えから、種々の聖書入門書やキリスト教関係の本などを読みはじめ、ついに聖書へと入ってゆくことになりました。

まず、基本的な問題として、「神はいるのか、いないのか」という件に関しては、この宇宙や自然の調和を考えれば、誰かが計画して造らずにはできるはずはない。その誰かを、「神」と呼ぶのであれば、「神」はいる。と考えるなら、聖書の「創世記」の「神が天と地とを造られた」という言葉は真理である、と考えたわけです。聖書は神から人類に与えられた真理の書といわれても、すべてが真理かどうか当時聖書を読む以前は分かりませんでしたが少くとも真理が含まれているという理解の上で、読みやすい新約聖書から入ってゆきました。

その当時の私の精神状態において、深く心に響いてくる言葉に出会いました。それは、

すべて、疲れた人、重荷を負っている人は、わたしのところに来なさい。わたしがあなたがたを休ませてあげます。

（マタイ　11・28）

という聖句であります。このイエス・キリストのみことばは、その時、私だけに向けて言われているように思われました。自分のエゴのためとはいえ、働き疲れ、その結果何も得るものもなく傷つき、罪も数限りなく積重ねてきた私には救いの言葉でしたが、どうしたらイエス・キリスト

のもとへゆけるのか分かりませんでした。手がかりを探して、読み進むうちに次の言葉を見つけました。

もしあなたの口でイエスを主と告白し、あなたの心で神はイエスを死者の中からよみがえらせてくださったと信じるなら、あなたは救われるからです。人は心に信じて義と認められ、口で告白して救われるのです。（ローマ 10・9、10）

ここの復活については、人間をちりから造られた神ならば、イエス様を死者の中から生きかえらせることなど、朝飯し前のこととして信じました。

「心に信ずる」とはどういうことか、自分の経験から申しますと、自分のすべての自我を心の中から投げ出す時、ちょうど水泳の浮身のときに全身から力を抜くことによって水に浮かぶように、何物にもとらわれない自由な心になった時、「心に信ずる」ことが可能になりました。

ついに、私は救われました。主イエス様に招かれ、イエス様の十字架上での愛にふれ、イエス様を神の一人子であると信じたことによって、私のすべてを主に委ねることによって、主は私にまったき心の自由と平安と、そして永遠の生命とを与えてくださいました。

このようにして救われた私は、この日を待ちに待っていた妻と二人で、昭和五十六年六月二十八日、吉祥寺キリスト集会においてベックさんにより洗礼を受けることができました。また二人の息子（17才と13才）も主の招きを受け、五十八年四月、同様に受洗することができました。これも、次の主のみことばがわが家庭において成就したのであります。

主イエスを信じなさい。そうすれば、あなたもあなたの家族も救われます。
（使徒　16・31）

神から遠く離れてしまった現代の社会に生きてゆくことは、クリスチャンにとっても、決して安易なことではありません。イエス様はおっしゃいました。

誘惑に陥らないように、目をさまして、祈っていなさい。心は燃えていても、肉体は弱いのです。
（マタイ　26・41）

人間の持って生まれた罪の性質はクリスチャンだからといって、すべてなくなったわけではありません。しかし、主にすべてを委ねたクリスチャンは、真理の書、聖書によって、自分が何をしているのかを知っています。以前は、自分で自分が何をしているのかをまったく知らなかったのですが、イエス様はその様な人達のために、父なる神にとりなしてくださっています。

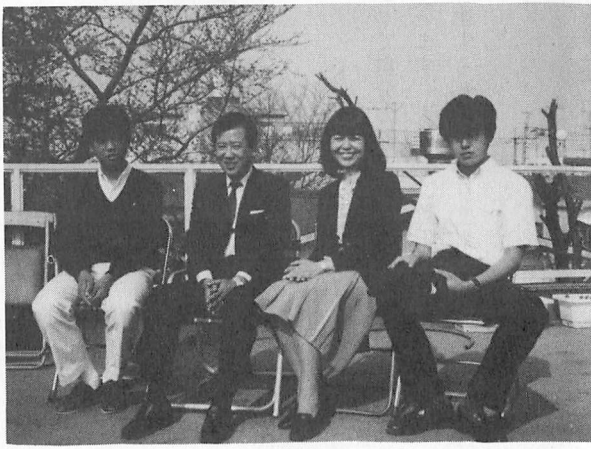
父よ。彼らをお赦しください。彼らは、何をしているのか自分でわからないのです。
（ルカ　23・34）

私もそのような人々の中の一人でした。しかし、今では主によって自分の罪が示され、また同時に赦しも与えられていることに、喜びと平安とがもたらされています。人の罪は数限りなく、ただダビデのように祈ることを許されている神の愛に、心から感謝するものであります。

だれが自分の数々のあやまちを
悟ることができましょう。
どうか、隠れている私の罪をお赦しください。
あなたのしもべを、傲慢の罪から守ってください。
それらが私を支配しませんように。
そうすれば、私は全き者となり、
大きな罪を、免れて、きよくなるでしょう。
私の口のことばと、私の心の思いとが
御前に、受け入れられますように。
わが岩、わが贖い主、主よ。

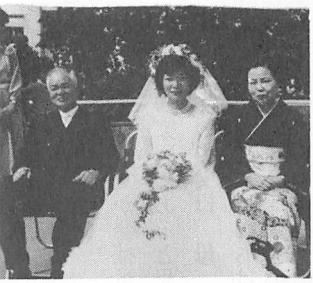
（詩篇　19・12～14）

▼二人の息子さんのバプテスマ（洗礼）の日に。

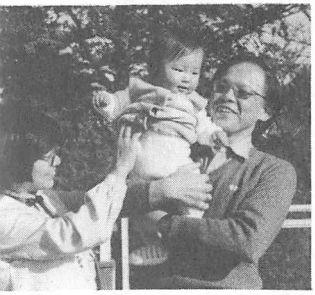


主、わが力、わが巌

今村扶貴子



▲ご両親と共に扶貴子さん。



▲長女道子さんと。

福岡県に生まる。福岡女子大学文学部国文学科を卒業後、神奈川県立山北高等学校、同県立生田高等学校に奉職。一九八二年、五月に今村元一さんと結婚。八三年四月には長女道子ちゃんにも恵まれたほやほやのクリスチャンママである。

▼'82年5月15日、結婚式の後集会の屋上で。



私は父が会社員、母が中学校の教員という両親の間に生まれました。家庭はごく平均的な日本の家庭であると思います。少々特殊なことといえば、私がまだ幼かった頃、父が長男だったため父の祖父母、母、弟妹が同居していたぐらいでしょう。しかし、それも、私が中学生の頃には、叔父、叔母たちはそれぞれに独立して、祖母、父、母と弟の五人暮らしとなりました。

小・中学校の頃の私は、教員の娘ということもあって、無意識に、優等生であろうと努力していました。先生方に対しては、成績もよく「良い子」であろうとし、友人には、学級委員に推薦されるようにといつも他人の目を気にしながら、学校生活を送っておりました。その反動のためか、家庭では、我がままを通すところがあり、自分でも自分の我がままさを何とか直して「良い子」であろうと一所懸命に戦っていました。

小学校三年生の時、細かいことは忘れたのですが、クラスの行事の折、クラスの友人たちの面前で、担任の女の先生から「あなたは、我がままですから」と言われた言葉が、自分に烙印を押されたようで、心に深い傷となりました。

中学校、高校と進むにつれて、他人の前で自分の我がままをうまく隠す術は覚えたのですが、自己の中の葛藤は続きました。また、優等生であろうと努力することにも懸命でした。

虚しい大学生活

やがて大学に入学した時、親元から離れ、寮生活をするうちに、私は自分のエゴイズムを見せつけられる思いがしました。

六畳に二人の先輩と、同学年の英文科の学生と四人の同室で、毎日が息苦しく、夜、一畳のベッドに入る時だけが孤独の時間でした。両親は私のために寮で共同生活を学ばせようとしたのですが、正直に言って、寮から解放される日曜日を指折り待つ一週間でした。

また、「大学に入ったら自由になれる」と思っていたことも、大きな失望が待っていました。講義は高校の延長でしかなく、思ったほど自由な時間もありませんでした。一年次の六月頃にはほとんど惰性で講義に出席していたのです。他になにか楽しいことで気を紛らそうと、クラブ活動、他大学の学生とのコンパ、デート、ダンスパーティーにと暇がないくらいに遊んでいました。

その結果、一年の前期の試験は、当然のこと悪い成績で、遊んだ後の虚しさが、あと味悪く残るだけでした。優等生であろうとするプライドは傷つき、「自由」と思って遊んでみても、一時の慰めにすぎないと気づいて、十月から私は方向転換をしてみようと決心しました。

今まで遊んだ時間は、帰省以外、ほとんど読書や勉強時間となり、朝は六時に起床、英語とドイツ語のラジオ講座を聴き、講義も以前よりは真剣に臨みました。先生方がおっしゃる「真理探究」の場が大学なら、必ず充実感ある、いきいきした自由があるはずだと思ったのです。そして少しでも「真理」に近づきたいと思いました。

その結果、半年後の二月の後期試験は、成績が上って、ある程度プライドも満足させられたのです。しかし、肝心ななにかが不足している気がしました。

それは、なんのために勉強しているのか。「真理探究」の場などと言うが、なにが「真理」なのか。文学研究にとって「真理」とはなんなのか。という疑問でした。また、こんなに自分を鞭打

ち続けて努力し、いい成績を取り、いい就職をし、いい結婚をし、子供を育て、そして死に直面した時私は、自分の人生を満足し、悔いなしと言えるのかという問いの答えが私にはありませんでした。ひょっとして、晩年になればその答えが出るだろう。年をとるとともに、人間は円熟し、美しい顔になっていくのではないかと、漠然と考えていたのです。しかし、現実には、むしろ老いるほど人は死の不安から、物質や金銭にとらわれ、執着する傾向があるように思いました。そうすると、今の私もこのまま、たいして内的には成長せず、目的もはっきりしないまま生きてゆくのかと考えると、絶望的な不安におそわれました。

そんな私の精神状態の不安定さを知ってか、母がある宗教団体の本を送ってくれました。それは、仏教、キリスト教、儒教、西欧思想（ヒューマニズム）などのよいと思われるところを集めた教えといえばいいようなものでしたが、私にはどうしても、受け入れられないところがありました。この教えの根本には、あらゆる場合に適応する相対主義があり、それは自己の都合で、真理なるものと勝手に決めることができるという便宜主義ともなるものでした。この教えで考えると、「真理」ということ自体が、存在しなくなり、否定されます。つまり「真理」はその根本において、「虚偽」に対しては寛容ではないからです。そして立場の相違によって「真理」が変わっては、もう「真理」ではないのです。

大学二年の春、寮から出て、先輩の紹介で三畳の狭い下宿住まいをしました。でも、寮生活の他人との関係に気を遣い、仕事の分担で時間を取られることもなくなり、自由な気分で始まった新学期でした。今の問題を解決したいし、安易だった自分を反省する気持ちもあって、単位修得

が困難だという噂のあったA先生の倫理学の講義を受講することにしました。

真理探究

先生の話は、ソクラテスのことから始まり、「人間のみが、人はいかに生きるべきか」との問いを自らに発すること、そして、現代人がいかに自らに問うことから逃避しつづけているかということであったように記憶しております。でも、その第一回目の講義の内容のほとんどが、私にはよく分かりませんでした。それでも、先生の厳しい、真剣な講義のようすに、反発しきれないものを感じて、その講義の最後に紹介された毎週土曜日に行われていた読書会(「土曜会」と称していましたが)に出席してみようと思ったのです。

少々緊張して、A先生の研究室のドアをノックして、入会の旨をお願いしました。当時会員は四、五名ほどで、カントの「判断力批判」を原書で、M・ピカートの「神よりの逃走」(みすず書房)を邦訳で読んでいるとのことでした。入会を許され、早速、二冊の本を入手して読もうとしたのですが、原書の「判断力批判」は翻訳を読んでも分からず、「神よりの逃走」も邦訳されているのに、文字は追っていても、ほとんど内容が理解できませんでした。それでも、参加することに意義があると思い、毎週土曜日は針のむしろに座る思いで読書会に顔を出しておりました。

そこで、今までの自分のものの見方、考え方を根本から問い直さざるを得なくなりました。高校までの、デパート式の上面(うわつら)だけの知識では、この二冊の本を読むのにすら役に立たないのでした。そして、物事をいかに偏見により見ているかを知らされる毎日でした。ある時の話の中で、

「自分が現実から厳しく問われていることを知り、そのことを苦しみつつもこの上なく喜ばなければならない」また「人は、真実のことを語られると、その語ってくれた人に感謝するより、その人を憎悪するものだ。ソクラテスやキリストを見ればわかる」と語られました。私は、読書会で話される言葉のほとんどが、五里霧中で手さぐりするようでしたが、次第にそこに認めざるを得ない真実があることを知らされていました。

聖書と出会って

その年の秋、私は現実から厳しく問われることになりました。私はそれまで、自分が完璧とはいえぬものの、ある程度の善人であるし、充分他人にも親切で思いやりもあるとなんとなく思い込んでいました。ところが全員で十数名しかいない書道部の部長を選出の時、二年生の私たちの仲間がそれぞれのエゴをだし、六人の仲間がちりぢりになってしまったのです。私もその渦中に翻弄されて、他人を責め、自己を正当化しようとする自分のエゴを否定することができませんでした。それは、今までにない絶望でした。こんな事件はよくあることなのでしょうが、自分の真の姿がエゴイズムでしかないと知らされたこと、また私の周囲のどこを見ても、私と同じエゴを隠し持った人間の群れでしかないことを知り、この自我（エゴ）の暗闇から何か抜け出す指針が欲しいと真剣に思うようになりました。

ちょうどそんなおり、以前ドイツ語の学習のために行ったことのある近くの福音教会で、ドイツ人宣教師、ベックさんの特別伝道集会の案内が校門に立ててありました。特に「キリスト教」

に興味があったわけではありませんでした。ただ「神よりの逃走」を読んで以来、「神＝GOD」とはなにかを知る必要があると思っていました。秋の大学祭の展示へ向けての合宿の最中でしたので、夜七時頃から友人と合宿を抜け出して、その集会に出席しました。ベックさんの話の内容は、今ほとんど覚えていませんが、その時、教壇の左側に掛けられていた軸の「わたしは、仕えられるために来たのではなく、仕えるために来たのです」というキリストの言葉と、帰り際に、握手したベックさんの大きな手の暖かさが強く印象に残りました。二日目も三日目も出席しました。そして、こう思ったのです。

「もし、キリストなる人がまったく自我を捨てて、仕えるために来たのなら、そして本心からこんな言葉を言える人間がいるなら『狂人』か、さもなくばほんとうに『神の子』かもしれない。もし、このイエスが『神の子』なら、このどうにもならない私の自我の問題の解決になるかもしれない」。

それから、翌年の夏まで（約十ヵ月ほどでした）日曜日、水曜日と毎週のように集会に出席していましたが、確信がどうしてもないのです。聖書の内容を知れば知るほど、むしろ疑問が増すのです。死人が生き返る奇蹟などあるのかしら。神・キリストの存在は分かるように思うけど、私自身とどうかかわるのか。と懐疑の中で苦しみました。また、教会にいらっしゃる方々にも、自分にはできないことなのに、クリスチャンであれば当然こうあるべきだと思いこんで、非難したり、失望したりしました。そんな迷いの中にいた頃、教会に集っていらした皮膚科の医師であったTさんが、夜の集会のあと下宿まで送ってくださる車中で、こんな話をしてくださいました。

「僕にも、いろいろな時期がありました。懐疑に苦しんだり、聖書を厳格な律法と考えたりしましたが、ある時、ほんとうにキリストが、この情けない自分のために死んでくださったと分かったのです。その後も、弱い僕は、友人たちの前で聖書を持っていることや、大学の研究室でそれを話題にされることを恥じたこともありましたよ。自分ではっきりするまで、集いつづけてみてごらんなさい」と優しくおっしゃったのです。それから、少し気持ちも楽になり、焦らず求めつづけていました。

救いに導かれて

それからしばらくして、三年生の夏休みの頃でしたが、日曜日のお話の中で、キリストを裏切ったイスカリオテのユダについて語られたのでした。その話の詳しい内容は忘れましたが、この憎まれて当然のユダが、他ならぬ自分の真の姿であると思ったのです。真実を語られるイエス・キリストを分かろうともせず、十字架につけた群衆と同じ人間が、この私であると思ったのです。そして、この醜い私を救い、自我から解放して真の自由を与え、思い煩うことのない変わらぬ平安を与えるために、キリストが十字架上で死んでくださったと確信したのです。そして、自分の生涯をなにかに賭けるなら、このキリストに賭けてみようと決心したのです。

それからの私の人生は拙いながらもこのキリストを土台にして、新しく建てられ始めました。今まで勉強するにも、遊んだあとにも、心の底に空虚さがありましたが、キリストを救い主として信じてから、私の人生は真に喜びのあるものになりました。一見、無意味に見える苦しみも神

から与えられた訓練であり、試練として感謝できるようになったのです。一日の始めにベッドの中で、一日をどう過ごそうかと思い悩む必要がなくなりました。自分でも不思議なほど、一日の生活がいきいきとしてきたのです。毎朝、聖書を読むことが楽しみになりました。

しかし、ただ単に喜びに心浮く毎日ばかりになったのではありません。喜びと同じほどに、日本という土壌（非キリスト教文化圏）で、キリストを信じる信仰の戦いがスタートしたのです。日本はあらゆる宗教に寛大といえるでしょう。ところが、その寛大さは自己を否定しなければならなくなったり、自己の不利益になるときには、失われてしまうものなのです。また、他の国民以上に、宗教心、信仰心は篤い国民なのですが、真理についての考え方も、絶対的なものというよりは、相対主義の考えが根強くあるように思われます。それゆえ、神も「八百万の神々」となるのです。ここで、宗教論争をする気持ちはないのですが、ただひとつだけ言いたいことは、この「八百万の神々」（自然＝神）から、「人間、いかに生きるべきか」との切実な問いの答えが与えられるのでしょうか。現代人は、科学、政治、経済、教育、そして、それらを支える哲学と、すべてが壁にぶつかり、指針を見失ってしまいました。西洋諸国が見失ったのみならず、東洋もその西洋化の波にさらされながら、堪えるはずの東洋精神（大和魂）も、あの太平洋戦争で粉砕されました。私たち自身が、今、この場で、現実から問われていると思うのです。

また、私自身の内面でも、新しい戦いがスタートしたのです。今まで、なんとなく感じていても認めたくない罪を、神の前で吟味することが多くなりました。心の底に沈んで見えないと思っていた人への悪意、自己弁護、不誠実と一つ一つが悔い改めへと導かれたのです。しかし、今ま

では単に自己嫌悪に終わっていたのが、それらの罪を神の前に告白し、主イエス・キリストの十字架上での死が、この大小さまざまの私の罪のためであったことを思う時、心からの感謝となっていったのです。不思議に思えるかもしれませんが、毎日が充実し、いきいきとした日々となったのです。聖書の言葉に、こうあります。

十字架のことばは、滅びに至る人々には愚かであっても、救いを受ける私たちには、神の力です。

（Iコリント　1・18）

そればかりではなく、患難さえも喜んでいます。それは、患難が忍耐を生み出し、忍耐が練られた品性を生み出し、練られた品性が希望を生み出すと知っているからです。この希望は失望に終わることがありません。

（ローマ　5・3～5）

私が今、確信を持って言えることは、キリストに従おうとして歩んだこの十一年間、どんなにつらかったこと、また理由の分からない出来事にも、なにひとつ無益に終わったことはありませんでした。聖書にあるように、

神を愛する人々、すなわち、神のご計画に従って召された人々のためには、神がすべてのことを働かせて益としてくださることを、私たちは知っています。（ローマ　8・28）

という言葉が真実であることを、証しする幸いを感謝しています。また、最後に、闇の中で見い

出したこの希望をお伝えできることを、心からうれしく思っています。

もしあなたの口でイエスを主と告白し、あなたの心で神はイエスを死者の中からよみがえらせてくださったと信じるなら、あなたは救われるからです。人は心に信じて義と認められ、口で告白して救われるのです。

（ローマ 10・9、10）

就職・結婚へと導かれて

昭和四十七年十二月二日に福岡の香椎の海でバプテスマを受けて、早くも十一年の歳月が流れました。この十一年間に、就職、結婚と二つの大きな人生の事件がおこりました。

就職

就職は、主イエス・キリストを信じてから始めての問題でした。大学すら地元九州でと考えていた両親は当然、就職も地元でと考えていました。私もできるなら、まだまだ信仰生活も不安定な自分ですし、勉強もしたいし、聖書をもっと学ぶ時間も欲しくて、大学へ残ることを考えていました。それで、福岡での就職試験も受けずにいましたところ、友人が教務課にきていた神奈川県の教員採用試験の要項を持っていて、私にも受けてみないかと勧めたのです。今まで思ってもいなかったのですが、なんの準備もしていないし、卒論の準備もあるので、たぶん落ちるだろうと思いました。ですが、その当時、信仰についていろいろ悩んでいたことがあり、吉祥寺のベックさんに相談したいとの思いもあって、本心は東京に行けるよい口実だと思い、受験したのです。

十月には、思いがけず二次試験の通知があり、三月には採用の内定がありました。進学の道は閉ざされて、唯一の意外な道が残ったのです。また、遠路ですから、両親が反対するだろうという目算もはずれて、上京することになりました。

キリストに従ってゆきたいと思ってはいても、霊的にはまったくの赤ん坊で、砕かれてもいず、成長もしていない私を、福岡の教会の方々は、祈りで送り出してくださり、吉祥寺での交わりに加えさせていただきました。それからが、本当の主にある訓練の時であり、社会人（教師）として成長していく時となりました。

神は、自分では、一人前の大人と自負していた自信過剰の私を、真にキリストの栄光を表わす者とするため、愛をもって、砕いてくださいました。ある時は、生徒たちの厳しい批判の言葉や無言の反発の行動によって教えてくださいました。また聖書のみことばや、集会の方々の厳しい愛の忠告もありました。しかしその一つ一つが、その時はほんとにつらくて、自分が情けなくて、よく泣いたのですが、今から思うと、神さまからの大きな愛のプレゼントでした。「神は、愛する者ゆえに懲らしめる」と聖書にあるみことばが、自分のものとなりました。

結婚、内的な試み

教師として、周囲に支えられ、やっとなんとか役立つようになった教員三年目ぐらいから、次の段階の重大な試みの時が始まりました。マタイの福音書四章に、イエスが試みを受けられる記事がありますが、キリスト者にも、必ず試みの時があるように思います。そして、この試みは、

（105頁に続く）



このカラー別刷りの頁は、恵みによって光の中に移された15人の方の短い証し集です。中には、家庭集会・学び会・土曜学校を持ち、またそのために奉仕している方も多く、住所・電話を付記しておきましたので、聖書と福音に関心をお持ちの方は、お気軽に電話なさってみてください。



主の恵みによって

尾崎　英昭

㈱千代田経営会計事務所
愛媛県出身／福岡市警固小／警固中／福岡中央高／広島皆実高／早稲田大学第一商学部卒／41才／妻 静子／子供　一男　家庭集会 毎2・4土7時(一般人)
住所　浦和市道場599-1-806 〒338 電0488-66-3289

私は全くの無神論者であり、神に信頼する人々を「特殊な人」とあざける者でした。宗教とか信仰は、私には全く無縁のものと思っていました。妻が受洗し、又一人息子も喜んで集会に集うようになった当時、私は連日酒に明け暮れ、仕事のみが生きがいと自分自身を無理に納得させながら、荒んだ人生を歩んでおりました。このような時、人の忠告は、聞く耳を持たない私にとって、何の意味も持ちませんでした。しかしこの時、未だ会った事もない集会の兄弟姉妹方が、私のために主に祈っていて下さったのです。この方々をこの様に導かれた主イエス様とは、一体どの様なお方なのだろうか？聖書を手にした時、マタイ伝5章～7章はいきなり強い衝撃を私に与えました。これは人間による言葉ではないと確信するに十分でした。私の心はイエス様の清さによって洗われる思いでした。聖書は生ける唯一の真の神が、イエス様を通して、どれ程までに私達を深く愛して下さっているかを語っています。この神様の恵みを私は享受しない訳にはゆかないのです。聖書は世界で一番大切な書物となったのです。



神の国と義を第一に求めなさい

新見　稔

日本ＩＢＭ㈱製品資料技術翻訳
東京都出身／長崎小／真和中／北園高／早稲田大学ドイツ文学科卒
36才／妻　節子／子供　二男二女
住所　東久留米市滝山6-2-6-108 〒203 電0424-72-6135 滝山家庭集会・中高生会・土曜学校(隔週土曜日)

私が真剣に聖書を読みはじめたのは、大学３年生のときです。きっかけは、ドイツ語の聖書研究会でした。はじめは、ドイツ語に誘われて参加していたのですが、聖書を読み進むうちに、主イエスの深い愛と、自分の醜い罪について知るようになりました。主イエスを救い主と信じることによって、私の心に光と平安が与えられました。しかし、当時の私は文学青年で、福音と文学のはざ間にあって無条件に主に従いきれない葛藤の中にありました。その結果、信仰生活も不安定でした。

けれども、主を第一とすることができるようになって、私は、主のすばらしさをより深く体験することができるようになりました。現在私に与えられている職業も、家庭も、交わりも、主イエスの恵みと導きによって与えられたものです。また、主が与えてくださったものであれば、そこには、主のご計画と守りがあることを確信することもできます。主は生きておられ、聖書は真理です。

「神の国とその義とをまず第一に求めなさい。そうすれば、それに加えて、これらのものはすべて与えられます」(マタイ６・33)



むなしさからの解放

渡辺　二郎

拓殖大学非常勤講師
東京都出身／平井小／早稲田中／早稲田高／慶應大学文学部卒／Bibelschule Brake（西ドイツ）／
36才／妻　利江／子供　二男二女
住所　八王子市大和田町7-6都営2-108 〒192 電0426-46-5826 聖書学び会 毎土夜7時半

キリストにすべてを明け渡す前の私の生活は、さみしく孤独で空虚だった。ところが私は虚しさを恐れ、それを忘れようとしてたえず何かに夢中でいなければならなかった。婚約してまもなく、彼女がクリスチャンになり、それをきっかけに、聖書が開かれた。聖書のことばは実に生き生きとしていた。私はそれまでの虚しい生活とはちがう聖書に示されているような生活を持ちたいと願ったが、同時に自分にはそれが不可能だと知っていた。しかしまもなく私は突然、主イエスは私の虚しい心をもになって十字架についたということに気づいたのである。ところが私はそのことをすでに何度も聞かされ、信じているつもりでいたのだ。それではその時、私には何が起ったのか？私の虚しい心が、事実キリストと共に十字架についていたのだ。だから実際に私は虚しくなくなってしまった。たんなる知識ではなく、その事実に気づくというのは、なんとすばらしい体験だったことか！その体験のすばらしさのゆえに、思わずひざまづいて祈らずにはいられなかった。主よ、私のすべてをあなたにお捧げします。私の願いは、あなたに従うことだけです、と。



わが家の「主」

小川　泰徳
東芝クレジット㈱中部支社
企業ファイナンス部長
三重県出身／東長島小／紀北中学校／県立長島高校／43才／妻　麗子／子供　一男一女
住所　名古屋市名東区平和ヶ丘3-15
平和ヶ丘住宅4-102 電052-781-2827

主イエス・キリストが、我家にはじめて愛の光をくださったのは、昭和51年7月でした。私が導かれるまでは、と受洗するのを待っていてくれた妻とともに洗礼を受けました。そして、丸8年を経た現在、長女、長男、共に主を信じて、文字通り主イエス・キリストが我家の中心になってくださいました。神の前には親も子も平等であり、親が間違ったことをした時には、子供達からいさめられ、一方子供を叱る時、世間や他の人を引き合いに出して叱る必要が無くなりました。真理であり、義であり、神そのものである聖書のみ言葉の一つ一つが、今自分の行っていることの是非を判断するベースとなったからです。「初めにことばがあった。ことばは神とともにあった。ことばは神であった。ことばは人となって、私達の間に住まわれた。私たちはこの方の栄光を見た。父のみもとから来られたひとり子としての栄光である。この方は恵みとまことに満ちておられた」（ヨハネ1・1、14）私達の家庭の中にまことの安らぎと、光を与えてくださった救い主イエス・キリスト、このかけがえのないお方に家族そろって限りない感謝をしております。



幼な子の口を通して

今川　務
㈱横河北辰電機製作所
東京都出身／新山小／中野高等小学校卒／51才／妻　三枝子／子供　一男一女

わが家にキリストの福音が入ったのは約10年前のことである。家内が集会に行くようになり、子供たちも日曜学校に毎週のように喜んで行くようになった。ある日家内が、「私はイエス様の救いを信じたので洗礼を受けたいのですが」と相談され複雑な思いで受洗を許したが、その日から家内は毎日のように私にキリストの救いを伝えるようになった。それから私が主の前に悔い改めるまで約1年半かかった。少しずつではあるが聖書を開き、福音も聞くようになって自分のわがまま、身勝手な思いなど反省しながらも父親の権威を主張しつづけていた。ある夕食のとき、子供から「お母さんと私たちは、イエス様を信じているから天国に行けるけど、お父さんだけは天国に行けないね」その時は笑って過ごしたが、51年の夏、軽井沢のバイブルキャンプで、キリストが私の罪の身がわりとなり、十字架にかかり死なれ三日目に復活されたことを信じることができた。同年10月、洗礼も恵みによって受けることができ、今は生活の基準が変わった。わが家の中心は主であり主の支配の内に入れられ、平安と感謝の日々を送っている。

ほか滝山各集会
住所　東久留米市滝山3-4-18 〒203 電0424-73-2494　滝山家庭集会　毎1・3土夜7時半（一般人）



神からの言葉

高田　博之

日本陶業タイル㈱
秋田県出身／花輪町立小／大森第十中／雪ヶ谷高／法政大学経済学部卒／47才／妻　峰子／子供　一男三女
住所　八王子市西寺方町1006-281（角栄団地）〒192-01　電0426-51-1272

「真理とは何ですか」(ヨハネ18・38)。私がクリスチャンになったのは大学一年の時です。私は元来宗教嫌いで、「盲信」とか「宗教に凝る」とか「苦しい時の神頼み」とかいうことを聞くと、そういう人達の態度に嫌悪感を感じて、自分は決してそういう人間になりたくない、しかし、もし自分が弱くなり頼るものが必要になったなら死ぬ間際に信じようと思っていました。また一方、私は当時、西洋史を習っていて、宗教が人間の歴史に大きな影響力を持っていたことに対して「なぜだろう」という疑問を感じておりました。人の心に浸透し、そのような力で人間社会を動かすものに対する興味です。私ははじめは学問的な見地からなら聖書を知りたいと思い、家庭集会や教会に行くようになりました。そして、やがて聖書は人間の所産ではなく神からの言葉であり、「真理」を伝え、また記されていることはすべて「事実」であることが示されました。また、イエスの十字架のみわざが、他ならぬ自分のためであることを示され、主に従うことを決意しました。以来主の平安のうちに、日々の生活を感謝しつつ過ごさせていただいています。

日曜学校毎２・４土２時(幼・小学生)
ほか不定期ケーキ会



天路歴程の記念碑

大庭　治夫

国立図書館情報大学助教授 Dr. phil.
東京都出身／杉並第五小／天沼中／早大高等学院／早大政経学部／西独ルール大／42才／妻　美恵子／子供　一男一女　　住所　茨城県新治郡桜村千現1-20-20　〒305　電0298-51-9033

いま自分の歩んできた半生を静かに回想してみますと、日曜学校に行った当時のことや孤独だった高校生活、さらにはクリスチャンとなった大学時代や結婚後の西独留学生活など、文字通りさまざまな思い出が走馬燈のように浮かび上ってきます。しかも、それらの出来事の一つ一つが、すべて天地万物の創造主なる神のご計画にもとづいた天国への旅路すなわち天路歴程の記念碑となっているということは、何という驚くべきこと、また感謝すべきことでしょうか。神は、私たちのために御子イエス・キリストを地上につかわしてくださり、十字架における主イエスの死を通して全人類の救いを成就してくださいました。そして罪を悔い改めて主イエスを信じる者には永遠の生命が約束されています。事実、私どものささやかな人生におきましても、そのために様々な方との出会いが与えられ、主イエスとの出会いと主にある交わりとを経験させていただきました。それらの一つ一つは、私どもにとりまして、まさに天路歴程の記念碑以外の何物でもありません。その一つとして神が建てられた筑波学園キリスト集会は皆様を心から歓迎いたしております。

筑波学園キリスト集会　毎日曜９時子供会　10時礼拝・11時福音集会



若き日に創造主を覚えよ

竹本　誠一

歯科医　竹本歯科診療所
高知県出身／香宗小／城東中／日本歯科医専卒／77才／妻　愛子／子供　二男二女／孫　10人　住所　高知県香美郡野市町土居　〒781-52　電08875-4-2379

私は明治38年生まれであります。私の家庭にキリストの福音が入りましたのは、今より74年前の明治42年頃であります。当時父が経営していました製紙工場の工員に、クリスチャンの方がおり、その方に導かれたのです。その時より始めました家庭集会は、時々休む時期はありましたものの、昨今までその灯を何とか掲げてきたのでございます。この長い年月の間には、祖国日本も、私共国民も何度か変遷を重ねてまいりました。人は変り、世は移るのはこの世の常でありますが、永遠に変ることなきは、まことに主の御国のみであります。今もクリスチャンホームを維持し、その信仰を持ちつづけられるのは、主の豊かな御恵みであると感謝しております。

今日まで私の歩んできました道は、平凡ではありましたが、幼児の時よりキリストのみことばに育ち、その信仰を持つことができていましたので、社会に出ましても、世の波風に翻弄されたり、支配されたりすることもなく過ごしました。まことに若き日に創造主を覚えよとのみことばは、神の貴い賜物であると思います。



神のみまえに

岡本　広海

時計・メガネ・宝石店自営
高知県出身／岸本小／城山国民高等科卒／54才／妻　基子
住所　高知県香美郡野市町西野566-4
〒 781-52 電08875-6-1940

人は誰でも長い間、自分自身の問題点に気づかずにいることがあるのではないでしょうか。たとえ気づいても、他のもので解決できると思って、仕事や勉強、趣味、遊興に懸命になります。私は自分の問題点が身体障害（2才の時の怪我による右膝関節障害、現在右足で立つことはできない）と学歴からくる劣等感に根ざしていたことにはっきり気づいたのはみことばに触れてからです。「義人はいない。ひとりもいない」「イエス・キリストを信じる信仰による神の義であって、それはすべての信じる人に与えられ、何の差別もありません」(ローマ3・10、22) この聖句ははっきりと私にこう示してくださいました。神のみまえでは〝何の差別もない〟障害のあるなし、学歴のあるなし、財のあるなし、地位のあるなしにかかわらず、神のみまえでは誰もが罪人であり、誰でもイエス様を信じる者には、〝差別なしに〟罪の赦しが与えられるというのです。このことによって、私が劣等感を覚える必要はなかったと知った時、私の心は自由になりました。私達の問題点がはっきりした時、主はそれをみことばによって解決してくださいます。ハレルヤ。



「子よ。しっかりしなさい」

白木　慎一

大同生命保険相互会社
高知県出身／戸波小／土佐中／土佐高／早稲田大学政経学部卒／41才／妻　翠／子供　二男一女
住所　大阪府箕面市粟生間谷1337-2　B-302
〒562　電0727-29-9196

集会　毎日曜10時礼拝・11時集い　新船場団地ＯＴＣ3号館4階にて（会場はお電話下さればご案内します）

「わたしが道であり、真理であり、いのちなのです」（ヨハネ14・6）。人は何のために生きるのか…。これを自分のものとすることは人生の営みにおいて不可欠であります。これを知ることなく生きることは、目的地を知らずに電車に乗るようなものです。電車の窓から見える景色が美しければいいのだ、隣の人とのおしゃべりが楽しければ目的地が分からなくてもいいのだ、と言われるかもしれません。しかし、このままでは必ず行きづまります。死の問題、愛の問題、幸福の問題など…。これらを徹底して追い求めるとき、超えることのできない壁に行く手をはばまれます。そこでは「最後は自分だ」という気高い思想も負けおしみにしかならないのです。

神様に反発しつつ歩んできた私は、目的なく、立つべき土台なきが故に飼うもののない羊のようにショボリと途方に暮れてしまいました。まさにそのとき、十字架のイエス・キリストに出会いました。そして悔いた砕かれた心でなければ聞くことのできない声を聞きました。「子よ。しっかりしなさい。あなたの罪は赦された」（マタイ9・2）ここに本当の喜びの根拠をみいだしました。今私たちは聖書をともに学んでいます。どうぞご連絡ください。



真理を求めて

上田　利恵

東京都出身／滝の川第三小学校／旧跡見女学校卒／69才／子供　一男二女／孫　6人

仏教の家に生まれました私は、何とか仏教の真髄を知り心からの信仰を持ちたいと、毎月お寺様に来ていただき色々な疑問に答えていただきましたが、一番求めている核心にふれることがなく、長年虚しい思いでおりました。しかし仏教以外に真理があることなど思いもしませんでした。その頃娘一家と暮らすようになり、イエス様を信じて熱心に吉祥寺集会に集っておりました娘に反発し、信仰の話になると言い争いが絶えませんでした。ある金曜日の朝、ふと、娘の喜びと希望に満ち溢れたその信仰の源を知りたいと、求める思いが不思議と湧いてきたのです。後で知ったことですが、その前夜の祈り会で皆様が私のことを祈ってくださり、それに対して主が答えてくださったのでした。真の神は遠くにおられるお方ではなく、私の罪や汚れにもまして愛してくださり、私のようなものの祈りにも答えてくださり、心の奥をもご覧になって、やさしく交わってくださるお方と知って、私の人生は霧が晴れる思いでした。イエス様を信じて10年、これらのすべてを体験させていただき、今は永遠の命に預っている平安と感謝の日々を過ごさせていただいております。



感謝と賛美の日々へ

富山　廣栄

日通城西荻窪支店　運転手
新潟県出身／中之口西小／中之口中／吉田商業高中退／三正運輸／新潟中央運送／原田牛乳／松沢運送など経て現在へ／28才

私はイエス様を自分の主として受け入れ、従う決心をしてまだいくらもたっていない者です。決心をした後の一年数ヶ月の間にいろいろなことがありました。主に聞くことをせず、自分勝手な判断で行動をしたためにいろいろな失敗をしましたし、また自分の心の中の醜さがはっきり分り、ほんとうに押しつぶされそうになりました。

今言うことができるのは、いろいろな失敗をした者を、心の中が汚ない者を、神様は見捨てられず悔い改めへと導いてくださったということです。今まで通りまた失敗をしたり、いろいろな困難はあるはずですが、主のみことばに信頼して歩んで行く限り、最善を考えてくださっていることを知る毎日となることを確信しています。

欲求不満、不安、恐れの日々が、感謝と賛美をする毎日になりました。自分のすべてを知り尽くしておられる上で愛し続けてくださっている主を、私も心を尽くし、思いを尽くし、精神を尽くして愛してゆきたい。



信仰への過程

松田　茂

茨城県出身／五箇小／旧制水海道中／早稲田大学法学部卒／35年間茨城県で高校教師(社会科担当)／72才／妻　富美／子供　二男一女／孫　6人

「神は、実に、そのひとり子をお与えになったほどに、世を愛された。それは御子を信じる者が、ひとりとして滅びることなく、永遠のいのちを持つためである」(ヨハネ3・16)

神は私をも次の過程を通して生きた真の信仰の道へと導いてくださいました。①知識としてのキリスト教…在職中、クリスチャンとの出会いと授業を通してのキリスト教思想との出会いで、どちらも知的出会いに過ぎませんでした。②生きた信仰としてのイエス・キリストとの出会い…退職後、次男夫婦の勧めで吉祥寺集会に出席して万物の創造者なる真の神の存在、人間は神を離れ自分中心の生活をしている罪人であること、神はこのような人間をも愛してイエス・キリストを通して救いの道を備えてくださったという恵みを知り、洗礼を受けたのが5年前でした。その後の歩みは不完全ではあるが、主イエスが日々新しく変えてくださることを信じて神に委ねて生活しており、今では家内も救われて日曜日には二人で集会に出かけ、兄弟姉妹方と共に主を拝し讃美して福音に預かり、みことばに約束されて天国をめざして歩んでおります。

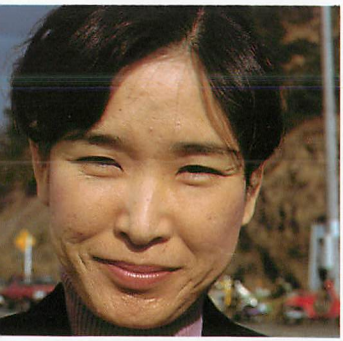


重荷から解放されて

高橋　正一

カイメイ㈱　取締役開発部長
東京都出身／慶應義塾大学幼稚舎／普通部／経済学部卒／67才／妻艶子／子供　二男一女／孫　二人

人は目的と希望を持って、毎日、いろいろな障害を乗り越えて力強く生きようと努力しています。しかし、どのような幸せをつかんで自分自身の心の中に満足を得たとしても、それは一時的なもので何か忙しさを感じざるをえません。私の場合、人生の大半を社会生活の渦の中に投じ、神の存在から遠く離れた生活でした。然し3年ほど前健康に自信を持っていた体が胃がんと宣告されて始めて人間の弱さをまざまざと感じたのです。早くから信仰を持っていた妻と息子と共に吉祥寺集会の兄弟姉妹の、私を案じてくださる篤い祈りと神の導きに目覚め、今まで神を無視していたことを心から悔い改めてイエス・キリストを救い主として信じて受け入れました。聖書に約束されている永遠の命が与えられることを知り、その時から死の恐れからも解放され、真の目的を持って喜びと平安の新しい人生を歩む確信が与えられました。愛に満ちた主のみ心の偉大さ、神がすべてを支配し日々の歩みの一歩一歩を導いてくださるご滋愛に感謝と賛美を捧げずにはいられません。「主に感謝せよ。主はまことにいつくしみ深い。その恵みはとこしえまで」(詩篇136・1)



死の恐れからの解放

近藤　千秋

香川町国保香川病院内科医
徳島県出身／南小松島小／小松島中／城南高／徳島大学医学部卒／夫、子供二人

私は一人の内科医として、いつも死というものに対する限界を感じていました。死を恐れつつ死に向ってゆく人々に対し、ただ医療を施し、慰めの言葉をかけるのみで、本当にその人々の苦悩を理解し、そこに自分の行く末を重ねて見ることはできませんでした。

ところが、総ての人に平等に与えられている肉体の死を、自分の問題として考えた時、まったく滅びの道を歩んでいる自分に気づかされたのです。

「人の目にはまっすぐに見える道がある。その道の終わりは死の道である」(箴言14・12)　また、神に背を向けた姿勢そのものが罪であることを知らされ、打たれました。今は、主にある平安を覚え主のみ前に立つ備えができたことを感謝しています。日々の診療にあっては、次のように祈っています。「主よ、私の力ではここまでしかできません。どうかあなたの愛される病める方々の苦痛を癒し、この小さな器をその方々の魂の救いのために用いてください」。

今、この耳を、聴診や患者の訴えを聞くためだけでなく、静かな細い主の御声を聞く耳として生かしてゆきたいと願っています。

この世のものと神のもののどちらかを選ぶかという真剣な問いが神からなされるということです。

私にとって、それは結婚についての試みでした。キリスト者でなくても、女性にとって、結婚とは大きな人生の岐路となるのですが、特に、日本では、キリストに従おうとする若い未婚の方々にとっては、一つの重要な選択であると思います。ある未信者の男性がおっしゃったのですが「キリスト信者同志の結婚など、百万分の一の確率でしかないのだ」(この数字の根拠は私にはよく分かりません)と明言なさいました。たしかに日本の社会でのキリスト者同志の結婚についての難しい一面を言い当てていると思います。そんな状況の中で、キリスト者として最も大切な事は、誰を選ぶかということではなく、本気で主に従うか否かの選択だと思うのです。キリスト者として、決して優等生ではなかった私の体験をお話ししたいと思います。

主なる神は、私たちの環境を通し、試練を与え、弟子として役立つ者とするために、訓練をなさいます。その訓練の当座はほんとに苦しくて、どうしてこんなつらい思いを私だけがするのかと嘆くのですが、のちにそのおりのことを振り返ると、神さまの訓練は、みごとなほど用意周到で人知をはるかに越えてすばらしいものであると思うのです。

私にとって結婚は、二十代前半まで、まだまだ他人事でした。教師という仕事の厳しさや楽しさに夢中でした。生徒との人間関係や、生徒の家庭の問題について考え、悩み、そして喜びと充実した毎日でした。ところが、二十四、五才ごろから、周囲が放任してくれなくなりました。それと同時に、自分の中にも揺らぐものがありました。ふとしたことで出会った男性に徐々に心が惹かれていったのです。心の中には、キリストへの信仰を選んでいながら、その人への好意は、

ますます募っていくのです。それからは、誘惑との戦いでした。(ふしぎな感じを受けられるでしょうが、私の中の冷静な心が、その人に惹かれながらも私はこの人を愛しつづけることはないと分かっていました。結婚することを主が願っている人ではないと分かっていたのです)というのは、導かれて主に従う結婚生活にというには、私はまだ幼く、砕かれなければならない自我があったのです。そして、相互に心惹かれる相手でありながら、私はこの交際が神に祝福されていないことをますます確信するようになりました。(具体的には、相手には婚約者がいました。でものちに私のことは関係なく二人は別れたとのことですが)

そして私の心には、平安がまったくなくなりました。会っていても心が安まらないのです。好きでしたが、どうにも不安が残りました。でもそう認めたくない私は、彼がなんとかキリストを知り、同じ土台で生きてくれるようにと努力し祈りました。彼の魂の救いのためにと思いつつ祈っていたのに、心のどこかに、私のために救われて欲しいと思っていたのです。そして、ある時はっきりしたのは、このことを通して主に従う道をとるか、自分の欲する道へ行くかと問われていると思いました。それは、聖書のみことばによって迫ってきました。

与えられた勝利

通勤帰りの電車の中でのことです。イエスが復活なさったあと、直接ペテロに三度語りかけられたのですが、その時のおことばでした。「他の者のことはどうでもいい。あなたは、私を愛するか」と。この三度尋ねられたイエスの愛が、私のためであるとはっきり分かったのです。これは

私に今ここで尋ねていてくださる愛でした。私は答えました。「はい。彼をあきらめることは、正直にいってつらいのです。でも、今あなたは彼のことがみむねでないとおっしゃいます。それですべてをあなたに委せますから、どうぞ最善をなしてください。私は、今、あなたにのみ信頼します」。涙がとまりませんでした。

その涙の中で、聖書のみことばが、結婚についての約束と慰めとして与えられました。

あなたの道を主にゆだねよ。
主に信頼せよ。主が成し遂げてくださる。
（詩篇　37・5）

「あなたの時を備える」との主の約束でした。それでも、その後もう会うまいと決心したのですが、ほんとにつらくて、彼の姿に似た人を思わず電車の中や人ごみの中で捜していたりしました。しかし、主に従おうと決心してから、今まで以上にはっきり聖書のみことばと祈りの時が喜びとなりました。「あなたがたに耐えられない試練は与えられない」といわれるように、最も適切な時期に与えられた体験でした。（この頃、私に具体的な祈り方を教えてくれたのが、キャサリン・マーシャルの「愛はいずこへ」「祈りの冒険」という二冊の本でした）

そして、今までどこか頭での理解であった信仰が、ほんとに自分のものとなってきたのです。自分が懸命に信じて従っていると思ったものが、実は主により守られ、信仰心すら与えられて、主の方から「わが子よ」と呼びかけつづけていてくださることを知りました。

それからは、片道が二時間半もかかる道のりでしたが、日曜だけでなく週日の集会にもできる

だけ集うようになりました。そして、今まで気づかなかった自分の霊的な高慢も教えられたのです。私は、心の底で「私はあの人より信仰に立っていて、奉仕もよくしている」と思っているところがありました。キリスト者の優等生になろうとする、主に一番いとわれる罪（傲慢の罪）を示されたのです。この時は主に泣きながら悔い改めました。それから、ますます主を畏れ、自我の恐ろしさを知らされたのです。この内的な葛藤に終りを告げて、信仰の原点に立とうとした頃、外的な試みが始まりました。

結婚と外的な試み

今までは自由にさせてくれていた親も、帰宅のたびに、知人の方々からの結婚話を次々に言い出しました。私の意志を無視して、見合いの話がすすんでいたことが何度もあり、お断りするたびに親子喧嘩でした。

両親の心はよく分かりました。よい結婚をすれば、女性にとってこれ以上の幸いはないとの思いでしたし、娘の幸せな姿を見たいという思いもあったでしょう。また、安心したいとの思いもよく分かりました。私もまた、幸いなよい結婚を願わないはずはないのですが、その「幸いなよい」と考える視点が両親のものとくい違っていました。私は、同じ基盤、同じ価値観で生きていける方でなければ、結婚してしばらくの間は、相互に認め合えるようでも、どこかで必ずギャップに苦しむと思うのです。どんなによい方でも、生活している中で、お互いに自我がぶつからないはずはないのですから。私の願いは、聖書にあるように「共にくびきを負い合う」者として、

結婚したいということでした。同じ聖書を土台として、人生を歩む人であることのみを結婚の条件として主張したのですから、両親には、どうにも理解し得なかったのでした。またそれも当然でした。私と両親とは、互いに信頼し、愛し合っていましたから、理解し得ないことにほんとに苦しみました。聖書にある厳しいみことばの実現でもあったのです。(聖書は神の愛が人間に語られたすばらしい書ですが、人間のただ自分勝手な愛としてではなく、人間を愛するが故に厳しい愛の訓練があることも教えています。そしてこの訓練にどう対応していくのかが、私たち一人一人の責任なのです)

だれでもわたしについて来たいと思うなら、自分を捨て、自分の十字架を負い、そしてわたしについて来なさい。いのちを救おうと思う者はそれを失い、わたしと福音とのためにいのちを失う者はそれを救うのです。人は、たとい全世界を得ても、いのちを損じたら、何の得がありましょう。自分のいのちを買い戻すために、人はいったい何を差し出すことができるでしょう。

(マルコ 8・34〜37)

それは、大きな神の試みの時でした。神の愛か親の愛かという二者択一を迫られたのでした。正直に言って、この二つのものに板ばさみになった時は、私にとって今までにない厳しい、苦しい試みでした。ある時は、あれほど両親も望んでいるものなら、私一人ががまんして結婚すれば、なんとかなるかもしれないと思ったり、また反省しては、何と人にも神にも無責任な考えかと悔い改めたりで、心は波に弄ばれる小舟のように揺れていました。

両親の切実な訴えだけではありません。職場でも、そろそろ結婚が話題にのぼりますし、好意から、具体的に相手を捜してくださる方もありました。

真の信仰が問われて

初めの頃は、この結婚問題を、外的な戦いのように考えていました。まだまだ若いし、若い女性は職場でもチヤホヤされますし、自分もそのうち結婚するだろうと精神的な（時間的な）余裕がありました。しかし、二十代後半になってくると、友人たちが次々に結婚し、取り残されたような淋しさもあり、以前の余裕はなくなり、ほんとに神を信頼しているかということが問われ始めたのです。

信仰は望んでいる事がらを保証し、目に見えないものを確信させるものです。

（ヘブル　11・1）

頭では分かっているのですが、弱っている時、ふとトマスがイエスに言ったように、

「私は、その手に釘の跡を見、私の指を釘のところに差し入れ、また私の手をそのわきに差し入れてみなければ、決して信じません」

（ヨハネ　20・25）

そんな呟きが、ふつふつと湧き出てくるのです。将来こうなりますから待ちなさいというのなら、今がつらくてもがまんできますが、それが隠されているのですから、それは私自身の信仰の

戦いでした。

この時私を支えてくださったのは、集会に集う皆様の祈りと姉妹会（フィベ会と称しますが）の交わりでした。姉妹会は、独身の若い婦人たちの学びと祈りの集いです。日曜日の午後、十名ほどの人々が聖書を学び、祈り、そして最後におしゃべりで終ります。その場で、個人的な悩みを相談することは、ほとんどなかったのですが、互いに、家族の救い、友人の救いについて祈る時、何かほっとするものがありました。そして、不思議なのですが、自分の状態にぴったりの聖書のみことばが語られるのです。

しかし、一人になる週日には、孤独と不安に揺れるのでした。老年になって一人で生きてゆけるかしら、経済的な面も不安でしたし、孤独しか残らないかもしれないとも思ったりしました。

「『あなたを捨てて、孤児にはしない』とイエスは語られたのだが、ほんとにこれでいいのかしら。友人たちは、それぞれに結婚して幸せそうに見える。神さまを信じ、従う人生に悔いはないと分かっている。でも……」という疑いと呟きが湧き上がってくることも、何度となくありました。

街で仲の良い二人づれが目について困った時もありました。そんな時、机に顔を伏せ、泣きながら神に訴えていました。

「主よ。私は不信仰です。あなたにすべてを委ねて、従う信仰を与えてください。自己憐憫に陥らないようにしてください。イエスさま、あなたは私を愛して、愛し尽くして十字架にかけられました。私にその愛に答える信仰を与えてください」

それまで、信仰も、キリストの十字架が私の罪のためであることもよく理解しているつもりでした。しかし、この十字架上の苦しみと死が、私自身のこととなり、「私はキリストとともに十字架につけられました。もはや私が生きているのではなく、キリストが私のうちに生きておられるのです。いま私が、この世に生きているのは、私を愛し私のためにご自身をお捨てになった神の御子を信じる信仰によっているのです」(ガラテヤ　2・20)と告白することを主が求めていらっしゃるとやっと分かりかけていました。ある伝道者の方が「半死のキリスト者では主のお役に立たない。全部自分に死にきったキリスト者のみ主のお役に立つのだ」とおっしゃったことを思い出します。

主のみを見上げて

「たとえ、主が結婚へと導かれなくても、私に主は最良のパンと最善の道を備えてくださいます。天国の私の座のために、キリストは十字架上で死に、三日目に甦えられたのです。それならなぜ、私が自己満足と安楽ばかりを願っていいものでしょうか」と思わされたのです。

あの方は盛んになり私は衰えなければなりません。　(ヨハネ　3・30)

イエスは言われた。「まことに、あなたがたに告げます。わたしのために、また福音のために、家、兄弟、姉妹、母、父、子、畑を捨てた者で、その百倍を受けない者はありません。今のこの時代には、家、兄弟、姉妹、母、子、畑を迫害の中で受け、後の世では永遠

のいのちを受けます。（マルコ　10・29〜31）

昭和五十六年九月に、今までの心の揺れ動きから主を見上げて、一つの決心をしました。「主が導いてくださるなら、独身でいることも喜んで受け入れます。今、私に一番大切なことは、この場で、あなたに役立つ者として用いられることです。主よ、もう以前のように嘆きません。私にあなたのみを見上げ、信頼し、みことばのみが私の慰め、また喜びとなりますように」と心の底から祈ったのです。

その後、不思議なほど心が安らかで、今まで必死に負っていた肩の荷をおろした時のように、さっぱりとしました。また、エヴリン・クリステンソン著の「神のすばらしい計画」（原書の題―損失を通して益を得る）を読んで、とても励まされたのもこの頃です。

結婚に導かれて

今まで願いつつも委ねきることができなかったのに、それ以来、捧げる喜びと祝福が、人の考え及ばない平安な心となって満ちてきました。

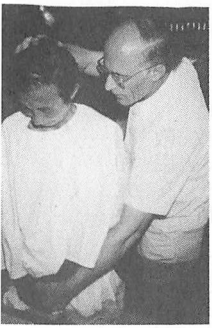
それからは、主は私の思いもしなかった不思議な方法で、急速に結婚へと導いてくださったのです。職場の友人であった荻野由紀子さんを一年半前に導いてくださり、彼女は主を受け入れて心から主に従う歩みをなさっていました。彼女のお母さまも半年後に救われ、そののち、彼女の友人の友達であるMさんが救われました。以前から、家族や友人の救いについて共に祈っており

ました荻野さんと、Mさんのことも祈り始めました。

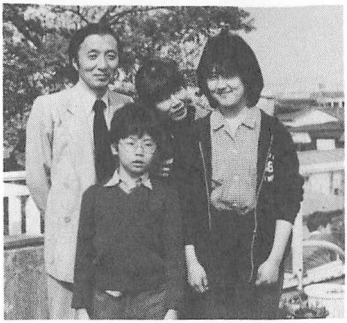
祈り始めてから半年ほどたった頃、Mさんの紹介で弟さんの元一さんにお会いすることになりました。始めてお会いした元一さんは、大学進学に直面している生徒の問題や、信仰についての話を真剣に聞いてくださり、吉祥寺集会にもいらっしゃるようになりました。そして二ヵ月後のクリスマス前に、イエス・キリストを信じ受け入れられました（C・S・ルイスの「キリスト教の精髄」は大きな助言となったとのことです）。その後、結婚の申し込みを受けて、一九八二年、二月に婚約しました。そのおり荻野さんが、「主の祝福が、あなたから発し、私が救われ、そしてあなたに帰ってきたのですね」とわがことのように喜んでくださいました。そして彼女も、まったく予想もできなかった方法で、それから半年後の九月二十三日に松田さんと婚約なさったのです。心から人を祝福する者は、また主からの祝福を受けるように思いました。

むろん、結婚が人生のすべての幸いとはなり得ません。否、むしろそう幸いな夫婦はいないといってもいいでしょう。しかし、神によって導かれた結婚は、二人の真の一致と神さまから与えられる多くの祝福があります。今の私たちには、大きな家も、家具も、名誉や財産もありませんが、主はいつも共にいてくださいます。日常生活での小さな悩みや不安、そして仕事に疲れ果ててしまって苛立っている時、二人で心を一つにして祈ると、心から互いを赦し、受け入れることができるのです。ほんとうに小さな奇蹟の毎日です。

「男は妻の頭であり、男の頭はイエス・キリストである」と聖書は語りますが、私たちの小さな家庭の柱は主人であり、その上にいつも見えない主であるイエスさまがいらっしゃいます。



▲ '82年7月、バプテスマ。



▲ ご家族全員で。'84年4月。

駆けのぼりし、主の道

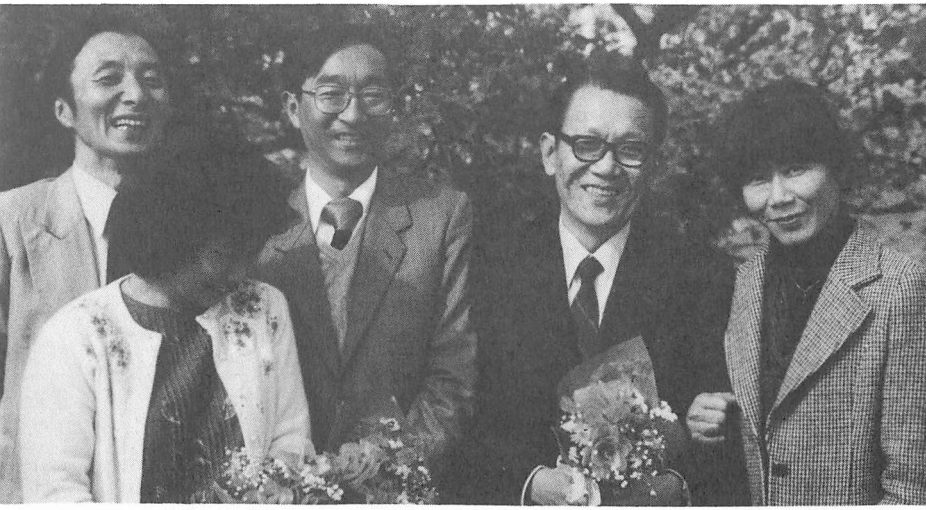
アルコール症からの解放

染野　茂夫

一九四二年東京に生まる。二葉小、早稲田中学、高校卒業。成城大学文芸学部芸術コースで、映像美学を専攻。「話の特集」編集部を経て読売広告社入社。TVCF、TV番組を制作。主なプロデュース番組「みなしごハッチ」「いなかっぺ大将」「てんとう虫の唄」(フジテレビ)。「1・2・3と4・5・ロク」(TBS)。「娘ありて」(テレビ東京)等多数。現在、㈱広報社、営業部次長。なお奥さまの待子さんの証しは第Ⅰ集に収められています。子供は長女麻衣子さんと長男浩一郎君。

家庭集会　東京都小金井市中町一－一五－一七　電話〇四二三－八五－一八四一（日時は不定期）

▼ 高田雄二氏、大塚二郎・玲子ご夫妻のバプテスマの日に。



昭和元年、夏。

敬虔なキリスト者。詩人、八木重吉は、語っています。「イエスは、右の手に光を持ち、左の手に救いを持っていられたのだと思います。右の手で、私らをすっかり照らして、私らに自分の底をよく見させ、自分とは、こんなものだということを知らせ、それから、左の手で救いとって下さるのだと思います」

二年前の春。満開の桜に寒い雨が降りつづく日。

私は、旧陸軍の精神病院の一室に居ました。別名4・3病棟と呼ばれるアルコール中毒治療の専門病棟の保護室です。再入院のアルコール中毒患者の私は、外泊飲酒し、懲罰と反省の部屋に閉じ込められ、強制退院の宣告の予感にふるえながら、まるで牢につながれた囚人のようにアルコールに冒された頭を抱えていました。

その数日前、入院後の一ヵ月が過ぎ、主治医の外泊許可を得て、帰宅した私を待っていたのは家具もろとも忽然と消え去った家族のいない空洞の家でした。

通じない電話が一台、死んだカブト虫のように転っている寒々とささくれ立っている畳の上で陽に灼けただれたカーテンを引き裂いて、肩からかぶり、私がまずしたことは、酒を飲むことでした。

入院した時から、手紙で別居を提案していた妻が、家族の温りひとつ残さずに見事に蒸発したのでした。点らない電気。切れた電話。水の出ない水道。死んだ家の中で、慢性進行性自殺者と

呼ばれる、アルコール中毒者がまずしたことは、酒を飲むことだったのです。

アルコール中毒（依存症）者は、慢性進行性自殺者と呼ばれています。それは、十年、二十年、という年月（飲酒歴）をかけて、あらゆるものを失いつつ徐々に死んでゆく病気だからです。まず社会的死（失職、人間関係の破綻）に始まり、家庭崩壊（別居、家族離散）の死があり、そして、その肉体的な死によって完結するのです。

数日後、私は、あの精神病院の一室に、連れもどされるわけですが、ふりかえると、再入院、一ヵ月後の外泊、家庭崩壊の現実、再飲酒、保護室への収容と続く、この一連のプログラムは、神の救いにあずかる最初のプロセスだったのです。

勿論、あとで判明したことですが、あの家族の蒸発は、すでに、吉祥寺キリスト集会に導かれ、主イエス・キリストによって救われていた妻が、再入院の時から、ベックさん、集会の皆さん、主治医の三船先生の助言と計画のもとに、聖書によって示され、取った行動だったのです。それは、ひとつの賭けであり、確信に満ちた行動だったのです。

「この病気は死で終わるだけのものではなく、神の栄光のためのものです。神の子がそれによって栄光を受けるためです」

（ヨハネ　11・4）

外泊し、再飲酒した私が収容されたアルコール病棟の保護室。そこで、主は、私に、「自分の底をよく見させ」て下さいました。

神へのいけにえは、砕かれたたましい。砕かれた、悔いた心。神よ。あなたは、それを

さげすまれません。　（詩篇　51・17）

悲しむ者は幸いです。その人は慰められるからです。　（マタイ　5・4）

毛をむしられた鶏のように赤裸にされた私は、何も誇るべきものがない、自らを支える力の基盤をすべて失った状態に置かれたのです。私には、帰るべき所がない。会社も、家族も、友人も、断ち切られ、失うものは何もない、そのどん底にあっても、なお酒を飲んでしまうアルコール中毒という忌まわしい肉の体質だけを残されて。しかし。

絶望と悲しみの中にあって、鉄格子の窓外に、爛漫と咲いている桜の花に目をやり、肌にしみるような冷たい春の雨音にうたれながら、なお、退廃と虚無にうそぶいていました。

桜の樹の下には、死体が埋まっている……だから、あんなに美しく咲いているのだ。

花に嵐のたとえがあるさ、さよならだけが人生だ。

繰り返し、繰り返し、こころの中で反復したところで、これらの言葉は、何の意味も、慰めをも私に返して来ません。ある時には、生きるバネでさえあったこれらの言葉に象徴される思考も、遙かに強い力によって、完全に打ち砕かれていたのです。

誇るべき何もない、失うものすらもう何も残っていない、死んだマグロのような腐りかけた体を硬いベッドに横たえている時、隣の部屋から、声がしました。

蜜と呼ばれる、その少年は、シンナー中毒で、他の患者と共同生活をすることが出来ず、保護

室で療養を受けていたのです。シンナーによってすでに脳細胞を破壊されているこの少年に、回復の希望は全くありませんでした。刺青を彫ることへの願望と、祖父がイギリス人であるという幻想を誇り、語る時以外は、錯乱と狂気に支配されている少年が隣の部屋から壁ごしに語りかけてくるのです。支離滅裂な問いかけのなかから、蜜が言っていることをはっきりと聞きとることが出来ました。ラジオから流れる音楽のボリュームを部屋いっぱいに轟かせて、高く吠え、時にひとり言のようにくぐもり、また歌うように、彼は間欠的に語りつづけました。

「染野さん、染野さんは直るよ。ぼくは、もうだめだけどさ。ぼくはシンナーの毒が頭にきちゃったから、もう直らないけどさ。染野さん、染野さんは直るよ。ぼくは死んじゃうかもしれないけどさ、ご飯を食べないからさ。刺青を彫るんだ。退院したらさ、刺青を彫るんだ。でもそれまでに死んじゃうかもしれないしさ。ぼくのおじいさんは、イギリス人だよ。信じる?」

「……」

「染野さん、染野さんは直るよ。ぼくは、もう頭が壊れちゃっているからさ。直るかな?もう直らないね。みなそういってるしさ。でも、染野さんは、直るよ」

ふだん、まともな会話すら出来ない蜜が、このように語りかけてくるのは、何なのか?

少年が黙り、さらにラジオのボリュームをあげた時、主治医が入って来ました。再入院の患者が外泊飲酒をした場合は、強制退院につながることがこの病院ではあるのです。私は、そのことを恐れました。

長い沈黙のあと、主治医の言った言葉を鮮やかに覚えています。ドクターは、一言、噛みしめ

るように言ったのです。

「もう一度、やり直しましょう」

主治医が静かに去り、私は激しく、回復りたいと、希求いました。

私は、きょう、あなたがたに対して天と地とを、証人に立てる。私は、いのちと死、祝福とのろいを、あなたの前に置く。あなたはいのちを選びなさい。あなたもあなたの子孫も生き、

あなたの神、主を愛し、御声に聞き従い、主にすがるためだ。（申命記 30・19～20）

保護室での数日間をとおして、私は、アルコール中毒（依存症）という病気に無力であることを知るのです。現代の医学をもってしても、完治不能な（医師たちの証言）、意志の力や精神力をもってしても克服不能なこの精神病に、素直に無条件降伏をしたのです。

回復したいという強い希望が生まれるためには、惨めな自己否定が必要だったのです。得意の絶頂にあっても（自力による約二年間の断酒を経験。それも仕事の成功という自力での得意の絶頂に、飲んで失敗した）、失意のどん底にあっても、飲んでしまう。アルコールという、「巧妙で、不可解で強力なもの」に白旗を掲げたのです。

主治医と蜜の言葉、病気に対する無力という新しい認識、それらによって、やわらかく揉みほぐされたこころで、私は、始めて聖書を開きました。三年前に救われ、キリスト者とされた妻が、入院の時にボストンバッグにつめてくれていた聖書です。あらゆる機会に、妻が読むことをすす

めていた聖書。それまで、私は、無視しつづけ、むしろ反抗的な姿勢で拒否してきました。しかし、何故か誘われるように、素直な気持で、その時聖書をめくったのです。

初めに、神が天と地を創造した。
そのとき、神が、「光よ。あれ」と仰せられた。すると光ができた。
神は、その大空を天と名づけられた。こうして夕があり、朝があった。

（創世記　1・1、3、8）

聖書の冒頭。最初の聖句。それは、私のいささかの理知を遙かに越え、ささやかな体験的知識を踏みつぶし、人間的なとぼしい想像力では、捉えることのできない、圧倒的なイメージとして絶対者、全能者（神）の存在を記していたのです。

光りかがやく巨大なイメージの前に、私は茫然としていました。みるみる矮小化していく自分を感じていました。しかし、その感情に卑屈はなく、むしろ解放のさわやかさがあったように思われます。自らがセギュメントしてきたと信じ、鋭く磨きつつ、蓄積してきたつもりの芸術的感性（私の生きる指針）。それによって武装した自己を中心とし、さまざまな取捨選択をくりかえして生を縫って生きてきた私の、自分があって世界があるという自己存在の認識。その時の爽快な解放感は、それら私に染みついていたものを剝ぎ取り、裸にされたところから立ちのぼってきたのでしょう。

聖書の冒頭の最初の聖句は、私にとって劇的な出逢いでした。それは、知的理解とは遠く、ま

さに上からの啓示として、圧倒的な存在感（リアリティ）を伴って、荒れ果てたこころの未開地（フロンティア）に神ご自身が降り立って下さったのです。

事実、この世が自分の知恵によって神を知ることがないのは、神の知恵によるのです。

（Ⅰコリント　1・21）

四月のうすい黄昏（たそがれ）の中で、頭をたれ、聖句を目で追い、目をつぶり、こころの中で反芻（はんすう）する。充足と充血に満ち、時を忘れ、自分を失いながら、とりつづけたその姿勢は、無意識に私がとった、生まれて始めての祈りの姿勢だったかも知れません。

五月に退院した私は、井の頭線、明大前のまるで中核派のアジトのようなアパートに、ひとりで生活をはじめました。家族と引き離されたこの数ヵ月の時間は、神が、私を救いへと導くために、用意してくださった極めて濃縮された、周到な時だったと思います。

退院後のアフターケアとして、毎日、病院から紹介されたA・A（アルコール・アノニマス＝無名のアルコール者たち）と呼ばれるグループセラピーに通い、水曜日の夜は、吉祥寺キリスト集会の学びの集いに、そして、日曜日には福音集会へ出席するという日々でした。A・Aグループセラピーと、吉祥寺集会。神は、この時期、回復（いやし）と救いへの道だけを歩むことを、私に、与えて下さったのです。

A・Aグループセラピーに参加できる条件は、男女共、アルコールか薬物の依存者であること。そこで要求されることは、「厳格な正直さ」と、回復したいという希望だけでした。ミーティング

はその時々のテーマにそって、それぞれが正直に話し、他の仲間、彼、または彼女の発言に、質問したり、批判、注釈、助言を加えたりすることは禁じられています。いわば、言いっぱなし、聞きっぱなしというシステムなのです。

ですから、A・Aミーティングに積極的に参加、消化することは、他者の言うことを、素直に聞く耳と、正直に事実を語る口を強める効果を持つわけです。

そして、厳格な正直さをもって語られることに対して、参加している仲間は、何の返答もしませんから、嘘、偽りが混じると、その発言は、痛みとなって、苦く発言者自身に刺さってくるのです。そうして、訊く者の耳も、ととのえられてくるのです。回復への第一のステップです。

信仰は聞くことから始まり、聞くことは、キリストについてのみことばによるのです。

（ローマ　10・17）

極めて、具体的に、自分が犯してきた過ちを述べる。正直に。素直に。それは、いつしかミーティングの仲間に話すという感覚を越えて、ミーティングの時と場所を支配している絶対者に語るという意識に変えられていきました。それは、当然の帰結です。

なぜなら、A・Aの掲げる回復のステップは、

1　われわれは、アルコールに対して無力であり、生きて行くことがどうにもならなくなったことを認めた。

2　われわれは、自分より偉大な力が、われわれを正気に戻してくれると信じるようになった。

3　われわれの意志と生命の方向を変え、自分で理解している神の配慮にゆだねる決心をした。この基本的な、無力の認知、回復への希望と信仰を通して、自らの信じる神へ、自らをゆだねきるプロセスに他ならないからです。

そして、私に於ける至福は、

- いかなる人間的力も、アルコール中毒に救いをもたらすことができないこと。
- 神には、それができ、求められればそうして下さる、ということ。

A・Aが結論的に掲げる回復の原理にこめられた、われわれに唯一の救いをもたらすことのできる神こそが、吉祥寺キリスト集会の集いと、聖書をとおして私に、自らを具現してくださり始めておられた神、すなわち、ひとり子イエス・キリストを私たちのためにつかわして下さった神に他ならなかったのです。

中学生の頃から、飲む、打つ、買うに走ったこと。
酒を飲んで、喧嘩ばかりしていたので、その頃から、何度も留置場に拘束されたこと。
練馬の少年鑑別所から、あわや少年院送りになりそうになったこと。
死の床にいる母に、遊興費欲しさに、がん宣告をしたこと。
酔って正体不明になり、娘の同級生の家に上りこみ、警察沙汰になり、まだ小学生だった幼い娘を悲しみに沈めたこと。
飲む、打つ、買う、三拍子揃った放蕩生活が荒れ果て、際限なく、妻を泣かせつづけたこと。

自己の感性を最良とする自己中心の冷酷と、独善等々。等々々。

自らを調べ、悔いに裏打ちされて、それらをひとつひとつ告白する時、それら行為の罪ばかりではなく、自分を神として、まことの神から遠く離れていた自分に、さらに離れていたばかりではなく反逆し、抗いつづけていた罪に気づかされたのです。

あなたがたは自分の罪過と罪との中に死んでいた者であって、そのころは、それらの罪の中にあってこの世の流れに従い、空中の権威を持つ支配者として今も不従順の子らの中に働いている霊に従って、歩んでいました。私たちもみな、かつては不従順の子らの中にあって、自分の肉の欲の中に生き、肉と心の望むままを行ない、ほかの人たちと同じように、生まれながら御怒りを受けるべき子らでした。しかし、あわれみ豊かな神は、私たちを愛してくださったその大きな愛のゆえに、罪過の中に死んでいたこの私たちをキリストとともに生かし、――あなたがたが救われたのは、ただ恵みによるのです。――キリスト・イエスにおいて、ともによみがえらせ、ともに天の所にすわらせてくださいました。

（エペソ　2・1～6）

ですから自分の罪過と罪の中に死んでいた、この私を、神の愛と恵みとによって、新しく生かして下さるイエス・キリストこそが、A・Aグループセラピーがその伝統の中に、唯一の権威として救いと希望の光として刻印している愛なる神、であることをはっきりと感受することができたのです。

イエス・キリスト。純白で無垢なるなつかしい香りに満ちたこの方の口から語られた、聖書の一場面、「神が私たち人間にそそいで下さる愛と恵み」は、何度読んでも感動を禁じえませんでした。それは、私に於て、心ふるえる個人的な、実在感な体験だったのです。

父の財産を、遊蕩で使い果し、そのあげく、身もこころもボロ布のようになって父の前に帰って来る、有名な放蕩息子の話を、イエス・キリストは、静かに、心に浸みるように語ってくれたのです。

ところが、まだ家までは遠かったのに、父親は彼を見つけ、かわいそうに思い、走り寄って彼を抱き、口づけした。息子は言った。「おとうさん、私は天に対して罪を犯し、またあなたの前に罪を犯しました。もう私は、あなたの子と呼ばれる資格はありません」。ところが父親は、しもべたちに言った。「急いで一番良い着物を持って来て、この子に着せなさい。それから、手に指輪をはめさせ、足にくつをはかせなさい。そして肥えた子牛を引いて来てほふりなさい。食べて祝おうではないか。この息子は、死んでいたのが生き返り、いなくなっていたのが見つかったのだから」（ルカ 15・20〜24）

私が、天(神)に対して罪を犯し、あなた(イエス様)の前に罪を犯しましたと悔い改めた時、父親(イエス様)は、「さあ、祝おうではないか」とおっしゃって下さったのです。

肥えた子牛をほふって、「いっしょに食べようではないか」と祝福して下さったのです。まだまだ家まで遠いのに、走り寄って抱きしめて下さった主イエス。

血のにじんだ素足にくつをはかせ、荒れすさんだザラザラの肌にやわらかい服を着せて下さった主イエス。そして口づけさえして下さった。めくるめくダブルイメージの鮮光で、愛なる神の実存と、救いの確信を私の魂に焼きつけて下さったイエス・キリストご自身が語られたこの一場面こそ、私にとって、福音の核と言えたのです。

神が、ひとり子イエスをキリストとして、私たちの為に天からこの地上に授けて下さった。この一点に全人類の救いの希望があることを、個人的な体験をとおして、知ることが出来たのです。

キリストは、神の御姿であられる方なのに、神のあり方を捨てることができないとは考えないで、ご自分を無にして、仕える者の姿をとり、人間と同じようになられたのです。キリストは人としての性質をもって現われ、自分を卑しくし、死にまで従い、実に十字架の死にまでも従われたのです。それゆえ、神は、キリストを高く上げて、すべての名にまさる名をお与えになりました。それは、イエスの御名によって、天にあるもの、地にあるもの、地の下にあるもののすべてが、ひざをかがめ、すべての口が、「イエス・キリストは主である」と告白して、父なる神がほめたたえられるためです。（ピリピ　2・6〜11）

キリストは罪を犯したことがなく、その口に何の偽りも見いだされませんでした。ののしられても、ののしり返さず、苦しめられても、おどすことをせず、正しくさばかれる方にお任せになりました。そして自分から十字架の上で、私たちの罪をその身に負われました。それは、私たちが罪を離れ、義のために生きるためです。キリストの打ち傷のゆえに

あなたがたは、いやされたのです。

（Ⅰペテロ　2・22～24）

なぜなら、神はみこころによって、満ち満ちた神の本質を御子のうちに宿らせ、その十字架の血によって平和をつくり、御子によって万物を、ご自分と和解させてくださったからです。地にあるものも天にあるものも、ただ御子によって和解させてくださったのです。

（コロサイ　1・19、20）

私たちの背きの罪の為に、全き罪のない御子イエスは、私たちのすべての罪を一身に負って、罪そのものとなって十字架にかかって下さったのです。そして、私たちの罪を浄め、いやす為によみがえって下さったのです。

イエス・キリストの十字架の死に、神の全人類に対する愛があり、そして、イエス・キリストの死からの復活に、愛そのものとなられた主イエスの実存がある！

イエス・キリストの十字架の死と復活を、はっきりと確認でき、イエス・キリストを救い主として、受け入れた頃の私は、まだ、家庭からも、社会からも切り離されていましたが、孤独と不安からは、完全に解放されていました。

朝早く、聖書だけを抱えて海へ行き、日が暮れるまで、海辺で読み耽けっていたのもその頃のことです。また、A・Aのミーティングで、

「酒を断めることが、人生の目的ではない。酒を断めることは、生きる手段に過ぎない。逆に

いえば、生きる目的を見い出せなければ、酒や薬は、断めることが不可能だ」

「生きる目的は、信仰を持つことだ。われわれの病気は、必ず回復する、希望がある、という信仰から、A・Aがさし示す神。愛なる神。すなわち主イエスへの信仰を持つことだ」

「すなわち、主イエスへの信仰を生きることが、われわれの人生の生きる目的となる」

というような発言を繰り返したのもその頃のことです。

愛なる神、主イエスの圧倒的な愛に導かれて、受洗にあずかる洗礼式の朝、吉祥寺キリスト集会のベックさんのお宅の居間で、家族のひとりひとりに、妻に娘にちいさな息子に、悔い改め、謝罪しました。

いままで、つらい想いや、悲しみに沈めた家族のひとりひとりの肩ごしに、朝の夏の光の中に、主イエスの臨在を感謝しながら。

主イエスの救いにあずかった現在、アルコール中毒者になったことは、(間断なく続く残酷で凄惨な、発狂寸前の禁断症状と、すべてを喪失する恐怖を思うと)決してよかったとは、考えませんが、私のような者には、アルコフォリックで打つことによってしか、主に救われる方法はなかったように思われます。

五月に退院して七月に受洗。入院から数えても、わずか数ヵ月たらずで救われたことに、主の御わざのすばらしさ、その完璧さに、驚嘆せざるをえません。A・Aグループセラピーのミーティング(回復)と吉祥寺キリスト集会(救い)のふたつの場を用意してくださり、そのふたつの「主

への道」だけを走らせ、一挙に救い上げて下さった主。

しかし、ふり返ってみると、要所要所に主の細やかな配慮を知ることが出来ます。まず、妻をみ前に召し出し、つぎに娘を。私が崩壊に追いこんだ家庭にあって、そこに住むもっとも近しい者たちの魂をととのえて下さり、彼女たちの回心と、その新しい変貌をとおして私に働いて下さり、私の意識の底に手をさしのべていて下さったのです。

毎朝、起きてくると家の中に、子供の聖歌が低く流れていました。酒に痺れ、疲労困憊した私のこころに、その美しい調べは浸みたようです。今でも、そのうちのいくつかを口ずさむことができます。

さらに、数年に亘る吉祥寺集会の兄弟姉妹（主によって救われた人々はみな主にある兄弟姉妹となります）の熱い、敬虔な祈りによって支えられ、導かれていたのです。その祈りと、妻の、私の救いに対するゆるぎない確信がなかったら、私はおそらく死んでいたと思います。

こうしてペテロは牢に閉じ込められていた。教会は彼のために、神に熱心に祈り続けていた。（使徒　12・5）

そして、入院の時、酒と汚物と死の匂いにむせるような部屋に、ドロドロになって転がっていた私を背負い出してくれた集会の兄弟。車で病院に運んでくれた姉妹。何度も何度も、病院に足を運び、私の冷笑と侮蔑に追い返されながらも、福音を伝えてくれた兄弟たち。

主イエスの大いなる愛、仕えつづける無私の愛そのものを証ししつづけてくれた吉祥寺キリス

ト集会の主にある兄弟姉妹たちの愛のささえがなかったら、地獄の死へと私は落ちていたに違いありません。

神の救いの計画のうちに、このような私も入れられ、愛にまもられながら、その恵みをいただいたことに、深く感謝するのみです。

私たちすべてのために、ご自分の御子をさえ惜しまずに死に渡された方が、どうして、御子といっしょにすべてのものを、私たちに恵んでくださらないことがありましょう。

（ローマ　8・32）

受洗して二ヵ月後に、私たち家族は、また共に、生活できるようになりました。私も社会復帰し、一年後、すなわち一九八三年十一月の秋も深まって、わが家の新築祝いをかねて、はじめての家庭集会を持てました。多くの兄弟姉妹と共に、集われた未信者の方々のうちに、私の親族もふたり集ってくれました。血の親族からもドロップアウトしていた、見離されていた私にとって、それは、喜びでした。主の祝福に感謝しつつ、声高らかに讃美しました。

あたらしき地にふみいだす
こころにそなえありやみよ
ヨシュアのごとくわれもいわん
「わがやとわれは主につかえん」

むらがるあだもなにかあらん
さきだつきみはイエスなれば
ヨシュアのごとくわれもいわん
「わがやとわれは主につかえん」



▲仕事中の染野氏。



▲'76年4月11日、結婚式。



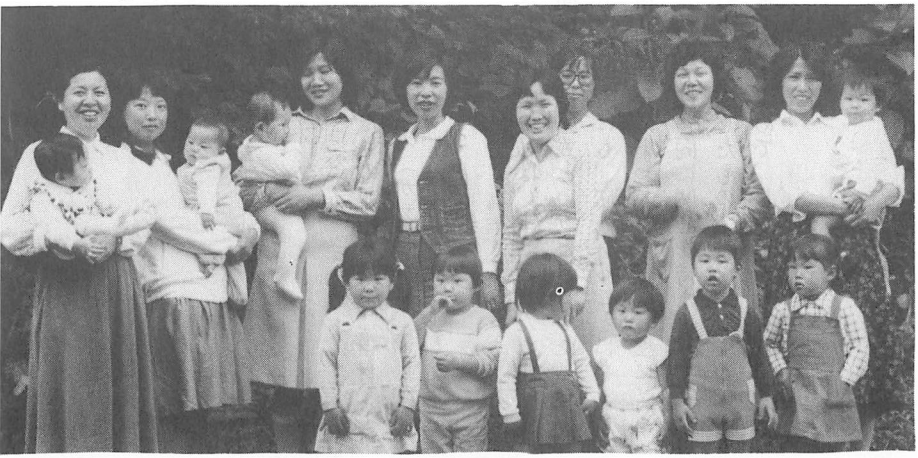
▲'80年三橋さんの特別集会の時、右から竹腰さん、鈴木さん、住田さん。

御手の中で

鈴木三枝子

一九五二年徳島県阿南市に生まる。大井小、加茂谷中、県立小松島西高を経て四国女子短期大学家政科卒業後、栄養士として病院勤務。一九七三年に上京し、錦糸町駅ビルカメラ部、磯村時計商会、土屋家具センター勤務を経て、㈱浜町現像所営業責任者の克男さんと結婚、長女あかりちゃん、次女実穂ちゃん。趣味は写真撮影。
家庭集会　千葉県柏市あかね町二二-五　電話〇四七一-六三-六四九八（日時は不定期）

▼柏の家庭集会の日に。



ただ主をあがめて　ただ主に仕えん
ただ主を頼りて　ただ主を仰がん
賛えよ　ただ主を　主は救いぬし
聖めぬし　いやしぬし　王の王　主の主

（聖歌　五二〇）

主の御名を心から賛美申しあげます。

キリストは、今の悪の世界から私たちを救い出そうとして、私たちの罪のためにご自身をお捨てになりました。

（ガラテヤ　1・4）

神の愛にふれて

私が初めて福音に接したのは、昭和五十一年四月上旬でした。その頃の私は、幸せの真ただ中にありました。一年間の主人との生活を経て、いよいよ一週間後には結婚式というときでした。

徳島の実家に、暇乞いをするために帰る道中、和歌山にいる次兄の所にも、立ち寄ることになりました。兄は二年ほど前からクリスチャンになっており、和歌山集会に集っていました。私にも何通かの手紙を通して神さまの証しをしてきていましたが、私の方は一向に関心を持たず、すっかり変わった兄に兄妹の関係がぷっつり切れてしまったかのように感じたものでした。ですが会ってみると、やはり同じ笑顔の兄にほっとしました。兄の強引なすすめで、しぶしぶ集会に出ることになりました。

夜の集会の前に、当時婚約中であった和子さん（現在の兄嫁）と三人で食事をしてから出かけようというので、お寿司屋さんに入ったのですが、いざ食べようとすると急に、ふたりが神妙な顔をして祈り始めたのには驚きました。大胆にも声を出して、まるで誰かがそこに立ってでもいるかのように祈るのを見ておかしくて、元来笑い上戸の私は、初めは必死にこみ上げてくる笑いをこらえていたものの、とうとう大声で笑い出してしまったのです。すると、兄は顔色を変えて厳しく私を戒めました。その顔を見て「兄たちは本気で信じている」と思いました。集会に出席しても皆同じように真剣な姿で、今までの私の人生をふり返ってみましても、ここにある清さや静けさ、暖かさとはまったく対照的でした。赤や青のネオン、にぎやかな音楽、争い、冗談、いやみ、泥酔、虚栄、それまでの私が歩いて来た道は、心の静まる時を無理に避け、それでいて孤独で寂しいものでした。

かつて、人生や宇宙を支配している絶対者について一度だけ真剣に考えたことがありました。中学三年生の受験戦争も真最中の頃でした。人生の基盤を求めていたのです。周囲の激しい流れの中で困惑し、どこに向かって生くべきか分からず悩みました。が、その時は自分の存在の意味について、また私の人生のすべてを支配してくださっている方について知るすべのないまま、過ぎ去ってしまいました。そしてすっかり世の流れの中で、疑うことをしないばかりか、「一度きりの人生、良くも悪くも私のもの、誰にはばかることがあるものか」と心のおもむくままに肉の満たしを求めて、どんどん自己中心の生活に流されていたのです。

その夜、私は生まれて初めて神さまについて聞きました。兄の家に帰ってからも、創世記一章

一節「はじめに神が天と地を創造した」ことから兄が解り易く教えてくれました。

幼ない頃、眺めて育った谷川のせせらぎや、四方八方から覆いかぶさってくるような山々、引き込まれていきそうな、それはそれはきれいな星空などが、すべてこの一節によって解明され、感動を覚えたのでした。中学三年生の頃の思いが八年後によみがえっただけでなく、今度ははっきりとした答をもって、「みことば」として私の前に現われたのでした。

あまりに汚れた八年間、肉親を悲しませ、また多くの方々に迷惑をかけてきた期間でした。その古き私にかかわられた方々に、この場をもって心からおわび申し上げます。

それから四国へのフェリーの中で、兄から手渡された一冊のすばらしい証しの本を夢中で読みました。それは三浦綾子さんの「道ありき」でした。読み進んでゆくうちに、昨夜の情景と重なって「神さまは確かにおられる。神さまがなさっているのでなければ、兄や和子さんがあんなに変えられ、またこうして三浦さんがまったく新しい人生を歩めることはない」と驚きと共に確信が与えられました。

イエスさまに出会う前の三浦さんが、そのまま私の姿のように見えました。

気性が激しく、我がままで、ことに同時にふたりの人と結婚の約束をするような、いい加減で、どこかすべてにおいて冷めているのでした。その彼女の内に起こったことはあまりにすばらしいことでした。男女の間の愛など比べることができないほど清く、尊い愛にふれるにつれて、ゆがんだ心が真っ直ぐにされ、神の前に素直な子供のように罪を悔い改め、神を称え、神に従い、自分よりも他の人のことを顧みるようになって行く……。

読みながら、私は神を恐れずにしてきた行為の一切について胸が刺され、何度も自分の罪に溜息をつき、「神さまごめんなさい」とつぶやきました。「神さまがこんな私を愛して御子を十字架で罰せられたなんて。私もイエスさまを信じよう。信じるしかない。そして今までの腐りきった人生から救われたい」そう思いました。こうして神さまは初めて耳にしたみことばやメッセージを、信じきれずにいた私に、ご自身の御手のわざによってさらにはっきりと示してくださったのです。

わたしが言うのを信じなさい。さもなければ、わざによって信じなさい。(ヨハネ 14・11)

結婚

数日間徳島に滞在して挨拶をすませると、主人の待つ市川のアパートに帰りました。

主人はすっかり別人のようになってしまった私を、どう受け入れたらいいのか困惑したようでした。とうとう結婚式の前日、彼は怒りをぶちまけて言いました。

「俺とキリストとどっちが大事なんだ。キリストを信じるというのなら、もう結婚なんてやめようぜ」

キリストを捨てる？　否、否、否、それはどんなことがあってもできない。もう一度、苦しみながらお酒で自分をごまかし、なだめて生きるというんでしょうか。そもそも私の結婚観は、自分を家や夫、子供のために犠牲にして、一生奴隷のように束縛されるなんてたまらない、でも親のために一度結婚すれば、などという傲慢な思いも動機の一つとしてありました。

それでしたから、イエスさまの聖さにひかれている今、私にとってすべてが色褪せて見えてい

たのでした。
「あなたがイエスさまを信じた私とは結婚したくないと言うなら、仕方がないわ。結婚やめてもいいよ」
「俺は男まさりの大酒飲みの、愉快でさっぱりしたおまえと結婚したかったんだ」
「でも何と言われてもどうしようもないよ。私はイエスさまを捨てられないもん、ごめん」
とうとう朝方三時まで平行線のままでした。当時、私たちの親友だった加藤さんが仲裁に入ってくださいました。
「克男、まあ、まあ。気持は分かるけどさ、明日は結婚式なんだからさあ、ここのところは三枝ちゃんの信仰を認めてやろうよ」
「三枝ちゃんもね、克男は宗教が嫌いだと言っているからさ、絶対にすすめないことにして、三枝ちゃんだけ信じていればいいだろ」
主人も私もその条件をのんでどうにか話がまとまり、数時間睡眠を取ったあと、午前八時、大急ぎで三人そろって式場に向かいました。
昭和五十一年四月十一日。何とも複雑な心境のまま、何も知らない家族や、知人、友人の方々に祝福されて、私たちの結婚生活は始まりました。もちろん誰よりも神さまご自身が、私たちが離れることを「よし」とはされず、結び合わせて祝福を与えようとされたのです。
その年の十一月末に、一戸建ての小さな家が与えられて、柏に引っ越してまいりました。
主が「向きを変えて出発せよ」(申命記1・7)と言われてから七年が過ぎ、その間には数えき

れない祝福をもって私たちに恵んでくださいました。あんなに抵抗していた主人も、一年後には集会に集い、流産を何度もくり返す中からふたりの女の子も与えられました。またご近所の奥さま方をひとりひとり召し出してくださって、共に祈り合い、賛美する群れを起こされました。徳島の母や、兄嫁の朝美さん、いとこの綾子さんとそれぞれの方法をもって導いてくださり、私たちの家族の上にもみことばのお約束を成就してくださいました。

主はどんなときにも、みことばや愛する兄弟姉妹を通して慰め、支えて、私のつたない祈りにも百パーセント答えてくださいました。心から賛美いたします。そのような恵みのうちにも、主の訓練は厳しいものでした。

自らを知らされて

主人は初めの頃、数回集会に集っただけで、救いの確信のないまますっかり集会から遠のいてしまい、以前にも増してひどい状態になりました。毎晩のように酔って帰り、私の信仰をあざ笑い、ついにはイエスさまさえも呪うような言葉を吐くようになりました。従うという決心をし、洗礼まで受けた主人でしたが、生きた主との交わりを持てない状態は、なおのこと主人の心を苦しめたようでした。集会に何とかして私と子供たちを行かせなくするかと思えば、酔っぱらって悔い改めの祈りを大声でする。私は主人によってすっかり翻弄される毎日でした。集会のみなさまがわざわざ来てくださっても平気ですっぽかしたり、わざと酔って帰ったりで、私は主人を敬うどころか軽蔑するようにさえなっていました。愛そう、仕えようとすればするほど、心の奥深

くで憎み、見下している部分があるのです。

妻たちよ。自分の夫に服従しなさい。たとい、みことばに従わない夫であっても、妻の無言のふるまいによって、神のものとされるようになるためです。（Ⅰペテロ　3・1）

時々は自分の罪を認めて、心から悔い改めるのですが、主人を赦しきれず、たいていは「敬えるようになるには、あそこがこうでなくては」と主の御前で条件をつけてつぶやいていました。そうこうしているうちに、娘のあかりも知恵がついてきて、なかなか言うことを聞かなくなりました。悪い所だけが目について、娘を憎らしいとさえ思い、これでは悪循環だと思いつつも、必要以上に叱ることが多くありました。

子どもをおこらせてはいけません。彼らを気落ちさせないためです。（コロサイ　3・21）

これも私をみことばの前に苦しくさせました。

また、集会生活においても、姉妹方への祝福をねたんだり、姉妹方をそのまま受け入れられず、愛せなくなっている自分を見出すのです。

神を愛すると言いながら兄弟を憎んでいるなら、その人は偽り者です。目に見える兄弟を愛していない者に、目に見えない神を愛することはできません。神を愛する者は、兄弟をも愛すべきです。私たちはこの命令をキリストから受けています。

（Ⅰヨハネ　4・20、21）

「自分と同じように隣人を愛しなさい」ともいわれていますが、私は隣人どころか、そんな自分をも愛せなくなっていました。

その頃の私たち夫婦は、主人が玄関のドアを開けて帰って来ると同時に空気がピーンとはりつめ、互いに白い眼で一べつするだけ。あとは生活に必要なことを黙々とし、主人はテレビをながめ、私は信仰書を読むといった具合いでした。何とも白々とした、溜息と無表情の生活がつづきました。私は、集会生活や奉仕には熱心でした。家庭集会や祈り会、子供の土曜学校、あるいは機会を見つけてはご近所の方と一緒にビデオを見たりして、福音を伝えていました。私自身の内には、絶えざる平安や喜びがないのに、その源であるイエスさまをすすめている。一日の生活の内で「賛美とのろいが同じ口から出て来るのです」(ヤコブ　3・10)という主が大変嫌われる状態になっていました。

「どうせ私は、自分さえも愛せない。私が無条件に愛せるのはイエスさまだけだわ。ただイエスさまだけを愛して生きたい」そう言い聞かせていたのです。しかしみことばは、毎日鋭く迫ってきました。

十字架のもとにある安息

「これは、わたしの愛する子、わたしの選んだ者である。彼の言うことを聞きなさい」

(ルカ　9・35)

「だれでもわたしを愛する人は、わたしのことばを守ります」（ヨハネ 14・23）

「きょう、もし御声を聞くならば、御怒りを引き起こしたときのように、心をかたくなにしてはならない」（ヘブル 3・15）

何度も何度も心を砕いて、条件をつけずに従うようにと、主が導いておられるのを知りました。またさらに、

神の安息にはいった者ならば、神がご自分のわざを終えて休まれたように、自分のわざを終えて休んだはずです。（ヘブル 4・10）

とあります。神の安息、なんとすばらしいものでしょう。絶えざる平安を得て休みたい。痛切にそう思いました。ちょうどその時、電話のベルが鳴ったのです。集会の方からでした。私は、一気に今の心の状態を告白し、まるでだだっ子のように、

「私は従いたくないのよ。なのに神さまは従いなさいとしかおっしゃらないの。私はもうだめ、とっても苦しいの」

その方はただ黙って聞いて、

「祈っているわ」

とだけ言ってくださいました。私は受話器を置くとすぐにへなへなと座り込み祈り始めました。

「神さま私は悪い子です。お手数ばかりかけてごめんなさい。あなたの命令に従えず、逆らってばかりの私のことなどもうかまわないでください。私などは生きていてもあなたのお名前を汚すだけです。自分で自分が大嫌いなんです。どうぞみこころなら殺してください。自分で死ぬように努力してみましたが、やはり私は生きているんです」

すると静かに、けれど力強く答がありました。

「おまえは死んだ」思わず私は、ガラテヤ二章二十節を思い出し、すぐにまた祈りました。

「主よ。そうでした。私は二千年前に死んでいたのですね」

「そうだ。御子と一緒に」

「じゃあ私はいくらがんばってもできないんですね」

「そう。わたし自身がすべて代わってあげよう」

「ほんとうですね、感謝です。お任せしますからどうぞ私を支配してください。これから、私が地上を歩む間のすべてを明け渡します。今までの私はもうここにおりません。イエスさま、私を一緒に十字架につけてくださってありがとうございます」

祈り終わった私は、大急ぎでみことばを開いて読みました。

私はキリストとともに十字架につけられました。もはや私が生きているのではなく、キリストが私のうちに生きておられるのです。いま私が、この世に生きているのは、私を愛し私のためにご自身をお捨てになった神の御子を信じる信仰によっているのです。

（ガラテヤ　2・20）

あなたがたは、バプテスマによってキリストとともに葬られ、また、キリストを死者の中からよみがえらせた神の力を信じる信仰によって、キリストとともによみがえらされたのです。

（コロサイ　2・12）

あなたがたはすでに死んでおり、あなたがたのいのちは、キリストとともに、神のうちに隠されてあるからです。

（コロサイ　3・3）

それからそばにいた子供たちを抱きしめて、キッスをしたり、なりふりかまわず、嬉しくて飛んだりはねたり、「ヤッホーホー、ヤッホー」と走り回って大騒ぎ。子供たちも「お母さんどうしたの？ねえなにがうれしいの？」と目をキラキラさせて、キャッキャ飛びはねていました。そして、その方にお電話して、今私の内側に起こったことを報告しました。ほんとうに一緒になって喜んでくださいました。私を愛し、祈りつづけてくださっている集会の方々も、みなさん喜んでくださいました。

与えられた安息

その夜、いつものように主人が帰宅しました。相変わらずの死んだ顔です。でも私はにこにこ迎えました。そしてブスッとしている主人の前に、手をついて心から謝りました。

「おとうさん、ひどい悪妻だったことごめんなさい。傲慢で、ちっともかわいくない、いつも

自分のことしか考えていなくて、我がままで、やさしくなかった今日までの私を赦してください。私が男なら、とっくに追い出していたと思うわ。私のような者をがまんしつづけてくれてほんとうにありがとう。でも今日からは私じゃなくて、私の内に住んでおられるイエスさまが愛し、仕えさせてくださるからだいじょうぶだと思うわ。改めて、これから永遠までよろしくお願いいたします」

顔を上げると、主人の目も輝き出していました。そして私は今日までのことと、今日起こったことを話しました。すると主人も共に、ガラテヤ二章二十節のみことばによって、歓喜の声をあげて言いました。

「主がしてくださるんだね。そうか、今日まで自分の力でやってばかりいて、主に頼らなかったもんなあ」

「そうなのよ。ほんとうに長い七年間、あらゆることしてがんばってきちゃったね」

互いに、約半年ぶりに心から笑い合いました。昭和五十八年二月四日のことです。

それから主人も、離婚を考えていたことなど話してくれました。私たちは神から離れ、神に頼らず自分たちの力だけで生きてきた罪を悔い改め、また新しくされた恵みを感謝しました。

神に生かされる人生

その日を境に私たち夫婦はほんとうに変えられました。毎晩のように午前さまだった主人が、八時か九時頃には帰宅して、子供たちと楽しく食事をしたり、ギターを弾いて賛美したりするよ

うになりました。また子供たちが寝てから、今日一日主のしてくださったことについて語り合い、時にはみことばを読んで祈ったりし、私たち夫婦は、今にして神さまの定められた結婚のすばらしさを、味わうことが許されました。でも戦いはいつもあります。サタンが神さまにすがる道をふさいで、私たちの家を壊そうとするからです。けれどもそれも、私たちにもっと大きな祝福を与えようと、主が御旨をなしておられることと信じています。

再び夫婦そろっての礼拝出席となりました。吉祥寺集会へは、道路状況が悪いと三時間もかかってしまうので、疲れる主人のために神さまはぴったりの場所をすでに備えておられました。ちょうど柏から北へ約一時間ほど走った所で、一昨年の四月から筑波大学へ転勤なさった大庭さんが、土浦の古田土さんや、牛久の三沢さんとパン裂きを始められていたのです。ほんとうに感謝でした。毎週家族そろって礼拝に参加し、主人の祈りでパンに預かれるなど、私が求めたよりもはるか何十倍もすばらしいことを主はしてくださいました。

主は私にこう言われます。

主があなたがたを恋い慕って、あなたがたを選ばれたのは、あなたがたがどの民よりも数が多かったからではない。事実、あなたがたは、すべての国々の民のうちで最も数が少なかった。しかし、主があなたがたを愛されたから、また、あなたがたの先祖たちに誓われた誓いを守られたから、主は、力強い御手をもってあなたがたを連れ出し、奴隷の家から、エジプトの王パロの手からあなたを贖い出された。

（申命記　7・7、8）

主ご自身の真実と愛ゆえにクリスチャンとして最も小さくだめな私たち夫婦を、その苦しみから救い出してくださったのでした。神さまの熱い愛が、その御手を動かせたのであり、私たちの側には何ひとつ主の御目にかなうものはありませんでした。またさらに、私がどんな者であったかをこう言い聞かせてくださいました。

あなたが彼らの地を所有することのできるのは、あなたが正しいからではなく、またあなたの心がまっすぐだからでもない。（申命記　9・5）

それどころか、

あなたはうなじのこわい民であるからだ。（申命記　9・6）

あなたは荒野で、どんなにあなたの神、主を怒らせたかを覚えていなさい。忘れてはならない。エジプトの地を出た日から（イエスさまを信じた日から）、この所に来るまで、あなたがたは主に逆らいどおしであった。（申命記　9・7）

天のお父さまは言われます。わたしが三枝子を造った親だから、三枝子を赦し、恵み、愛さずにはおられないのだと。また主がどうして私の今までの七年間を赦しておられたかも、申命記八章二節から五節を通して教えてくださいました。神さまがこの七年間、私に荒野を歩ませられたのは、私を試み、その命令を守るかどうか、私の心の内にあるものを知るためであって、それは

ただ主の恵みの口から出るものによって生きるということを、分からせるためであったのです。人がその子を訓練するように、神さまが訓練なさることも教えてくださいました。

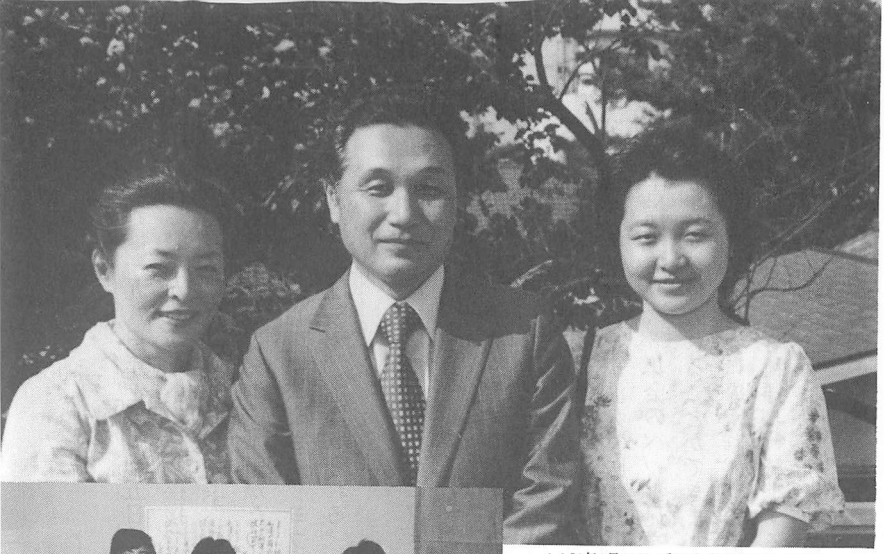
主は、私が自分を明け渡すかいなかに関係なく、すでに永遠から永遠まで支配し、愛しつづけてくださっていました。その事実の上に立って、主のご支配の中に身を委ねることはほんとうに幸いです。

乳離れした子が母親の前にいるように、私のたましいは乳離れした子のように御前におります。

（詩篇　131・2）

約束のカナンの地にたどり着くまで、まだまだ訓練はつづきます。そしてさらに祝福も追って来ます。

今ある問題や悩みも、主の愛を表わしてくださる手段として、神さまの御手の内にあることを覚えまして、ほんとうに感謝でございます。主に愛されている皆さまが、みことばの事実の上に立って、私たちと共に主を喜ぶことができますよう、心からお祈りしつつ証しとさせていただきます。



▲'82年7月11日、重田夫妻バプテスマの日。
すでに受洗したまりさんと共に。



▲東海大学医学部、聖書研究会の方々と。
前列中央が重田氏。

主の御名は ほむべきかな

重田　定義

東京杉並区に生まる。千代田区平番町小、都立四中、慶応義塾大学医学専門部卒。同医学部小児科から、同医学部衛生学公衆衛生学教室を経て、東海大学医学部設立にともない、衛生学教授に就任。その間、米国 UCLA の School of Public Health において産業医学を研修。医学博士。57才。日本衛生学会幹事、日本産業衛生学会評議員、日本医学会評議員。また、東海大学医学部「医の倫理委員会」委員長、同医学部「聖書を読む会」顧問教員。家族は妻都代子さん。

これは一九八三年十二月十五日、吉祥寺キリスト集会でおこなわれた、娘まりの葬儀にご出席いただいたかたがたへの私の挨拶です。

「今夕は突然にもかかわらず、このようにたくさんのかたがたがおいでくださいましたことを深く感謝いたします。兄弟がたのお祈りや、メッセージのなかにありましたけれども、私どものただ今の心境は、まさに、ヨブ記の、

主は与え、主は取られる。主の御名はほむべきかな。　（ヨブ　1・21）

でありまして、娘まりが天に召されたことを知ったときに、主をたたえて、まずその聖句が頭に浮かびました。

神さまがまりを与えてくださったのは、一九六三年一月十二日、また、天に召されたのは、一九八三年十二月十三日午後五時二十二分でした。ちょうど二十年十一ヵ月の間、私どもの手元に神さまからお預りしていたことになります。

二年半前に、筑波大学医学専門学群に入学してから、まりは精神的に苦しみ、その年の秋に、吉祥寺キリスト集会のベック兄を通して神さまが導いてくださり、イエス・キリストを救い主として受け入れることができました。ほんとうに感謝でした。私と家内も、まりを通して吉祥寺キリスト集会に導かれ、真の信仰を持つことができました。そして、その後は、親子三人で神さまを心から礼拝し、賛美する、まことに充実した信仰生活を過ごしてまいりました。

一年前から、また、まりが大変苦しみを味わうことになりました。集会の兄弟姉妹を始め、主

治医としてお願いした、クリスチャン・ドクターの稲村博先生など、皆さまがまりを愛してくださり、その苦しみが取り去られ、癒されるように祈り、また治療の手をさしのべてくださいました。まりもこの苦しみの中で祈り、聖書を読み、なんとかまた元気な自分に戻ろうと、必死に戦い、私どもも、毎日そばでまりと共に苦しみつつ今日までまいりました。

たまたま、治療の一つの方法として、環境を変えるために、親から離れてしばらく暮らすようにとのことで、十一月下旬から、高松キリスト集会にご厄介になっておりました。高松集会のブレニマン夫妻をはじめ、兄弟姉妹がたは、まりを大変暖く迎え入れてくださり、なにくれとなくご配慮くださり、ほんとうに感謝しておりました。

ところが、思いもかけなかった突然の召天の知らせがありました。私どもは、その知らせを受けたときに大変な衝撃を受けました。しかし、次の瞬間に、ああ、まりはもう苦しむことはない、神さまが私どもよりもまりの心の苦しみをご存知で、まりの大変わがままな願いをあわれんでお許しになり、御許に呼び寄せてくださったのだと確信することができました。私どもは悲しみよりも、まりがすべての苦しみ、悲しみから解放されて、イエスさまのふところで、目の涙も拭われて憩っていることを思って感謝しました。高松で、柩に収められた、まりの安らかに眠っているような顔を見たときに、再びその確信は強められました。

私たち人間は、神さまのご計画のごく僅かしか知ることができません。けれども、神さまは私たちのすべてをご存知であり、私たちのすべてのことを最善に配慮してくださり、愛していてくださる。ですから、神さまのご計画のなかに組み入れられた私たちは、一つ一つの目の前

の、肉の目から見て、いろいろな不都合、不合理なことがたとえあっても、それは人間の浅はかな思いではとうてい計り知れない神さまの御心、神さまの恵みでありますから、すべてを感謝して受け入れて、心から喜ぶことができます。

繰り返すようになりますが、まりがこの世に生きていたときは、まりの苦しみを見ておりますと、まりのために祈っていましても私自身、心が重く、苦しくて辛かったのですけれども、今、まりがもう苦しみから解放されているので、私の心も苦しみから解放されているのだと、はっきり自覚することができるのです。

私どもは、これからは大変希望があります。といいますのは、私どもは必ずまりに再会できるという希望で、しかも、その日が、私どもが一日一日年を取るにしたがって、一日一日と確実に近づくということです。私どもは、その日を楽しみにしております。もう、私どもは思い煩うことは何もありません。私と家内と二人だけですから、残る私どもの生は神さまのために、イエスさまのために、御心にかなうような日々を、イエスさまの証し人として過ごしてゆきたいと思います。まりも、私どもにそのことを望んでいるはずです。

最後に、ここに、まりが今年の元旦に、吉祥寺集会の祈り会で与えられた聖書の一節がございます。まりは大変その聖句が好きで、聖書のその箇所を、赤鉛筆で塗りつぶしてあります。読ませていただきます。

私はこう確信しています。死も、いのちも、御使いも、権威ある者も、今あるものも、後に来るものも、力ある者も、高さも、深さも、そのほかのどんな被造物も、私たちの主キ

リスト・イエスにある神の愛から、私たちを引き離すことはできません。

（ローマ　8・38、39）

この聖句をまりは信じて確信をもってイエスさまのもとに召され、今は安らかに憩っていることを、私どもは感謝しつつ私どもも確信をもってご報告することができると思います。

本日は突然に、しかも夜分、遠いところまでおいでくださいまして感謝でございます。どうか、まだイエスさまをご存知ないかたが、このなかにおられましたら、本日のメッセージを通し、また、大変僭越ではございますが、まりの小さな信仰を通して、よりよくイエスさまをお知りいただくよう、切にお祈りいたします。本日はどうもありがとうございました」。

まだ、イエス・キリストをご存知ないかたのなかには、あるいはこれをお読みになって、私どもが死を賛美しているように思われるかも知れません。しかし、決してそうではありません。死は私たち人間にとって最強の敵です。人間のどんな知恵や力をもってしても、決して死に打ち勝つことはできません。医学の進歩は、この世のいのちを延ばすことに貢献はしましたが、死を征服することはできないのです。

ひとりの人によって罪が世界にはいり、罪によって死がはいり、こうして死が全人類に広がった。

（ローマ　5・12）

とあるように、人類最初の人アダムが神さまに背いて以来、人間に死は避けることのできない恐ろしい敵となったのです。しかし、私たちの罪を負って十字架にかかって死んでくださったイエスさまは、三日後によみがえり、人間として初めて死に打ち勝たれました。そこで、

キリストは死を滅ぼし、福音によって、いのちと不滅を明らかにされました。

（Ⅱテモテ　1・10）

とあるように、イエス・キリストを信じるもののみに、神さまは、イエス・キリストによって、死からの勝利を与えてくださるのです。

一人子のまりを、かぎりないあわれみをもって主が取られたことを通して、私どもはまた、神さまはいかに大きな貴い代価を支払われたかを、身をもって知りました。神ご自身が、

これはわたしの愛する子、わたしの心にかなう者である。

（マタイ　3・17）

とおっしゃっている、そのただ一人の、愛する独り子イエス・キリストを、十字架におかけになるためにこの世におつかわしになり、本来滅ぶべき私たちを、そのような大きな犠牲を払ってまでも背きの罪を赦し、救ってくださろうとする、計り知れない大きな愛を、そしてその背後にある深い悲しみを、私どもはようやく痛い程の実感としてとらえることができました。このような神さまが、どうして私どもに対して益ならざることをされるでありましょうか。

私たちすべてのために、ご自分の御子をさえ惜しまずに死に渡された方が、どうして、

御子といっしょにすべてのものを、私たちに恵んでくださらないことがありましょう。
（ローマ 8・32）

神を愛する人々、すなわち、神のご計画に従って召された人々のためには、神がすべてのことを働かせて益としてくださることを、私たちは知っています。（ローマ 8・28）

まりの葬儀の時の、私の挨拶と態度は、参列されたまだイエスさまをご存知ないかたがたには奇異に映ったようです。一人娘をなくしたのに、どうしてもっと悲しまないのか、不自然だ、冷たい等々の声が耳に入ってきました。しかし、子供の死を悲しまない親がいるでしょうか。私のまりにたいする可愛がりようは、親類や知人の間でも評判であったようです。私にとって、この世で一番の宝はまりでした。まりが多くの人から愛され、クリスチャン・ドクターになりたいという希望をもって医学部に入り、また心の苦しみを通して信仰を与えられたときに、これこそ神さまのお恵みであって、きっと神さまはまりをクリスチャン・ドクターとして用いてくださるご計画であろうと思いました。自分の苦しみの体験を通して、病める者の心や立場を思いやることのできる優しい医者になるであろうと大いに楽しみでした。まりがこの世を去った今、几帳面な字で、きれいに書かれた、まりの講義ノートを見るときなど、胸が締めつけられるような思いがこみ上げて、目がしらが熱くなることがあります。しかし、このような思いは、太陽を横切る雲のように一瞬であって、すぐに平安な心に戻っている自分を見出します。もし、自分の意志で自

分の気持を制御しているのであれば、そのような状態は長続きするはずがありません。すぐにメッキがはがれて、悲嘆のどん底に沈んでしまうでしょう。まして、人一倍涙もろい私が、涙も流さずに葬儀の挨拶をすることが、自分の意志でできるでしょうか。

最愛の娘が突然世を去ったのにもかかわらず、私どもの心に大きな悲しみをも超えた、このような平安が与えられていたことを思いますときに、私ども親子三人の小さな人生の歩みを通しても、神さまの大きなあわれみと深いご計画を知ることができます。

もし、まりが、宣べ伝えられたイエス・キリストの救いを受け入れずに逝ったならば、私どもはまりに再会できぬばかりか、まりが陰府でこれから永遠に苦しまなければならないことを思って、悲しみに耐えられなかったでしょう。また、まりが救われていても、私ども夫婦がまだ主イエスを信じていなかったならば、苦しみと悲しみのどん底にあって、お互いに相手を責め、また自分を責めて地獄のような日々を過ごすことになったでありましょう。しかし、神さまは深いあわれみによって、まず、まりをイエス・キリストの十字架の死を通して救ってくださり、引続いて私どもも救いに導き入れてくださったのです。まりが救われたいきさつは一九八二年冬の吉祥寺集会青年会の刊行物 The Way に次のように掲載されました。

無意味な大学生活からの救い

「私は昨年の大学入試の前に、スイス人のクリスチャン・ドクター、ポール・トゥルニエの書いた証しの本を読んで、自分もぜひともこのようなクリスチャン・ドクターになりたいと思い

ました。病を、心と体と霊の三つの面から治療してゆく「人格医学」という新しい考え方にとても共感したのです。入学したら信仰を持ち、大学ではクリスチャンの先生に信仰面でも指導していただき、また、同志を集めて勉強会を開こうと希望に燃えていました。

ところがいざ入学してみると、私と同じような志を持っている人はおらず、そのうえ、あてにしていたクリスチャンの先生はご自分の研究に熱心で、信仰の話はなさりたがりませんでした。私ははりつめていた気持のやり場を失って、ほんとうにがっかりしました。そんな気持を満たそうと、コンパによく出かけるようになりました。飲めないお酒を無理に飲んだり、くだらない話をして夜を明かしたこともあります。けれども、かえって心は貧しくなり、寮の独りの部屋に帰ると、言いようもない空しさと後悔だけが残りました。

何とか信仰を回復したいと、夏休みにはフィリッピンへ医療伝道に出かけましたが、働いているときは充実しているようでも、終ってしまえば、自分には何の変化もありません。どんどん求める思いは薄れてゆき、二学期の始まる頃には、全てに対して無気力になっていました。独りで部屋にこもっていると、何とも言いようのない孤独感でしめつけられ、そのうえ、また以前のような無意味で空しい生活しか待っていないのかと思うと、耐えられなくなりました。衝動的に部屋にあった薬を全部飲んでしまったのです。けれども私の予想に反して薬はあまり効かなかったので、私はますます自分が憎らしくなり、自分をめちゃめちゃにしたくていったん家に帰った時、かなりの量のブランデーを飲みほしました。酔ってフラフラになった後猛烈に苦しくなり、半日吐き続けました。この苦しさの中で、私ははじめて死がほんとうに恐ろし

く思われたのです。私は、死ぬことさえできないどうしようもなく弱い惨めな自分に打ちのめされてしまいました。この絶望のただ中にあった私に、神さまは救いの手をさしのべてくださったのです。全てをあきらめて悶々とした日を送っていたある日、イエスさまと出会いました。こんなに弱く惨めな私をも、イエスさまは必要としてくださり、愛してくださっていること、あまりにも愛してくださっている故に、十字架にかかって私の醜い罪の身代りとなって死んでくださったことを知りました。救われて、すでに永遠のいのちを持ち、はっきりと生きる目的を見つけたのです。自分も他人も見ないで、ただ主に従って歩むことが目的となりました。

大学を続けることはもう不可能だろう、もしできたとしても留年はほぼ間違いないものと思っていました。ところが、二ヵ月の欠席という大きな障害を主は乗り越えさせてくださったのです。学校の先生からも、「こんなケースはめずらしい。信じられない」と言われました。主は奇蹟をおこされたのです。

それからも、私の信仰の歩みは決して平坦ではありません。しかし主は、試練を与えてくださる度に、ご自身との個人的な交わりを深めてくださいます。私はいつまでたっても弱く罪深い惨めな者ですが、主と交わり、主が私に代って生きてくださるときに、主は勝利者となられ、それは同時に私の勝利でもあり、私は真実の喜びと平安をもって生きることができます」。

このようにイエスさまの十字架の救いを感謝して受け入れ、イエスさまに従って生きてゆきたいと願っていたまりが、再び大きな心の苦しみと戦うようになり、ついにはこの世から去らねばならなかったことの真の理由は、私たちには分らず神さまだけがご存知です。

けれども今、私ども夫婦が神さまのみ前に深く悔いておりますのは、最愛の娘のもっとも近くにいて、共に苦しんでいるつもりでいながら、娘がどんなに傷つき苦しんでいたかを、私たちが本当には理解していなかったということです。私たちはまったく自己中心的な愛でしか娘を愛することができない親であったのです。

それにもかかわらず、愛なる神さまが、

彼（主イエス）はいたんだ葦を折ることもなく、くすぶる燈心を消すこともなく、まことをもって公義をもたらす。

（イザヤ　42・3）

と約束してくださったように、純粋に生きようとして、いたんだ葦となり主のみ許にいったまりを、イエスさまはどんなにかあわれんで、そのいたみを癒して安らかに憩わせてくださっていることかと思うときに、愚かで愛のたりない親であった私どもは心からの悔い改めと感謝をもってイエスさまのみ前にひれ伏すのみです。

まりの思い出を一つだけ書かせていただきますと、一年前、休養のため自宅に帰っていたまりは、少し元気をとり戻したある日、クラスの友人のために、たくさんクッキーを作って、大切そうに小さな箱に分け入れて学校へ持ってゆきました。帰ってきて、友人の方々がよろこんでくださったと嬉しそうでした。今思うと、あれがまりのクラスの友人の方々へのこの世でのお別れのプレゼントとなったのでした。しかし、まりが一番皆さんにプレゼントしたかったのは、イエスさまの福音であったことも私たちは知っております。

かえりみますと、神さまは今日の日に備えて、このような私をも尽きざる愛をもってあわれみのうちに導き、私の信仰をきたえてくださったのです。

私は医学生のときに、イエスさまを信じて洗礼を受けましたが、その後三十年近く教会にも行かず、聖書も読まず、臨床医学の研修、衛生学の研究など、この世の興味に心を奪われ、そのなかに埋没していました。ただ、心のなかでは、不思議にそれでも自分はクリスチャンだと思いこんでいました。しかし、それは、子供の頃から教会に行っていたということから生じた、習慣的クリスチャン、なんとなくクリスチャン、アクセサリー的クリスチャンの範囲に止まっており、十字架による罪の贖いの意味も十分にはわからず、救いの確信など全くありませんでした。ですから、そのような不信仰な私は、神さまから見棄てられても少しも文句はいえないはずでした。しかし、神さまは、そのような私にたいして、私の人生のなかで、いろいろな機会に、いろいろな出来ごとを通して臨んでくださり、私をご自分のもとに引き寄せてくださったのです。まさに、聖書のみことば通り、私が神さまを選んだのではなく、神さまが私を選んでくださったのです。

あなたがたがわたしを選んだのではありません。わたしがあなたがたを選び、あなたがたを任命したのです。（ヨハネ 15・16）

神さまの導きの御手が、私のうえにはっきりとあらわれたのは、十年前に東海大学に医学部が設立され、そこで教育と研究にたずさわるようになって間もなくでした。ある日、三人のクリスチャンの学生が私の部屋に来て、「聖書を読む会」をつくりたいから、顧問教員を引き受けてくれ

るようにと頼んできたのです。そのとき以来、私は学生達と一緒に、研究室で毎週、聖書を読み神さまの心を求め、祈るようになりました。

「聖書を読む会」ができてしばらくたったある日、学生の一人が米国人の宣教師を連れて来ました。彼とは三、四回の交わりしかできませんでしたが、別れる日に、彼は私の信仰について、黒板にチョークで絵を画いて評価してくれました。彼はまず地面の上に葉のよく繁った大きな樹を画きました。そして、

「あなたの信仰は、この樹のようです」

といったのです。私は口では謙そんをよそおいつつも、心のなかでは満更でもありませんでした。ところが、それで絵は完成したのではありませんでした。彼は次に地面の下にその樹の根を、ちょうどごぼうのひげのような細い線で画きました。そして彼はこうつけ加えました。

「あなたの信仰はこの樹のようなものです。ちょっと見ると枝は広がり、葉が繁って立派な樹に見えますが、少し風が吹くと、根が張っていないからすぐに倒れてしまいます。あなたの信仰もこれと同じで、根がないから、試練に会えばすぐにくずれてしまうでしょう」

聞いたときには何と失礼なことをずけずけという宣教師だろうと、内心大いに腹をたてましたが、あとですぐに、これは私が生きたぶどうの幹であるイエスさまから離れた枝であることを、神さまが彼を通して示されたことがわかりました。このことが、やがては、吉祥寺キリスト集会に導かれるきっかけになったのです。

わたしはぶどうの木で、あなたがたは枝です。人がわたしにとどまり、わたしもその人

の中にとどまっているなら、そういう人は多くの実を結びます。わたしを離れては、あなたがたは何もすることができないからです。（ヨハネ　15・5）

教会はキリストのからだであり、いっさいのものをいっさいのものによって満たす方の満ちておられるところです。（エペソ　1・23）

また、家内の心身症が医療によっても長い間癒されず、続いてまりの最初の精神的な苦悩も、また医学が及ばないことを知ったとき、私自身、医学研究者のはしくれであり、その私が信頼している医学に限界があること、真の癒しは霊の癒しにこそあることを、神さまは家族の救いを通して教えてくださいました。家内や娘が苦しむことは、私自身が試練に会って苦しむよりも、私にとって大きな苦痛でした。それによって、私の心は砕かれ、すべてを神さまにゆだね、神さまに依り頼む信仰が与えられ、今度のような、より大きな試練にも、耐え得る力を備えてくださったのでした。

「わが子よ。主の懲らしめを軽んじてはならない。主に責められて弱り果ててはならない。主はその愛する者を懲らしめ、受け入れるすべての子に、むちを加えられるからである」。訓練と思って耐え忍びなさい。神はあなたがたを子として扱っておられるのです。父が懲らしめることをしない子がいるでしょうか。（ヘブル　12・5〜7）

すべての懲らしめは、そのときは喜ばしいものではなく、かえって悲しく思われるものですが、後になると、これによって訓練された人々に平安な義の実を結ばせます。

（ヘブル　12・11）

まりがこの世を去ったことを知って、多くのかたがたがお手紙をくださいました。そのうち次のかたがたのお手紙の抜粋を掲載させていただきます。掲載を快く承諾してくださいました筑波大学医学専門学群長阿南功一教授、同医学専門学群稲村博助教授、東海大学医学部太田保世教授筑波大学医学専門学群六年生立沢貴美子さんに心から感謝いたします。

「この度まりさんの突然の訃報に接し吃驚いたしました。今年四月二年生の最初の授業が私の担当でして、第一回の講義終了後か休み時間に入る時に、教室を去ろうとしている私のところへまりさんがやって来て、もう大分よくなりましたとにっこりされた顔を今さらのやうに想ひ起して居ります。

大学にお届け下さった葬儀のテープをお借りして自宅で只今聞かせていただいたところでございます。まりさんがどんなにか苦しんで居られたか、昇天式の時の御父上のお言葉から今さらの如く私の迂闊さを思い知らされました。私も昔からの信者でありながら一頭の迷える羊のことを他人まかせにしてゐた事を申し訳けなく、一体自分の信仰はこんな程度だったのかと恥ぢ入るのみであります。

私も召される日が若い時とは違ってさう遠くはないと感じてゐます。そのため、何んとか主に委せ、その日まで、世のため人のため、主のあかしのため私がなすべきことを、お示し下さい、お導き下さいと、朝も夜も祈っていたにすぎなかったことを、只今発見いたしました。

私も学生全体の勉学などについての、マクロの面のマネージメントと、学生個人の悩み迷っている魂の問題（ミクロ）をどう対処したらよいか、一人だに助けて上げられないで、九十九人の医学技術のエリートのみ養成してゐるのではないかと、正直のところ悩んで居ります。

私にも二十二才と十九才の娘が居り、この度のことで、若し私だったらどうなってゐる事だろうとつくづく教へられました。長々と心に浮んだ事を書いてしまいましたが、主が御両親様に信仰の恩寵を豊かに注がれますよう、お祈り申し上げます」

（かなづかいは原文のまま）

阿南　功一

「御令嬢まり様の思いがけない御昇天にあい、万感胸に迫っております。神様に愛される人は早く御許に呼び寄せられるといわれますが、まさにそうとしか思われず、壮厳な魂のふるえを覚えます。この世に属する、また治療をする立場の者としては、遺憾や恐れなどさまざまな思いが当然ながらきざしますが、おそらく天の御計画ははかり知れないほど深く、また高いものでありましょう。それを思うと、いのちというものの厳粛さに改めて深く思いをいたされます。

言葉足らずで意を尽くせませんが、心せくまま取り急ぎ一筆いたしました。主にある平安を切に祈りあげつつ」

稲村　博

「先日お嬢様のことでお知らせを頂戴いたしました。O教授のご令息がおなくなりになった時、私も二児の父として、O教授の長期にわたっての、お嘆きと変りようは痛い程よく理解できました（そして恐らく実際の百分の一くらいまでも解ってはいないでしょう）。このたび、数日して先生に院内でお目にかかった時には、改めてどんな出来事も見事に昇華できる力を与えられた神の偉大さを感じました。

また、お嬢様の書きのこされた心と体と霊の「人格医学」という点が、何かとても厳しい言葉として迫って参ります。医者ならば誰しも心と体の医学は考えると存じますが、魂とか霊といったところには及ばないようです。昭和五十九年の元旦に、またとない感銘を、活字からもテープからも味わいました。

これからの日常に、そういうことにもう一段心を開いて仕事をしたいと念願しております。

なお、過日も少しお話し申したことがあると存じますが、呼吸器内科入院患者四十数名のおよそ七、八割が癌です。その患者さん達に、現状では避けられない死までの間、どのように充実した生活、心の幸せを維持してあげられるか、ということが私達の現在の課題のようです。若い研修医たちまでが、同じようなことを考えるまで、暫くは何もできないでしょうが、先生がお力を注いでおられる医の倫理委員会の別の一つの面としてご教導頂きたいと思います。

なくなられたお嬢様は、先生を介して、私どもに大変大きな感銘を残されました」

太田　保世

「先日、私共、医学の学生と教官とで構成されている聖書研究会で、まりちゃんのお父様のお話のテープを聞き、祈りの時を持ちました。十人程でしたが、本当に恵みの時となりました。

まりちゃんとは、水泳部で、はじめてお会いしました。元気よくプールで泳いでいた彼女の姿が、うかびます。その後、聖研でもいっしょに聖書を読むようになり、本当に純粋で、傷つきやすいという印象がありました。いつもニコニコしていて、何か、人の心を和ませてくれるまりちゃんでした。学年も離れており、お会いするのは週に一回ぐらいでしたが、最後にお会いした時には、顔にできたポツポツを指さして「こんなに薬疹ができちゃったんですよ」とニコニコしていたのが、私の胸にやきついています。

彼女が天に召されたことを知った時、私はまず一粒の麦のたとえを思いました。

一粒の麦が地に落ちて死ななければ、それはただ一粒のままである。しかし、もし死んだなら、豊かに実を結ぶようになる。（口語訳聖書）　（ヨハネ　12・24）

テープを聞きながら、みんな涙をポタポタ落していました。あの笑顔、ほんとうに無邪気なあの笑顔からは、想像もつかない程、苦しんでいたのですね。でもそれを感じさせず、私たちの心を和ませてくれたまりちゃん。確実に、まりちゃんは私たちの心に、何かを残していってくれたのです。今、まりちゃんは、あの笑顔のまま、そのままで、イエス様のもとで安らっている。そのことは、私にとって励ましになります。残された私たちは、この暗い世にあって、ともすれば道を見失いそうになりますが、まりちゃんが、イエス様のもとで待っていてくれる

ということは、大きな慰めです。目に見えるものだけの世界から、目に見えない世界へと、私たちのまなこを向けさせてくれたまりちゃん。私は、まりちゃんの召されたことを、深く深く心にとめ、聖書を中心にして歩んでゆこうと、しっかり心にきざみつけました。

まりちゃんを立派にお育てになった、お父様、お母様の上に、主の慰めが豊かにありますように」

立沢貴美子

このように、神さまのみ前に足りない親であった私どもにも神さまはすでにいろいろなかたに働かれていることを見せてくださり、このたびの試練の意味を、また少しずつ分らされて来ております。私どもは、これまでは、

「もしあなたが信じるなら、あなたは神の栄光を見る、とわたしは言ったではありませんか」

（ヨハネ 11・40）

というイエスさまのみことばは、まりが癒されて、クリスチャン・ドクターとなることによって成就されると思っておりましたが、まりの召天後におこっている数々の出来事を通して、神さまの御心はそうではなく、一粒の麦として、短い、この世での旅路を、純粋に生きようとした、まりの小さな魂を通して、すでにイエスさまがご自身のご栄光を現わされつつあることをも、私どもがこの目で見ることができるようにしてくださっているのです。

なお、このたびのことを通して示されたことの一つとして、つぎのことをつけ加えさせていただきたいと思います。

私は、いま東海大学医学部で、医の倫理委員会の世話役をおおせつかっています。多くの問題が、この委員会で取り上げられています。たとえば、この世のいのちが終ろうとしている病人に生命維持装置をつけるかどうかの問題、遺伝子組み換えの問題、臓器移殖の問題等々。これからますますそのような問題の前に、医師が立たされざるを得ない状況になっています。

もう一つ、古くて新しい、重要な問題があります。それは、医師の病人にたいする態度、姿勢、とくに人間の魂、霊にたいする姿勢です。

人間が、神さまにいのちの、霊の息を吹き入れられ、そこで始めて人間として生きるようにされたことを知るときに、私たち人間は、神さまに深い畏敬をおぼえます。

神である主は、土地のちりで人を形造り、その鼻にいのちの息を吹き込まれた。そこで、人は、生きものとなった。

（創世記　2・7）

ちりはもとあった地に帰り、霊はこれをくださった神に帰る。（伝道者の書　12・7）

このような存在の人間を、医師は自分の知識や技術だけで癒すことができるでしょうか。癒されるか否かは、全く神さまの御心次第なのであって、医師の働きは、神さまの許される範囲内でしか行われ得ません。ですから、どんなに名医が力を尽くしても、癒されない病人がいるし、逆

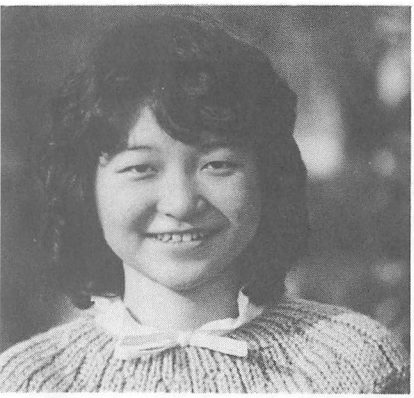
に、到底助からないと医師が見放すような病人でも、癒される場合があるのです。

科学技術の進歩が、医学、医療の領域にどんどん入り込んできている今日、医師はおごり高ぶって、神さまが造られた霊的存在である人間を、科学の力にのみ頼って処置するような過ちをおかさないように、心すべきであると思います。

「ここまでは来てもよい。しかし、これ以上はいけない。あなたの高ぶる波はここで止まれ」

（ヨブ　38・11）

というみことばは、今日の医師にたいする、神さまの警告であることを謙虚に心に留めて、私たち医学にたずさわる者は、神さまの前にへりくだって、教育に、研究に、診療にあたらねばならないのではないでしょうか。



▲まりさん。'83年1月に集会の屋上で。

主は私の羊飼い

野口とも子

宮城県仙台市に生まる。宮城県立第二高等女学校、仙台第二女子高等学校を経て専門学校卒業後、早稲田大学教授（当時講師）の広さんと結婚して上京。家族は夫君の母であるクリさん、夫広さん、長男透君、二男修君、長女香さん。なお、夫君の広さんの証しは「光よあれ」第1集に収められています。あわせてお読みください。



▲'82年7月11日、ご夫妻そろってバプテスマ（洗礼）の日。

▼ご家族全員がキリスト者となられて。'83年4月。



主は私の羊飼い。私は乏しいことがありません。
主は私を緑の牧場に伏させ、いこいの水のほとりに伴われます。
主は私のたましいを生き返らせ、御名のために、私を義の道に導かれます。
たとい、死の陰の谷を歩くことがあっても、私はわざわいを恐れません。
あなたが私とともにおられますから。
まことに、私のいのちの日の限り、いつくしみと恵みとが、私を追って来るでしょう。
私は、いつまでも、主の家に住まいましょう。
（詩篇 23・1～4、6）

主イエス様との出会い

昭和二十七年六月、私たち夫婦は、緑につつまれた小高い丘の上に建つ、仙台キリスト教育児院の礼拝堂で結婚式を挙げました。「汝、健やかなる時も、病める時も、これを愛し、敬うか」と、主なる神の前に、誓いあうことができたことを、私はクリスチャンになった今、心から感謝しております。その時司式をしてくれた叔父は、私たちのために生前ずっと祈っていてくれたことを私は後になって知りました。その同じ結婚式の席で、もう一人、ひそかにしかし熱心に私たち新郎新婦のために祈っていたクリスチャンがおりました。それは他ならぬ夫の母でした。

夫の母は（以下姑と書きます）四十代で配偶者を亡くし、第二次大戦後の物資不足の時代に、苦労しながら二人の男の子を育てておりましたが、その頃住居の近くのホーリネス教会へ導かれ真の神様を知って救われ、熱心なクリスチャンになりました。姑の洗礼式に与えられたみことば

は次の箇所で、それは彼女の心のひだに刻み込まれてきたことと思われます。

主イエスを信じなさい。そうすれば、あなたもあなたの家族も救われます。

（使徒　16・31）

このようなわけで、私たち夫婦も、結婚後しばらくは姑と同じ教会へいっしょに通いました。教会へ集うことは、私にとって何の抵抗もなく楽しいものでした。けれどもその頃は、まだ私たちの心の目は開かれておらず、真の信仰とはほど遠い状態でした。私は神様よりもむしろ目の前にいてくれる夫に頼り、そして夫と共にいるだけで幸せな日々でした。夫さえ立派に一人前の学者になり、地位も経済的にも安定してくれれば、もっともっと大きな幸せが私たちを待っていてくれるにちがいないと、若い私はひたすら期待していたのです。

けれども、現実は自分の思い通りにはゆきません。長男が生まれようとする頃、若い数学者である夫に、海外留学のチャンスが与えられました。当時は留学といっても一人分の滞在費しか支給されませんでしたから、夫が単身留学するたびに、私は赤ん坊をかかえて実家に世話になったり、小さな家を借りて住んだりしなければならず、落ち着かない生活が始まりました。二十才を過ぎたばかりで見知らぬ土地に赤ん坊をかかえてたった一人残された時、私は自分がいかに弱く頼りない存在であるか、また、最愛の夫といえども頼ることのできない存在であることをつくづくと痛感させられました。そして本当に頼れるのは人間ではなく、神様しかおられない、そうだ今度こそ真(まこと)の神様を信じてクリスチャンになりたいとの思いが強く与えられ、近くの小さな教会

の門をくぐりました。

主なる神さまは、ご自分を求める者には必ずご自身を現わしてくださいます。夫が帰国して、住居も武蔵野市に移したある夜、主は私の前にお立ちになり、私をはげしい悔い改めに導かれたのです。せまい家なので、仕事に没頭しようとする主人は、寝ないではしゃいでいる子供を激しく叱りつけました。大声で泣き出す子供……幼い子はただ両親だけを頼りに生きているのに、私たちは何という愛のない自己中心的な親なのだろう。こんな小さな子供の心を傷つけて泣かせたまま寝かせてしまうなんて、何と罪深い親なのだろう、と涙と共に心から悔い改めさせられました。

そしてその時に、イエス様の十字架の死は、このような愚かな私たちの罪のためであったことをはっきりと信じることができました。

キリストは罪を犯したことがなく、その口に何の偽りも見いだされませんでした。

そして自分から十字架の上で、私たちの罪をその身に負われました。それは、私たちが罪を離れ、義のために生きるためです。キリストの打ち傷のゆえに、あなたがたは、いやされたのです。あなたがたは、羊のようにさまよっていましたが、今は、自分のたましいの牧者であり監督者である方のもとに帰ったのです。（Ⅰペテロ　2・22、24、25）

「イエス様、私は本当に罪深い者です。どうぞお許しください。私はさ迷う羊のように本当に愚かな者です。どうぞこんな私をもあわれんで、正しい道に導いてください…」と、涙ながらに祈ったのを覚えています。そして、自分のたましいの牧者であり、監督者でおられる方のもとに

今自分は帰ったのだと知った時、心の底に言い知れぬ喜びと希望が湧いてきました。

その時から今に至るまで二十数年間、いろいろなことがありましたが、主はいつも私と共にいてくださり、導き続けてくださいました。

主イエス様のもとに立ち帰った私は、熱心に聖書を読むようになり、また、祈りにおいてイエス様と交わる喜びを覚えました。

下の二人の子供たちは、母の胎内にいる間から祈られ、主の栄光を現わす者、キリストのかぐわしい香りを薫らせる者として成長させてくださいと祈りつつ育てました。その頃は子供たちも明るく育っており、家庭集会や子供会も、子供たちの交わりを通して与えられました。教会こそ違えよき信仰の友も与えられました。私にとっては人々のために祈り、奉仕することが何よりの生きがいとなり、子供たちも喜んで協力してくれました。

主人の仕事の関係で一年間アメリカに住んだことがありましたが、その時も、次のみことばに支えられ、そこで出会ったクリスチャンの方々と主にあるすばらしい交わりが与えられ、祝福に満ちた時をすごすことができました。

私が暁の翼をかって、海の果てに住んでも、
そこでも、あなたの御手が私を導き、あなたの右の手が私を捕えます。(詩篇 139・9、10)

このように祝福された私たちの背後には、多くの祈りがあったと思います。特に姑は私たち家族のために、いつも熱い祈りを捧げていてくれることを私は感謝しておりました。姑は私にとっ

て信仰の母であり、最も身近かな祈りの友でもありました。イエス様は次のようにおっしゃっておられます。

もし、あなたがたのうちふたりが、どんな事でも、地上で心を一つにして祈るなら、天におられるわたしの父は、それをかなえてくださいます。ふたりでも三人でも、わたしの名において集まる所には、わたしもその中にいるからです。（マタイ 18・19、20）

姑と私は、日々心を合わせて夫が救われるように祈っておりましたが、やがて何年も経った後で、主はこの祈りを聞きとどけてくださいました。しかし、そこに至るまでのしばらくの期間は主は私を霊的にさらに成長させ、また、私の家族を、より大きな祝福に導くために、荒野の道を歩ませて訓練なさいました。

荒野での訓練

子供たちもある程度成長し、住居も滝山に移った頃のある晴れた冬の日、家族と共に滑りに行った屋外スケート場で転倒した私は、首を捻挫してしまったのです。その時は大したけがだとは思わなかったのですが、ある人のすすめで三ヵ月半ほど入院し、きびしい治療を受けました。しかし退院した時には、入院する前よりずっと状態が悪くなっていたのです。家族にも、ずい分迷惑をかけて入院したのに、回復の見込みがないと分かった時は、こんな身体でどうやって生きていったらよいのか、私は途方にくれてしまいました。娘はまだ六才で、母親の手が必要な時でし

た。娘の小学校の入学式にも、また娘が鎖骨を折って入院した時にも、母親として付き添ってやることができず、それは悲しい思いをしました。私はただ、「主よ、私は何もしてあげられません。どうかあの子を守ってやってください」と祈るのみでした。文字を読むことを禁じられた私にとって、倒れる前に暗記していた聖句は大きな心の支えとなりました。

ちょうどその頃、テレビで毎週一回、ある宣教の集いの模様が放映され始めました。番組の主な内容は、私たちが天国に入れるように悔い改めて、イエス様の救いを受け入れなさい、というものでした。そしてその中で、病める人々のために毎回イザヤ53章のみことばが読まれ、熱心な祈りの時間がありました。

彼はさげすまれ、人々からのけ者にされ、悲しみの人で病を知っていた。人が顔をそむけるほどさげすまれ、私たちも彼を尊ばなかった。まことに、彼は私たちの病を負い、私たちの痛みをになった。だが、私たちは思った。彼は罰せられ、神に打たれ、苦しめられたのだと。しかし、彼は、私たちのそむきの罪のために刺し通され、私たちの咎のために砕かれた。彼への懲らしめが私たちに平安をもたらし、彼の打ち傷によって、私たちはいやされた。

（イザヤ　53・3～5）

そして真の完全な癒しは、私たちが主のご復活のみ姿に変えられる時に与えられるということも学びました。病に一人苦しんでいた私にとって、この番組は主が与えてくださった深い慰めの時であり、主のみ前に心を注ぎ出して祈る事のできた恵みの一時でした。

聖書の中のヨブ記からも、どれほど大きななぐさめを与えられたか分かりません。

主はヨブの祈りを受け入れられた。
主はヨブの前の半生よりあとの半生をもっと祝福された。（ヨブ記　42・9、12）

健康を損ねたことは、私にとって思いがけない大きな試練でしたが、その苦しみを通して私は実に得がたい多くの事を学びました。

主が私に求めておられたのは、私が主のために何かをすることではなく、主のすばらしさを私がより深く知ることだったのです。そして、この世の目先きの幸せに望みを置くのではなくて、十字架のかなたに光り輝く永遠のみ国に入れられる日を心から待ち望む者へと私を変えてくださったのです。主は鈍い私に、肉体のとげを与えられて、その測り知れない重い永遠の栄光を目標にして生きるようにと成長させてくださいました。

ですから、私たちは勇気を失いません。たとい私たちの外なる人は衰えても、内なる人は日々新たにされています。今の時の軽い患難は、私たちのうちに働いて、測り知れない重い永遠の栄光をもたらすからです。私たちは、見えるものにではなく、見えないものにこそ目を留めます。見えるものは一時的であり、見えないものはいつまでも続くからです。（Ⅱコリント　4・16～18）

病院では治る見込みのまったくなかった私でしたが、主が与えてくださった鍼の治療は私の身

体に合っていて、根気よく治療に通ううちに、少しずつ快方に向ってきました。

主のお約束の成就

一方、それまで、自分の力にのみ頼って生きてきた夫も、人間の力の限界というものを知らされ、自分の今までの生き方に疑問を持ちはじめるようになり、神様を求める思いが与えられました。

その頃、何人かの方がたの証しを通して吉祥寺集会の存在を知り、「実を結ぶ命」のスライドを見る機会がありました。二十才でがんにおかされ、癒されなくても最後まで主に栄光を帰して、実を結ぶ命を生き抜いたリンデさんの生き方は、長い間病に苦しみながら主を待ち望んでいた私には理想の姿でした。また、スライドの中で語られているベックさん（リンデのお父様）の一語一語が聖書にあくまでも忠実で、最後まで主のみこころに従い通すことのすばらしさを、深い感動をもって受けとめました。私は、このような純粋な信仰を育てている吉祥寺集会へ移りたいと願うようになり、主のお導きを祈りました。その結果、主はいろいろな出来事を通して私たちの家族を吉祥寺集会へと導いてくださいました。

五十七年七月十一日、夫と私は吉祥寺集会でバプテスマを受けました。洗礼式の日、夫のために、姑が神様と会衆の前で祈りを捧げました。姑にとって、その日はまことに感無量の日であったと思います。私のためには、集会の一人のかたが祈りを捧げてくださいましたが、その時読んでいただいたみことばによっても、イエス様のご愛を再確認させていただき感動いたしました。

私たちをキリストの愛から引き離すのはだれですか。患難ですか、苦しみですか、迫害ですか、飢えですか、裸ですか、危険ですか、剣ですか。しかし、私たちは、私たちを愛してくださった方によって、これらすべてのことの中にあっても、圧倒的な勝利者となるのです。

（ローマ 8・35、37）

受洗後、夫は熱心に聖書を読むようになり、朝夕メッセージのテープに耳を傾け、できる限り集会に出席しております。あれほど好きだったお酒も、一滴も飲まなくなりました。夫の回心については、彼自身が「光よあれ　証しシリーズ第Ⅰ集」の中でくわしく書いておりますが、その中から一部を引用いたします。

「私はこれまでイエス・キリストを離れていた罪を悔い改め、古い自我を十字架上で滅ぼしていただき、イエス・キリストを主として迎え入れ、生活の公理を『主イエス・キリストにより頼むこと』としました」

主なる神の前に夫婦が思いを一つにして歩むことができるとは、何と幸いなことでしょう。

私たちは三人の子供たちのために、心を合わせて祈りました。子供たちは幼い時から教会へも行っており、家でも聖書を読みいっしょに祈っておりましたが、まだ、確信が持てない様子でした。集会のみなさまも、この子供たちのために、熱心に祈りを合わせてくださいました。その結果、主はそれぞれにふさわしいみことばをもって、はげましを与えてくださいました。長男は、高校の頃から詩篇91を愛読しておりましたが、特に次の箇所が彼を確信に導きました。

彼がわたしを愛しているから、わたしは彼を助け出そう。
彼がわたしの名を知っているから、わたしは彼を高く上げよう。
彼が、わたしを呼び求めれば、わたしは彼に答えよう。
わたしは苦しみのときに彼とともにいて、彼を救い彼に誉れを与えよう。
（詩篇　91・14～15）

医学生の次男も、次のみことばによって、確信をもってクリスチャン・ドクターへの道を歩み出すことができました。

神は、どのような苦しみのときにも、私たちを慰めてくださいます。こうして、私たちも、自分自身が神から受ける慰めによって、どのような苦しみの中にいる人をも慰めることができるのです。
（Ⅱコリント　1・4）

そして長女も、次のみことばによって、主の愛が自分にも注がれていることを知り、どんな時にも主に従ってゆこうという思いが与えられました。

恐れるな。わたしがあなたを贖ったのだ。わたしはあなたの名を呼んだ。あなたはわたしのもの。あなたが水の中を過ぎるときも、わたしはあなたとともにおり、川を渡るときも、あなたは押し流されない。火の中を歩いても、あなたは焼かれず、炎はあなたに燃えつかない。わたしが、あなたの神、主、イスラエルの聖なる者、あなたの救い主であるか

らだ。わたしの目には、あなたは高価で尊い。わたしはあなたを愛している。

（イザヤ　43・1～4）

三人の子供たちは、私たち夫婦の洗礼式から二ヵ月後の九月十九日、そろってバプテスマを受けました。こうして一家六人のクリスチャン・ホームが誕生したのです。三十年前、姑の洗礼式に与えられたみことば、「主イエスを信じなさい。そうすればあなたも、あなたの家族も救われます」とのお約束は、こうしてついに成就いたしました。

永遠のふるさとをめざして

私には今、将来に対する大いなる希望があります。人々が最も恐れている肉体の死は、悲しみの時ではなく、むしろ喜びの時となるでしょう。この苦しい不自由な肉体を脱ぎすてて、悩み多いこの世を去って、主のみもとに行き、永遠に支配したまう王なる主とともに住まうことは、どんなにすばらしいことでしょう。私たちは、天にある永遠のふるさとをめざして、人生の旅路を歩んでおります。この旅路は決して平らな道ばかりではなく、やがてけわしい坂道にさしかかるかも知れません。死の陰の谷を歩むことでしょう。けれども、私たちの牧者なるイエス様がいつもともにいて導いてくださり、次のような沢山のすばらしいお約束に囲まれていますから、どんな時も本当に心強いのです。

あなたがたの会った試練はみな人の知らないようなものではありません。神は真実な方

ですから、あなたがたを耐えることのできないような試練に会わせるようなことはなさいません。むしろ、耐えることのできるように、試練とともに、脱出の道も備えてくださいます。

（Ⅰコリント　10・13）

私たちの国籍は天にあります。そこから主イエス・キリストが救い主としておいでになるのを、私たちは待ち望んでいます。キリストは、万物をご自身に従わせることのできる御力によって、私たちの卑しいからだを、ご自身の栄光のからだと同じ姿に変えてくださるのです。

（ピリピ　3・20～21）

「見よ。わたしはすぐに来る」

（黙示　22・7、12、20）

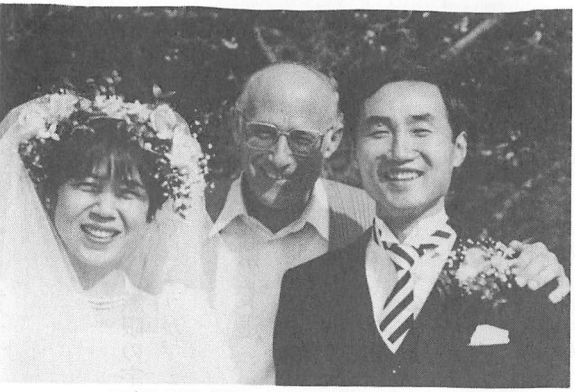
自分の着物を洗って、いのちの木の実を食べる権利を与えられ、門を通って都にはいれるようになる者は、幸いである。

（黙示　22・14）

どうぞこのつたない証しを読まれるすべての方が、イエス様の尊いみ救いを受け入れて、このすばらしい永遠の都に共に入ることができますように、心からお祈りいたします。

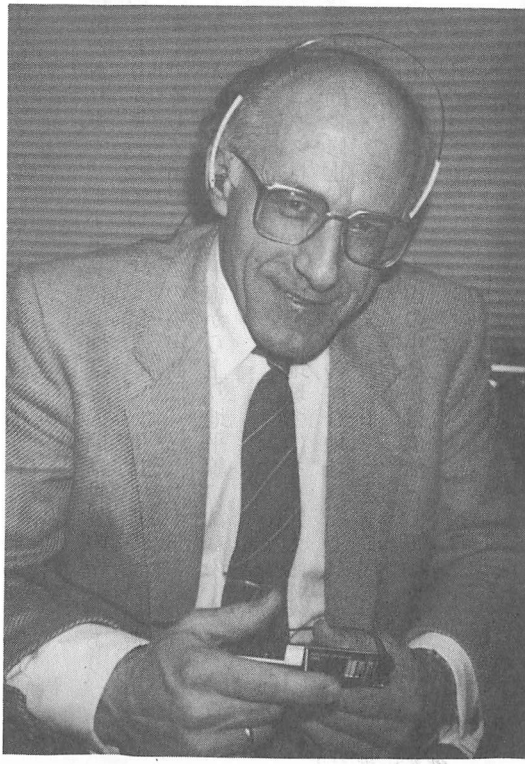
主を求めよ。お会いできる間に。近くにおられるうちに、呼び求めよ。

（イザヤ　55・6）



▲'82年11月3日、松田博、由紀子さんの結婚式に。

▼ウォークマンで遊ぶベックさん。土佐山田で。



無限の宇宙にある神

ゴットホルド・ベック

一九三〇年西ドイツシュトゥットガルトに生まる。一九五三年来日。茨城にて開拓伝道の後、一九六四年吉祥寺に導かれる。妻ミンヘンさん、長女ハイデさん、二女ウスラさん、四女ブリギッテさん、五女スーシーさん。

三女リンデさんは一九八〇年、がんのため二十才で召天。その記録が「実を結ぶ命」の本となる。

現代人は、無限の宇宙を考えながら、それでもなお、「人格を持った神」の存在を信じることができるでしょうか。

宇宙観の変遷

紀元二世紀、アフリカのアレキサンドリアで、クラウディアス・プトレマイオスは、当時非常に有名となった彼の天文学集大成（アルマゲスト）に、古代的な認識に立った彼の宇宙観を図にして表わしました。それによると、宇宙全体は、大きな球状をしていて、その中心には、静止している地球があります。そしてそのまわりには、太陽や惑星がめぐっていて、七つの軌道が描かれています。一番外側の球面には、恒星があります。

この宇宙観は、三つの大きな特色があります。まず第一に、地球と人間は世界の中心であり、天空の星々は、その地球と人間のまわりをまわっています。第二に、人間は、神の世界創造の中心としての役割りを与えられています。そして第三に、この宇宙観は、私たちの日常的な感覚が知覚するのと一致しているのですが、太陽と惑星は、地平線から上り地平線に沈むのであって、地球そのものは動かないのです。

しかし、一四七三年に生まれたコペルニクスは、世界の中心は地球ではなく、太陽である、ということを主張し、古代の宇宙観を決定的に修正しました。人間の住む地球は、もはや宇宙の中心ではなく、一つの惑星になってしまったのであり、惑星である地球は、太陽のまわりを回転するのです。従って、コペルニクスの宇宙観によっても、宇宙の中心には依然として動かない中心

（太陽）があり、その周囲を、惑星が回転することになります。太陽は今や座標軸の中心となり、宇宙のすべての運動は、この座標軸の中心である太陽に関係づけられています。すなわち、彼の宇宙観もまた、太陽を中心とした固定的な体系に止まっていたのです。

近代の宇宙観

コペルニクスとガリレイの後に続く数世紀において、多くの物理学者や天文学者は、一歩一歩宇宙の認識を近代的なものに改め続けてきました。現代の宇宙観によれば、太陽は、もはや宇宙の中心ではありません。太陽は、私たちをとりまく銀河系にある約一千億の星と同じ星であり、その中でも中位の大きさの平凡な星であるに過ぎません。私たちはこの目で、約六千の星（六等星まで）を見ることができます。しかし大きな天体望遠鏡や電波望遠鏡などで観測される星の数は、とても六千どころの数ではなく、二十等星までとしても実に十億以上に達します。また、肉眼ではたった一つの星にしか見えない星団の中には、さらに多くの星を数えることができます。しかも、これらの無数の天体は、銀河系と呼ぶ巨大な星雲の体系に属しています。光の速さは、一秒間に約三十万キロメートルですが、この銀河系を、直径の方向に通り抜けるには、光の速さでも約十万年かかるといいます。

アメリカの無人宇宙観測船は、太陽系内での探測を終えると、遠く銀河系の果てまでも飛び去ってゆきますが、その速度は一秒間に十キロメートル以上に達します。しかし、この速度ですら銀河系を通り抜けるには三十億年以上かかります。

この巨大な銀河系は、それ自体、一つの中心のまわりを回転しています。太陽は、この銀河系の中心から、三万光年離れた所に位置しています。しかもその中心のまわりを一周するのに二億年かかるともいわれています。

長い間、この銀河系が宇宙そのものである、と考えられていましたが、この銀河系の外にも、沢山の同じような星の体系である星雲（島宇宙）が発見されるようになりました。私たちの銀河系の外にはるか離れて存在する島宇宙の一つ、アンドロメダ渦巻星雲から銀河系に光が届くまでには、少くとも百万光年はかかります。さらに、このような星雲（島宇宙）の数は、一億以上、場合によっては十億以上と計算されています。しかもこれらの物凄い数の島宇宙は、すべてがお互いに離れていくように運動しています。それらの島宇宙は、私たちの銀河系から遠く離れれば離れるほど、飛び去ってゆく速さは速くなります。その速度は、一秒間に五万五千キロメートル以上に達するものもあるといわれています。

想像できないほどの次元

太陽は、銀河系の中では中位の星の一つですが、その中には、地球が百三十万個は入る体積を持っています。また、地球は、太陽から一億五千万キロメートルほど離れています。従って、時速千キロメートルの平均速度で飛ぶジェット機で、かりに地球から太陽までの距離を飛ぶとすると、十七年はかかることになります。太陽系の一番外側の惑星・冥王星は、地球と同じ太陽をめぐる惑星の一つですが、地球からは五千億キロメートル離れています。そうすると、この惑星に

同じジェット機で仮に行くとすると、五百七十年はかかることになります。宇宙の中ではほんの微細な恒星の一つにすぎない太陽系の中の、これらの距離でさえも、私たちはすでに想像することがむずかしいほど大きなものです。ましてや、千億の太陽と同じような恒星を持つ、私たちの銀河系の大きさは、実に恐るべきものであると言えましょう。

地球から比較的近くにある恒星のシリウスと、地球との距離は、約八光年です。時速三万キロから四万キロの月ロケットで飛んだ場合、二十二万五千年かかることになります。しかもそれは我々から比較的近い恒星までの距離なのです。

宇宙の大きさと距離は、人間の想像力をはるかに超えるものがあります。宇宙に存在するすべての星の数は、今日では、十の22乗（10^{22}）と計算されています。星の数は大変な数なので、これらを正確に算定することは、今日の進んだ科学技術をもってしても困難です。

有名なたとえ話として、ある天文学者は、すべての星の数は、すべての海岸にある砂の数に匹敵する、といっています。

革命的な認識。物質はエネルギーの形式にすぎない

想像を絶する宇宙の広さと並んで、それを構成する物質にも目を向ける必要があります。私たち人間の心の奥深くには、何ものによっても壊されることのない、しっかりしたものに支えられていたいという要求があります。

紀元前五世紀、ギリシャの哲学者デモクラテスとレウキプスは、物質というものは、本来永遠

で破壊されず、それ以上分けることのできない分子という単位から構成されていると主張しました。無神論に立脚しているマルクス主義でさえ、物質は永遠であることを前提としています。

しかし、今日の原子物理学は、物質がエネルギーの一つの形式にすぎないこと、そして、物質はエネルギーという形式に還元されうるということを、証明しています（その顕著な一例が核融合反応、原子力エネルギーの利用です）。物質はエネルギーに変えられます。従って、今日の科学的な認識に立てば、物質とは、一定不変の、絶対的なものではありません。

今世紀に至るまで、人々は、因果法則の普遍妥当性を疑わず信じてきました。多くの科学的な業績は、この因果律の解明によってもたらされてきました。しかし、その法則といえども、ミクロの領域における、原子物理学の研究によって、疑わしいものとなってしまいました。だから、物質という、一見確固とした基盤でさえも、人間から奪われてしまったのです。

空間と時間の相対性

有名なイギリスの物理学者ニュートンでさえも、絶対的な空間と、絶対的な時間とを信じていました。この考えによると、絶対的な空間は、常に同じ状態で存在し、絶対的な時間もまた、どこであっても同じ早さですぎ去ってゆく単位として当てはまることになります。

しかし、今日の物理学の研究の結果によると、絶対的な空間というものは存在しませんし、また、絶対的な時間というものも存在しません。これは、有名な物理学者アインシュタインの相対性理論が明らかにした大きな研究成果の一つです。

この理論を、分かりやすい例で考えてみると、非常に面白いことが起ります。宇宙の彼方へ、光速に近い速度で飛行し、一定の時間の後に再び地球に帰還した宇宙飛行士は、宇宙での二十年間が、地上での例えば五十年間に相当することを発見するでしょう。

空間と時間についての絶対的なものは無くなりました。いかなる絶対的な空間も、時間も、存在しません。すべては相対的です。

無限の宇宙の中で、訳が分からなくなった人間

絶対的なものがなければ、支えとなるものは、無いのでしょうか？　依り所になるものは、一体何なのでしょうか？

このちっぽけな地球の上で、私たちは太陽のまわりをまわっていますが、その太陽もまた、一千億というほかの恒星と同じような星の一つにすぎません。太陽は何億年という周期で銀河の中心をまわっています。私たちの銀河系は、すべての他の島宇宙から、考えられないほどの速度で宇宙の深みへと遠ざかっています。すべては動き、流れ、どこにも静止点、中心点はありません。目に見える物質はまた、いつかある日、エネルギーに変ってしまう。空間と時間も、決して絶対的なものではありません。私たちは、どこにも、確固とした土台を持つことができないのです。

私たちは、どのように行動すべきでしょうか？　私たちは、より高い力を信じることなしに、宇宙の近代的認識から結論を引き出そうとするならば、虚無主義的な世界観に至らざるをえません。私たちの生活や人生には、依り所となるものが何もありません。目に見える世界には、私た

ちが立脚できる基盤は、何もありません。今世紀の偉大な哲学者ハイデッガーは、そのことをたくみな表現で次のように言い表しています。「私たちの人生は、無の中に投げこまれたものにすぎない」と。

また、フランスのノーベル賞受賞者ジャック・モノは、「偶然に出来てしまった人間は、無限の宇宙の中で、まったく孤独な存在である」と書き記しています。

今日、多くの人間は、このような虚無主義的な世界観のもとに悩んでいます。ある偉大な医学者は、現代の病は、薬では治せないことを明言し、その病として「孤独、人生の意味に対する疑いと不安」の三つをあげています。

現代人は、安心感を失ってしまいました。つまり、自分とは関わりのない、無限の宇宙の中で自分は一人ぼっちで、訳が分からなくなってしまっている、と感じています。そうして、現代人は、もはや、人生の意味を見出すことができず、不確実な将来に対する不安に悩んでいます。

ドイツの哲学者ニーチェは、次のような深刻な問いを発しています。「私たちは絶えず下へ下へと落ちていくのではないか？　何が上で、何が下である、というような分別があるのだろうか？　私たちは、限りない無の中をさまよっているのではないだろうか？　この世はますます冷ややかになってしまったのではないだろうか？　絶えざる夜、しかも大変な暗黒がやってくるのではないだろうか？」と。

これらは、この無限の宇宙の中で、確固とした基盤を見出せないで、おそれ、とまどい、訳がわからなくなった人間の痛切な叫びであります。

創造主を知る認識

虚無主義的な世界観に満足できないならば、残された可能性は、ただ一つ、すべての背後で、すべてを支配しておられる目に見えない「創造主」を信じることです。

昔のギリシャ人やローマ人は、人間の外観と特徴を備えた神話の神々を創造しました。つまり彼らは、自分の想像力によって、神々を造りあげ、神々の世界を造り出しました。しかし、それらの神々は、人間の想像力が生んだ偶像にすぎず、真の神とは何の関係もないものでした。私たちが造り出すことのできる神々とは、しょせん、私たちの想像の産物以外の何ものでもないからです。

インドの宗教、瞑想とかヨガによって、目に見えない世界とのつながりを持ち、神を見出そうとする風潮は、今日、多かれ少なかれ世界の流行となろうとしています。たしかに、そのようなことによって、ふつうなら経験できないようなことを経験することはあり得ることです。たとえば、恍惚感にひたったり、この世の思いわずらいから一時的に解放されたりすることは、十分に考えられることです。しかし、これらすべての宗教に共通していることは、人間は一生けんめいがんばれば、自分で自分を救うことができる、と考えることです。

哲学者たちもまた、自分の理性の努力によって、一つの神の姿を創ろうとしました。古代ギリシャの哲学者アリストテレスによれば、神は、この世とは無関係に存在しているものであり、この超越的な神は、人間にとって心から尊敬すべき存在です。そして、この神を知ることこそ、人間の理性にとって、最高の課題なのです。つまり、人間の理性こそが、直接神に触れることので

きる唯一のものである、と、アリストテレスは考えました。すべての哲学的な神観に共通していることは、神は人間の理性によってつかむことのできるものだ、ということです。

宇宙と原子、マクロとミクロの世界に関する現代的な認識は、人間の思考能力をはるかに越えてしまっています。目に見える世界全体を把握するということ、そして人間の思考力によって、それらの世界の奥底を究めるということは、不可能であるように思われます。私たちの思考力と理性は、一つの大きな壁にぶつかってしまうのです。ましてや、万物の創り主について、私たちの思考力から一つの姿を描き出すなどということは、まったく不可能なことであるといえましょう。そこには、ただ一つの可能性だけが残されているのです。

人間の理性ではなく、神の啓示こそ、神を知る鍵

もし神がほんとうにいらっしゃるのなら、神は、私たちにご自身の存在を啓示なさるはずです。私たちが神の所へ上ることはできないのですから、神は、私たちの心に降りてきてくださるはずです。聖書が、同じように、この立場をとっているということを確認することは、極めて意義のあることです。人間は、神を、人間の理性で理解することはできない、と聖書ははっきりと言っています。

わたしの思いは、あなたがたの思いと異なり、わたしの道は、あなたがたの道と異なるからだ。——主の御告げ——天が地よりも高いように、わたしの道は、あなたがたの道よりも高く、わたしの思いは、あなたがたの思いよりも高い。　（イザヤ　55・8、9）

聖書によれば、神は、自らご自身を人間に啓示する以外に、人間が神を知る方法はないのです。主イエスは、「わたしは、あなた（父なる神）が世から取り出してわたしに下さった人々に、あなたの御名を明らかにしました」（ヨハネ　17・6）とおっしゃいました。神が自らご自身を私たちに啓示してくださらなければ、私たちは決して神を知ることはできない、たとえどんなに努力しても不可能である、と聖書は言っています。

主なる神は、人間の想像を絶した、比類なきお方ですから、人間が乏しい知識をもっておしはかり、何かほかのものと比較して考えようとしても、絶対にできません。ですから、主なる神は人間に、偶像を造ること、いかなる形を造ることもきびしく禁じられたのです。神はただ、啓示によってのみ、ご自身を現わされる神なのです。

旧約・新約聖書における神

私たちは、聖書の中で私たちに啓示されている神を、今日の宇宙の認識と結びつけ、その存在を確かめることができるでしょうか？　あるいは、神について聖書が言っていることは、宇宙に関する私たちの認識と矛盾するのでしょうか？　この問いに答えるために、私たちは、聖書の神を、もう少しくわしく見てみたいと思います。

モーセは、神の御名を尋ねますと、神はモーセに語られました。「わたしは、『わたしはある』という者である」（出エジプト　3・14）と。この答によって、主なる神は、ご自身がすべての被造物や人間の理性、思考力、理解力を絶したお方であることを、私たちに示しておられます。神は

私たちのすべての世界体系のかなたにおられる絶対者です。

私たちは、この、目に見える世界には、ゆるがない土台や依り所は何一つ存在しないことを確認しました。万物流転の世界です。私たちは立脚すべき確固不動の土台を、何一つ持っていません。

聖書によれば、ただ主なる神お一人だけが、ゆるがない依り所、絶対者、永遠から永遠にわたり変ることのないお方です。移り変るあらゆる現象の中で、ただ神お一人だけが、私たちの永遠の安らぎの場、また憩いの場です。

山々が生まれる前から、あなたが地と世界とを生み出す前から、まことに、とこしえからとこしえまで、あなたは神です。（詩篇 90・2）

神は霊です。（ヨハネ 4・24）

主は御霊です。（Ⅱコリント 3・17）

霊、あるいは御霊という言葉は、物質とは対立し、この世の目に見える存在の世界とも対立するものです。それによって、聖書は、神が造られた世界を超越して、それを支配するお方として君臨しておられることを強調しています。主なる神は、空間と時間の次元を越えています。

空間と時間の超越者

神はどこにいるのか？　ソ連の宇宙飛行士は、素朴な表現で、宇宙のどこにも神はいなかったと言いました。しかし、聖書は、神がいたるところ、どこにでも在る、といっています。主なる神は、空間に束縛されてはいません。

私はあなたの御霊から離れて、どこへ行けましょう。私はあなたの御前を離れて、どこへのがれましょう。たとい、私が天に上っても、そこにあなたはおられ、私がよみに床を設けても、そこにあなたはおられます。私が暁の翼をかって、海の果てに住んでも、そこでも、あなたの御手が私を導き、あなたの右の手が私を捕えます。（詩篇　139・7～10）

主なる神は、あらゆる空間的な距離や間隔を超越しておられます。造られたものは、すべて、一つの場所を与えられています。太陽はここにあって、あそこにはありません。主なる神は、造られたものにあるべき場所や境界を定められましたが、神ご自身はそれらすべてを超越しておられます。神のいない所は、ひとつもありません。

実に、天も、天の天も、あなた（父なる神）をお入れすることはできません。

（Ⅰ列王記　8・27）

主なる神が空間を超越しているということこそ、偶像の禁止の基となっています。空間的に限られたものだけが、目に、形として見えます。したがって、一つの形に人間の手で造られた、い

わゆる神の像は、一つの場所に固定され、空間的に限られてしまうので、真の神ではありえません。たとえば鎌倉の大仏や高崎の観音は、鎌倉とか高崎という特定の場所に固定されてしまっていますから、真の神ではありません。

主なる神は、また、時間にも束縛されていません。

まことに、あなた（主なる神）の目には、千年も、きのうのように過ぎ去り、夜回りのひとときのようです。

（詩篇　90・4）

あなたの目は胎児の私を見られ、あなたの書物にすべてが、書きしるされました。私のために作られた日々が、しかも、その一日もないうちに。

（詩篇　139・16）

主なる神は、時間を支配する支配者です。

神は永遠に同じ方であり、最初にして最後であり、アルファであり、オメガです。神は永遠であり、不滅です。

ただひとり死のない方。

（Ⅰテモテ　6・16）

神の御霊は、考えられうるすべての制約条件から独立しており、絶対無条件のお方ですから、目に見える世界の何らかの大きさや現象でもっては、説明できません。主なる神の御霊は、どこにでもおられ、過去、現在、未来、目に見えるもの、目に見えないものすべてを、限りなく包括

しておられます。

目に見える世界と目に見えない世界の創造主としての神

信仰によって、私たちは、この世界が神のことばで造られたことを悟り、したがって、見えるものが目に見えるものからできたのではないことを悟るのです。（ヘブル　11・3）

この箇所によると、私たちが認識している全宇宙は、絶対者なる主、すなわち神によって造られました。すなわち、神の手によって、つまり目に見えない世界から、この目に見える世界が出現したのです。

ただひとり死のない方であり、近づくこともできない光の中に住まわれ、人間がだれひとり見たことのない、また見ることのできない方です。誉れと、とこしえの主権は神のものです。（Ⅰテモテ　6・16）

聖書のどこにも、特定の世界像はなく、ただ目に見えるものと、目に見えないものとが区別されているだけです。

私たちは、見えるものにではなく、見えないものにこそ目を留めます。見えるものは一時的であり、見えないものはいつまでも続くからです。（Ⅱコリント　4・18）

無限の宇宙における同様、考えられないほど小さな原子の世界においても、私たちは、目に見える限界という壁にぶつかります。そして、目に見えない次元を想定しなければ、ある特定の現象といえども、理解されえないように思われます。

目に見えない世界にかこまれている私たち

聖書は、目に見えない次元が私たちをかこんでいることを強調しています。

パウロは、アテネのアレオパゴスで行った、有名な伝道の中で、感じようが感じまいが、見出そうが見出すまいが、神を求め、神を確認することを聴衆に要求しています。

「神は、私たちひとりひとりから遠く離れてはおられません。私たちは、神の中に生き、動き、また存在しているのです」。（使徒 17・27、28）

目に見える世界と目に見えない世界は、一つの大きな関連しあう王国を形成し、その王は、キリストです。

なぜなら、万物は御子にあって造られたからです。天にあるもの、地にあるもの、見えるもの、また見えないもの、王座も主権も支配も権威も、すべて御子によって造られたのです。（コロサイ 1・16）

天上と地上で家族と呼ばれるすべてのものの名の元である父。（エペソ 3・15）

聖書は、目に見える世界の中に、目に見えない次元がどのように入りこんできているかを、いろいろな箇所で私たちに告げています。

シャデラク、メシャク、アベデ・ネゴの三人は、縛られたままで、火の燃える炉の中に落ち込んだ。そのとき、ネブガデネザル王は驚き、急いで立ち上がり、その顧問たちに尋ねて言った。「私たちは三人の者を縛って火の中に投げ込んだのではなかったか……。だが私には、火の中をなわを解かれて歩いている四人の者が見える。しかも彼らは何の害も受けていない。第四の者の姿は神々の子のようだ」。（ダニエル　3・23～25）

また、ベルシャツァルの王が食事をしている時、壁に驚くべき文字が書かれたこと。さらに、主イエス・キリストご降誕のすばらしい告示。ペテロ、ヨハネ、ヤコブをつれて祈るために登られた山での、イエスの光り輝く変貌。よみがえられた主イエスが、五百人以上の兄弟たちにご自身を現わされたことなど。

人格をもった神

今まで、私たちは、無限の宇宙にある神について考えてきましたが、ここで今、再び、最初に設けた問に戻ることにしましょう。それはすなわち、「現代人は、無限の宇宙を考えながら、それでもなお、人格を持った神の存在を信じることができるでしょうか?」という問いです。

人格を持った神とは、個人的に私たちに語りかけ、私たちもまた、個人的に語りかけることの

できる神であり、しかもその方は、私たちの人生のことをいろいろと配慮してくださる神です。

私たちが、聖書のいうところにもとずいて、空間と時間とを支配する「主」として認識する神、いかなる物質にも束縛されない神、宇宙をお創りになった神、この神が、私たちのような小さな存在のことを配慮してくださる人格神としての神なのでしょうか？　あるいは、私たちは、永遠なる神が実在されているにもかかわらず、宇宙の深みの中に閉じこめられ、慰めようのない孤独にひとり投げこまれ、無の中へと引き渡され、将来もなく、やがて私たちの上にやってくる事柄に対する不安と心配の中におかれるのでしょうか？

救い主に対する預言

創造主である神が、救いの源である、ということ、そうしてまた人間の歴史の中にご自身を啓示してくださった、ということは、何とすばらしい喜びのおとずれでしょうか。

主なる神が、人類史の中で、ご自身を啓示してくださった方法は、神の救いのご計画と、神の愛のすばらしさを表わしています。

世が創られる前から、主イエスは、すでに全人類の救い主として定められていた、と、聖書はいっています。

キリストは、世の始まる前から知られていましたが、この終わりの時に、あなたがたのために、現われてくださいました。

（Ⅰペテロ　1・20）

このことは、私たち滅ぶべき人間には、とても理解できないことですが、主なる神は、すべての時間を超越しておられるのですから、決して不可能なことではありません。

キリストは、ある日突然、出現されたのではなく、長い間、あらかじめ預言によって約束されていたお方なのです。

使者が、来るべき王をいかに以前から早く告げ知らさなければならなかったかということを考えると、神の王すなわち救い主の到来についての告示は、イスラエルの民の歴史において、二千年という時間を通してなされたことが自ら明らかになります。

イスラエルの民の中では、神の啓示は、次第次第に行われてゆき、イエス・キリストの到来によって、頂点に達します。

旧約聖書の中では、三百三十三箇所で、来るべき救世主(メシア)のことが書き記されています。

神の啓示の最高潮は、イエス・キリストのご降誕、主イエスの生と死とよみがえりです。

キリストは、人間的、この世的なものと、超越的、非地上的、不可視的なものという、二つの次元の交点となりました。イエス・キリストの形を通して、主なる神は、全宇宙において、ただ一度だけ、歴史的に実在するものとなられました。

このようにして、御子イエスによって、遠く離れた知られざるかくれた神から、近くに臨在したまう主なる神が出現されました。というのも、キリストが、「わたしと父(主なる神)とは、一つである」と言っておられるからです。

神の愛の表れ

キリストによって私たちは、個人的に主なる神に近づくことができるようになりました。主イエスは、私たちを、神の愛によって救い出すために来てくださいました。

神は、実に、そのひとり子をお与えになったほどに、世を愛された。それは御子を信じる者が、ひとりとして滅びることなく、永遠のいのちを持つためである。(ヨハネ　3・16)

主イエスの生と死は、人間に対する神の愛と啓示の最高の表れです。

主イエスは、宮殿の中ではなく、みすぼらしい馬屋の中で生まれ、ゆりかごは飼葉おけでした。イスラエルの上流の民からイエスは無視され、ののしられました。病人、貧乏人、罪人たちに対して、主イエスは、無私の愛を与えてくださいました。主イエスは、何一つ自分の持物を持っておられませんでした。

「狐には穴があり、空の鳥には巣があるが、人の子(主イエス)には枕する所もありません」　(マタイ　8・20)

十字架の上で、主イエスは、もっとひどい悩みと恐ろしい苦しみを経験されました。ヘブル書において、主イエスのご生涯についての奥義が明らかにされています。

そういうわけで、神のことについて、あわれみ深い、忠実な大祭司となるため、主はすべての点で兄弟たちと同じようにならなければなりませんでした。それは民の罪のために

なだめがなされるためなのです。（ヘブル　2・17）

すべて、疲れた人、重荷を負っている人は、わたしのところに来なさい。わたしがあなたがたを休ませてあげます。（マタイ　11・28）

このように、イエスは言ってくださいましたが、それは世俗を遠く離れて鎮座ましましている神の招きではなく、すべての人間の苦しみを自ら味わってくださり、それゆえに深いあわれみをたたえた主の招きなのです。

主は、ご自分の自由意志で、罪深い人間の手にかかって、十字架についてくださいました。人間は、あらゆる時代を通してのこの最大の贈り物に対して、何をしたのでしょうか。

彼らは、主を、殺してしまいました。この犠牲の死による神の奇跡は、十字架におけるみせかけ上の敗北がよみの世の力を打ち壊し、今からは、十字架につけられた主イエスを信じる信仰によって神に近づく道が開かれたことの中にあります。

神の遠近

空間とは何の関係もない、神の遠近、すなわち神から遠く離れている存在と、神の近くにいる存在とがあります。すなわち、主なる神との交わりを持っているものは神のみそば近くにおり、神と交わりを持っていないものは、神から遠く離れているのです。

主イエスは、「ふたりでも三人でも、わたしの名において集まる所には、わたしもその中にいる」（マタイ　18・20）、また「見よ。わたしは、世の終わりまで、いつも、あなたがたとともにいます」（マタイ　28・20）とおっしゃっています。このように約束された主のご臨在は、空間的には理解されえないものです。また、神からの離反は、人間が債務を担ったまま神から遠く離れていることを意味します。人間は、自分の罪深さを知る時に、主なる神のご臨在を経験し、そして悔い改め、主の福音を信じることによって救われます。

悔い改めというヘブル語の原語は「ふるさとに帰る」ということを意味しています。従って、悔い改めるということは、心のふるさとである神に立ち返ることを意味しています。「私のもとに帰りなさい！」と、主なる神は、宇宙の慰めようのない空しさと孤独、そしてまた人生の無意味さの中にいる人たちに言葉をかけてくださいます。

私たちが、わけの分からない状態におちいっていることを、聖書は否定しません。聖書の中のある言葉は、ニーチェの疑問「私たちは限りなき無の中でさまよっているのではないだろうか？」と一脈あい通じるものがあり、深い問いかけを私たちに発しています。

私たちはたしかに、限りない無の中でさまよっています。その原因は、私たちがさまよい歩いていることにある、と聖書は言っています。多くの人たちは、主なる神から遠く離れてしまいました。多くの人たちは神なしに人生を送っています。このことを聖書は「罪」と呼ぶのです。

しかし主なる神は、虚無主義者ではありません。神は、私たちがわけの分からない状態や運命にゆだねられることを望みません。

主なる神は、イエスを通して、私たちに個人的に語りかけ、ふるさとに帰るようにと警告してくださいます。「重荷を負って苦労している者は、みな、わたしのもとに来なさい。私があなたがたを休ませてあげる」と、主イエスは言っておられます。

イエス・キリストは、十字架上での犠牲の死によって、罪の力、絶望の力、無意味さの力を打ちくだき、私たちが永遠の父なる神に近づく道を開いてくださいました。

新しい人生の始まり

私たちが十字架の赦す力を体験し、自己中心の生活を捨てる備えをし、キリストが私たちの人生の主となるとき、新しい人生が開かれます。それを聖書は、「永遠のいのち」と呼んでいます。「私を信じるものは、永遠のいのちを持つ」と、主イエスは言っておられます。

十字架につけられ、よみがえられた主イエス様を信じる信仰によって、神の、目に見えない世界が、私たちの人生の中に入ってきます。私たちは永遠の次元に立脚するのです。ここでは、宇宙の空しさではなく、神の愛が私たちを包みます。

私たちの主イエス・キリストであり、私たちの父なる神である方、すなわち、私たちを愛し、恵みによって永遠の慰めとすばらしい望みとを与えてくださった方。

（Ⅱテサロニケ　2・16）

私たち、父なる神を信じる者は、宇宙の無限の世界において、もはや一人ぼっちではありませ

ん。私たちは、主イエス様を信じる信仰によって、神の子とされると聖書は言っています。私たちは、主なる神を私たちの父と呼ぶことを許されています。私たちは、絶対者である主と、個人的に密接な関係を持つことが許され、神が主イエス様によって私たちを愛しておられるということを知っています。

私たちは、主なる神によって、恵みを与えられ、愛されているものです。

私たちの人生は、もはや無に投げこまれたものではなく、無意味なものではありません。

私たちは、神の愛と恵みによって生かされ、神に仕え、神に栄光を帰するために召し出されています。

私たちは、絶えず落ちてゆくことはありません。なぜなら、私たちは、確固不動の土台をもっているからです。主なる神の愛は絶対であり、この愛から私たちを引き離すものは何一つありません。

私はこう確信しています。死も、いのちも、御使いも、権威ある者も、今ある者も、後に来る者も、力ある者も、高さも、深さも、そのほかのどんな被造物も、私たちの主キリスト・イエスにある神の愛から、私たちを引き離すことはできません。

（ローマ　8・38、39）

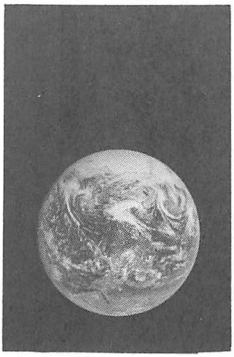
わたしは、あなたを愛している（イザヤ　43・4）

これこそが、全宇宙をお創りになった神が、ちっぽけな人間に対して、約束してくださったみ

ことばです。すなわち、主イエスを信じる信仰によって、無限の宇宙の創造主は、私たちを個人的に愛する私たちの「父」となってくださいました。

聖書の神は、考えられないほど大いなるもので、無限の宇宙と同じように、私たちの想像を絶する存在です。現代人もまた、自分自身に正直になろうとすれば、このことを認めざるをえません。無限の宇宙の認識は、聖書を通してご自身を啓示されたすばらしい神を信じる信仰に対して何の妨げにもなりません。

しかも聖書は、ただ単に、崇高な神の啓示を与えてくださるだけではなく、無限の宇宙の中でわけが分からなくなっている私たちに、福音を通して、救いの御手をさしのべておられます。聖書が約束している救いとは、主イエスそのものです。主イエスを信じ受け入れるものにとっては、目に見える世界と、目に見えない世界の創造主は、個人的に、私たちを愛してくださる父となるのです。



あとがき

もの事を、より深く考えてみたい方がたのために、ここに10項目の質問を出して、それについてごいっしょに考えてみたいと思います。

結論を先に言いますと、真剣にもの事を考える人は、主なる神を信じざるをえないし、また、神を信じている人は、目先きのことだけでなく、将来のことについてもよく考えている、ということです。そもそも人間は、まず第一に神を尋ね求めるものとして、第二に人生の真の意味と目的を追求するものとして、そして第三に永遠に対する憧れを抱くものとして造られました。

質問1　この宇宙はいかにして発生したか？

この質問に対して、完全に答えられるのは、聖書だけです。聖書は、「初めに、神が天と地を創造した」と言っています。神は、万物の創り主です。

私たちが、天体や原子、生命などを深く知れば知るほど、この世界は、人間が考えだしたり造ったりするものなどとは比べ物にならないくらい、偉大で、計画的で、賢く造られていることに驚きます。このことを真剣に考えるならば、それらすべてのものの背後に、神、偉大なる創造主がいらっしゃるに違いないという結論に到達せざるをえません。

そのほかに考えられる唯一の可能性としては、偶然によって、この世界が発生した、ということです。しかし、この考えを支持することは困難であり、しかも数学者は、確率的に見てもそれ

が不可能であることを証明しています。

すべてのものはどこから発生し、生命はどこからきたのか？　という問いに対しては、ただ次のような確信に満ちた説得力のある答えだけが存在しています。「初めに神が創造した」と。

質問2　聖書は人間によって書かれたではないか？

二番目の問いは、初めに神が天地を創造したとしても、それを述べている聖書は、人間によって書かれたものにすぎないではないか、という、一見もっともな問いです。確かに、聖書は人間の手によって書かれました。しかし書いた人たちは、自分の頭で考えたことを書いたのではなく、神の霊によって導かれ、神に命令されてそれらのことを書き記したのです。

なぜなら、預言は決して人間の意志によってもたらされたのではなく、聖霊に動かされた人たちが、神からのことばを語ったのだからです。（Ⅱペテロ　1・21）

次に述べる二つの事実は、聖書の作者が神ご自身であることを証明しています。

聖書の内の最も古い箇所は、三千五百年前に書かれました。そしてそこには、生命について、自然について、宇宙について、多くの叙述があります。そこに述べられていることが、今日もなお、動かない真理であるかどうか、ということは、確かに興味のあることです。この目的で聖書を綿密に調べあげた結果明らかになったことは、聖書が実際に語っている事柄と、自然科学が実際に明らかにする事柄とは、まったく矛盾する所がない、ということだったのです。大変な進歩を

遂げてきた科学と、三千五百年も前に書かれた聖書の言っていることがまったく矛盾しないとは、何と驚くべきことでしょうか。果して古い書物の中で、聖書と並べられるようなものが他にもあるでしょうか？　絶対にありません。

また、聖書は、沢山の預言に満ちていますが、それらの大部分の預言は既に成就されています。たとえばイスラエルの民がパレスチナに戻ってくる、ということは、すでに二千五百年以前に預言されていたのですが、その預言は一九四八年、イスラエルの建国によって現実のものとなり預言は成就しました。

主イエスが、この地上に約束された救い主として来てくださるということは、聖書の中ですでに三百三十三回も預言されていましたが、驚くべきことには、どこで、どのような形で、どのようなものとして現われるのかという細かい点についてまでも預言されており、しかもそれらの預言はすべて現実のものとなりました。

質問3　現代人にとって、聖書は意義を持ちうるか？

現代人は、どのようにしたら自分の人生を最も有効に、有意義にすごすことができるだろうかと真剣に模索しています。そして、この問題に対しても、答を与えてくれるのは聖書だけです。しかし人間自身でそれを解決しようとする努力は、絶えざる不安と緊張以外の何ものをも生み出しません。たとえ一つの目標に到達できたとしても、それはほとんど始め抱いた期待を満たしてはくれません。

しかし、ある人が、イエス・キリストを神の御子として知ることができれば、その人は神との平和を持ち、また永遠のいのちを持つことができ、完全に守られているということを知ることができます。

人生に失望した人びとは、しばしば真の理想像、しっかりとした基準、動かない価値などを求めます。

確信をもって言えることは、イエス・キリストのみもとに行った人は、最も真実なる理想像を持ち、また、永遠なるもの、絶対に駄目にならないものを持つことができる、ということです。重病になったり、死が近ずいてきたなら、いったいどうしたらよいのでしょうか？　神との平和を持っている人は、そのような状況に置かれても決して絶望的な状態にはなりません。なぜならその人は、復活と永遠のいのちを知っているからです。

イエスは言われた。「わたしは、よみがえりです。いのちです。わたしを信じる者は、死んでも生きるのです」

（ヨハネ　11・25）

現代人は、現代的とか近代的という言葉に弱く、心理学者フロイドのいうように、自由な男女関係こそ人間を近代化するものだと思いこんだり、生物学者ダーウィンの進化論を肯定したり、聖書を批判してみせる新しい神学こそ近代的であると考えそうした人たちを模範にしたり、これらの学説を自分の基準にしたりしていますが、これはとんでもない誤りです。むしろ、それによって、人間は大きな混乱におちいってしまうのです。

質問4　死によって、すべてが終るのか？

多くの人は、死によって、すべてのことが終ると考えています。生きている者と死体の間の違いは、ただ単に、心臓が動いているかいないかということだけではありません。むしろ肉体の死は、霊、魂、肉体の結びつきを破壊して、分離することを意味しています。ですから、死者のかたわらでは、誰でもが、肉体は人間の一部にすぎないということを感じているのです。

甦(よみがえ)りの事実は、聖書信仰の中心です。聖書は、はっきりと、イエス・キリストが死からよみがえられたことを証ししています。しかもそのイエスの復活は、五百人以上もの人が実際に目で見ているのです。その後二千年たった今日に至るまで、イエス・キリストを信じる多くの人が、福音をのべ伝え、そのために殉教の死さえ遂げています。このことは、よみがえられたイエス様の助けがなければ絶対に考えられなかったことですし、またありえないことです。主イエス様が、復活なさる前の日までは、イエス様の弟子たちは、まったくがっかりしてしまい、不安と心配の気持でいっぱいでしたから、ほんとうに憶病だったのです。

今日、福音が全世界にのべ伝えられているという事実こそ、イエス様の復活を証明するよい証拠です。イエス様の復活こそ、信ずる者の復活にとっての前提条件であり、保証なのです。

わたし（イエス）が生きるので、あなたがたも生きるからです。（ヨハネ　14・19）

質問5　神がいるなら、神はどうして多くの貧困を許しておられるのか？

神は私たち人間に、自由意志を与えておられます。人間の貧困の大部分は、神のせいではなくて、人間自身の責任です。たとえば戦争、そして少数者を多数者が圧迫する不正義、経済的な搾取、捕虜に対する不正な取り扱いなどは、すべて、人間が自分で作りだしたものです。それだけでなく、毎日の日常生活の中で、私たちがお互いに他の人を顧みないで、自分勝手な自分中心の生活を行なうことによって、たくさんの問題と悩みを作りだしているのです。

すべてを正しく理解して正しい判断をするためには、この地上の生活が、自己中心の目標の追求のためにあるのではなく、地上の生活は私たちの実存の短い一部分にすぎない、ということを知らなければなりません。人生の大切な目的は、まず第一に、まことの神を知ることにあります。

人は、たとい全世界を手に入れても、まことのいのちを損じたら、何の得がありましょう。

（マタイ　16・26）

人間が多くの悩みや苦しみを通してたどりつくべき目標は、復活であり、まったく新しい世界で神とともに住むことです。

「神ご自身が彼らとともにおられて、彼らの目の涙をすっかりぬぐい取ってくださる。もはや死もなく、悲しみ、叫び、苦しみもない。なぜなら、以前のものが、もはや過ぎ去ったからである」すると、御座に着いておられる方が言われた。「見よ。わたしは、すべてを新しくする」。

（黙示　21・3～5）

質問6　「私は正しい、神の前に立つことができる」と人間が言うことができるか？

少しでも自分のことを卒直に認めようとするものは、自分が惨めで、誤ちを犯したものであることを認めざるをえません。だれ一人として、他人に、隣人に、不正を犯さなかったものはいません。それというのも、私たちの生活は、自分中心と支配欲によって動かされているからです。しかしながら、主なる神に対する負いめは、もっともっと大きなものです。主なる神が、神の被造物である私たちに望んでおられることは、私たちが神を愛し、感謝と潔いおそれをもって、神を仰ぎみることです。

しかし大部分の人間は、そのことから遠く離れてしまっています。むしろ、大部分の人間が努力していることは、独りで立つこと、すなわち神なしに生きることなのです。その人たちは、神の戒めを無視しています。自分勝手に生活することこそ、自由である、と思われていますが、実はそれこそ、造り主に、また守り主である神に対する反抗なのです。生けるまことの神の判断は次のみことばの通りです。

「義人はいない。ひとりもいない。すべての人が迷い出て、みな、ともに無益な者となった。善を行なう人はいない。ひとりもいない」　（ローマ　3・10、12）

質問7　聖書の福音を一度も聞いたことのない人はいったいどうなるのか？

たしかに、多くの人々は一度も福音を聞いたことがありません。しかし、人間は誰でも、神意識と罪意識を持っています。ですから、ほんとうに救われたいと思う人は、あるがままの状態で

「神様。こんな私を、どうか救ってください」と神に頼むことができます。自分の負いめを認めるものは、神の憐みをいただくことができます。人間は、罪人であるから、罪を犯したから滅びるのではなく、「主なる神の憐みを求めないから」滅びるのです。

質問8　クリスチャンたちは、多くの教派と団体に分裂してしまっているが？

たしかに、今日、クリスチャンたちは多くの教派と団体に分裂してしまっています。この事実を指して、聖書の福音は信じるに値しないのではないか？　おかしいのではないか？　という疑問がよく口にされます。たしかに、いわゆるクリスチャンと呼ばれる人々は大勢いるかも知れませんが、しかし、本当のクリスチャンはごく一部分にすぎないのです。

イエス・キリストを、初めも終りもない永遠の神の御子である、と信じるものだけが、まことのキリスト者である、と聖書は言っています。

だれでも、イエスを神の御子と告白するなら、神はその人のうちにおられ、その人も神のうちにいます。

（Ⅰヨハネ　4・15）

しかしこのことは、単なる口先の言葉だけに終ってしまっては意味がありません。実際の生活の中に表れてこなければならないのです。

なぜ、わたしを「主よ、主よ」と呼びながら、わたしの言うことを行なわないのですか。

（ルカ　6・46）

イエス・キリストを、真心から主と認めて愛する人々の間には、一致があります。よく見られる教派や団体の間の対立は、教会の主であるイエス・キリストよりも、自分の、つまり人間によって作られた教派や団体の方を大切にすることから発生するのです。多くの人は、自分はイエスの弟子であると主張しますが、実際は自分の作った教派や団体のために闘うものに過ぎません。たしかに多くの人は、イエスの名前を使ったり聖書を使ったりしますが、主なる神の栄光と、滅びゆく魂の救いのためではなく、不純な動機から行うために、大変な結果をもたらしすべてがめちゃめちゃになってしまいます。しかしそれは神のせいではありません。

あなたがた自身の中からも、いろいろな曲がったことを語って、弟子たちを自分の方に引きこもうとする者たちが起こるでしょう。（使徒　20・30）

質問9　創造主である神こそご自分が造られた人間の責任を負うべきではないか？

完全な神によって造られた人間は、本来完全なものであり罪のないものでした。しかし人間は最初の試練に耐えることができず、悪魔にだまされ、罪人となりました。

しかし神は、神に敵対する人間をお見捨てにならず、人間のすべての「罪」を贖うために責任をとってくださいました。すなわち主なる神は、世の罪を贖うために、罪なき御子イエス・キリストを十字架におつけになることによって、贖いを果たしてくださいました。

その結果、イエス・キリストを通して、誰でも神に近ずくことができるようになりました。主イエスが、私たちの身代りとして罰せられ、そのことによって全人類の贖いのみわざを成就して

くださった、という事実を信じ、受け入れるものは、完全な罪の赦しを得、神との平和を見出します。しかし、この事実を認めようとせず、かたくなな態度をとり続け、神が提供してくださる恵みを拒み続けるものは、永遠の滅びに定められます。

御子を信じる者はさばかれない。信じない者は神のひとり子の御名を信じなかったのですでにさばかれている。（ヨハネ　3・18）

しかし、主なる神の恵みにあずかることを許されたものは、福音にふさわしく歩むべきです。ただ、キリストの福音にふさわしく生活しなさい。（ピリピ　1・27）

質問10　聖書における五つの大切な事実は何か？

まず第一の事実は、主なる神は聖なるお方であり、真に完全で、正しく、潔いお方であるということです。

聖なるかな、聖なるかな、聖なるかな。神であられる主、万物の支配者。（黙示　4・8）

第二の事実は、すべての人間は罪人であり罪の力で自らを解放することができない、ということです。

善を行なう者はいない。ひとりもいない。（詩篇　14・3）

私は罪ある人間であり、売られて罪の下にある者です。（ローマ　7・14）

第三の事実は、主なる神が、将来、お裁きになる、ということです。主なる神は聖なるお方で人間は罪人ですから、神は人間を裁かないわけにはいきません。裁かざるをえません。なぜなら、神は、お立てになったひとりの人により義をもってこの世界を裁くため、日を決めておられるからです。（使徒　17・31）

第四の事実は、神は愛である、ということです。主なる神は、私たちの罪の贖いの代償として御子イエス・キリストをお立てになりました。

神は、実に、そのひとり子をお与えになったほどに、世を愛された。それは御子を信じる者が、ひとりとして滅びることなく、永遠のいのちを持つためである。（ヨハネ　3・16）

第五の事実は、私たちが救われて罪の贖いにあずかるためには、悔い改めと信仰によって、イエス・キリストのみもとにこなければならない、ということです。使徒パウロは告げています。

ユダヤ人にもギリシャ人にも、神に対する悔い改めと、私たちの主イエスに対する信仰とをはっきりと主張したのです。（使徒　20・21）

イエス・キリストは約束してくださいました。

まことに、まことに、あなたがたに告げます。信じる者は永遠のいのちを持ちます。

（ヨハネ　6・47）

さて皆さんは、半分だけの橋があるのをご存知でしょうか。それは決して冗談ではなくほんとうに存在するのです。それはどこにあるかといいますと、南フランスのアヴィニオンという所に現在でも残っています。「橋の上で環になって踊ろうよ」という歌で日本にも知られている、あの橋です。この橋は、もともと河をまたぐはずだったのですが、実際には河の両岸をまたいではいません。このアヴィニオンの橋は有名なローヌ河に架けられるはずだったのです。しかし、河の左岸は、中世の時代には神聖ローマ帝国、すなわちドイツ領でしたが、反対側の右岸は、フランスに属していました。そして二つの国は一致できませんでしたので、橋は未完成にとどまりました。

半分だけの橋は、まったく無意味なものです。橋は目標にとどかず、反対側の岸に達していません。そして、中途半端であいまいな、つまりこの橋のような人間は、まったく愚かであると言えましょう。神にも仕え、罪にも仕えようと思うものは、愚かな存在である、と言わざるをえません。

しかし、預言者エリヤの時代のイスラエルの人たちも、このようなことをしたのです。彼らは部分的にはまことの主なる神に仕えましたが、また部分的には太陽の神バアルという偶像にも仕

えました。そこでエリヤは、イスラエルの人たちに決断をせまりました。

「あなたがたは、いつまでどっちつかずによろめいているのか。もし、主が神であれば、それに従い、もし、バアルが神であれば、それに従え」（Ⅰ列王記　18・21）

この問いは、今日の私たちにもあてはまります。

イエス・キリストに従うことと、この世的に生きることを半分半分にするのでは、生きがいのある充実した人生を送ることはできません。

有名なドイツの詩人エルンスト・モリッツ・アルントは「自由と天国は中途半端な人が決して手に入れることのできないものである」と言っています。これは、真理です。ですから、中途半端な生活は、止めようではありませんか。

あなたはなまぬるく、熱くも冷たくもないので、わたし（主）の口からあなたを吐き出そう。（黙示　3・16）

しかし主イエスは、あなた全体を、ご自分のものにしたいと思っておられます。

だれも、ふたりの主人に仕えることはできません。（マタイ　6・24）

この世を愛することは、神に敵対することであり、悪魔に動かされることです。ですから、二つのうちのどちらか一つを選ばなければなりません。すなわち、主イエス・キリストに従うため

の決断、決心、勇気、献身をとるべきです。

ですから、全生涯を、主イエス様に明け渡し、主イエス様に従おうではありませんか。

最後に、高知に住んでいるあるクリスチャンの、幼い娘さんの作文をご紹介したいと思います。彼女は、小学校の二年生ですが、ある日、学校の連絡日記帳にたどたどしい字で、先生あてに次のようなことを書き記しました。

ジーザス

「きのう、ジーザスというえいがを見に行った。えいがは、『すくいぬしイエスキリスト。』のえいがだ。先生イエス様をしってる。イエス様しんじたらみーんな天国いけるんだよ。わたしはクリスチャン　クリスチャンってしってる。イエス様をしんじた人だよ。イエス様はほんとうの神様だよ。イエス様はみんなのつみをせおって十字かにかかったんだよ。わたしの家ぞくいとこはみーんなしんじてるんだよ。イエス様をしんじたら、おいのりをする。こわいとき、いやな時、ひつようのあることだったら、イエス様たすけてくれるよ。でも、イエス様の十字かをしんじないとだめだよ。しんじた人は、ほかの神様におがんではいけないんだ。みーんなしんじれば、みーんなきれいな、あたたかい心になるんだよ。日曜日わたしの家においでよ。イエス様のお話を聞くんだよ。先生のしらない人もいるけど、おいでよ。ときどき、ドイツ人のベックさんがくるよ。お話を聞いたら、しんじられると思うよ。11月11日一時30分から学校

があるけど、わたしのおうちにおいでよ。ケーキの会っていうのがあるんだよ。ベックさんのおくさんがケーキを作ったりおしえてくれたりするんだよ。イエス様はほんとうの神様だ。イエス様はやさしいんだ。十字かにかかって、三日目に、ふっかつしたんだよ。でも、わたしたちに、ずっとそばについてくれているんだよ。さあ、おいでよ。日曜日のしゅう会に。」

（原文のまま）

一九八四年　復活祭の日に

ゴットホルド・ベック

基礎的なみことば

救いに至らせる信仰は、人間の理性や感情に基づくのではなく、ただ神のみことばに基づくのです。理解したいという意欲や、何かを感じたいという意欲ではなく、ただ幼な子のように神のみことばを信頼することだけが誘惑の危険からあなたを守ってくれます。

その助けとなるように、いくつかのみことばを次にご紹介いたします。聖書を開いて、そのみことばを考えつつ読んでください。そして与えられたみことばの内容のために、イエス様に感謝してください。そうすれば主はあなたを祝福してくださるでしょう。

一　みことばの大切さ

ヨハネ17・17　エレミヤ15・16　Ⅰヨハネ5・13　Ⅰペテロ1・23　詩篇119・105、160、162

二　悔い改めと信仰

Ⅰヨハネ1・9　箴言28・13　詩篇32・1～5　イザヤ55・6、7　ヨハネ6・37

三　私たちの身代わりとなられたイエス

イザヤ53・4～6　Ⅰペテロ2・24　Ⅱコリント5・21

四　血潮の価値

イザヤ1・18　ローマ3・24～25　Ⅰヨハネ1・7　エペソ1・7　Ⅰペテロ1・18～19　黙示12・11

五　確信の根拠

イザヤ43・1、25　イザヤ44・22　ルカ7・48　ヘブル8・12　ヘブル10・17　詩篇103・12　ヘブル13・5～6

六　思いわずらうな

マタイ13・22　マタイ6・25～32　ピリピ4・6～7　Ⅰペテロ5・7～9　詩篇55・22

七　試練の時

ヤコブ1・12　ヤコブ4・7～8　Ⅰコリント10・13　Ⅰペテロ5・8～10　Ⅰペテロ1・5～7　Ⅱコリント12・9～10　ローマ5・3～5　ローマ8・28　イザヤ40・29～31

光よあれ「私たちは主のもの」証しシリーズのおすすめ

「光よあれ」を読んだのがきっかけで、新しいクリスチャンがたくさん誕生しました。「私もその中の一人ですが、まるで吸いこまれるように一気に読んだあの時の感激を忘れることはできません。多くの方々の証しに感動し、あとがきのベックさんの言葉に衝撃を受け、気がついてみたらクリスチャンになっていました。まさに『光よあれ』です。それは、あっという間のことでした」と、ある方は証しされています。第1集には、山本孝子さんの「み翼のかげで」、野口広教授の「klein aber mein から klein aber Dein へ」、野田繁さんの「虚しさからの脱出」、池田傳一さんの「光の中に移されて」など、また巻末にはベックさんの「神は愛です」というメッセージが収録されています。



光よあれ第1集　吉祥寺キリスト集会編
私たちは主のもの　25人の証し　シリーズ
価三三〇円

第3集には、激動する時代の流れの中で少しずつ聖書の福音に目覚めてゆく過程を描いた納富信子さんの「主のご真実に支えられて」、大学紛争のさ中、聖書と出会い、救いを受け入れた蘇畑卓郎さんの「とこしえの磐」、またご夫婦それぞれの立場から信仰に至る道と深い体験を述べられた3組の夫婦による証しなど、また巻末には、ベックさんのメッセージ、「みこころが地でも行なわれますように」が収められています。



光よあれ第3集　吉祥寺キリスト集会編

私たちは主のもの　42人の証し　シリーズ

価三三〇円

フジテレビの有名なニュースキャスターだった故山川千秋さんの奥様の証し「ここに主がおられる」、重症のがんでありながら、軽井沢のキャンプで証しをされた笹川郁夫さんの「もはや私ではなく、キリストが私の中で」、天に召された長女の文枝さんのことを切々と綴った唐沢梅子さんの「天国で楽しい再会を」、薬物中毒の中で主に出会い、救われた体験を率直に語られる大塚二郎助教授の「高慢を砕かれて」など、すばらしい六十六人の方々の証しが満載されています。



光よあれ第4集　吉祥寺キリスト集会編

私たちは主のもの　66人の証し　シリーズ

価三五〇円

●近刊！光よあれ第5集

お申込みはハガキに本の名前（第何集、上下巻の別）、冊数、氏名、住所、電話番号ご記入の上〒180武蔵野市吉祥寺本町4―9―11吉祥寺キリスト集会まで。代価と郵送料は本が到着後、同封の郵便振込用紙でお振込みください。10冊以上は特別価格でご協力します。

実を結ぶ命がんにうち勝ったドイツ少女リンデのおすすめ

二十歳そこそこのドイツの少女リンデが、がんであることを知りながら、自分の死をかくも冷静に受け入れることができ、すべてを感謝し、自分の思いは少しも求めずに、喜びつつ召されていったというこの事実は、現代の奇跡であり、神の実在を証しする一つの大きな証拠です。

「永遠の愛をもって、わたしはあなたを愛した」（エレミヤ　31・3）

リンデの、主に従い通す態度は、吉祥寺キリスト集会の中に生き生きとしたリバイバルの波を起し、多くの人々が自分の支配権をイエスさまに明け渡し、そしてただ神のみことばにのみ拠り頼む者へと変えられています。

なおこの本は韓国語版、ドイツ語版が出版されました。さらに病床にあって本の読めない方々のために、ＰＢＡのアナウンサー渡辺康子さんが朗読したテープ（８本１組）があります。



ゴットホルド・ベック編著

実を結ぶ命がんにうち勝ったドイツ少女リンデ

価三三〇円

お申込みはハガキに本の名前（第何集、上下巻の別）、冊数、氏名、住所、電話番号ご記入の上〒１８０武蔵野市吉祥寺本町４―９―11吉祥寺キリスト集会まで。代価と郵送料は本が到着後、同封の郵便振込用紙でお振込みください。10冊以上は特別価格でご協力します。

なにものも私たちを神の愛から引き離すことはできない（上・下巻）　ゴットホルド・ベック著

吉祥寺キリスト集会でのベックさんの聖書の学びの内、「ローマ人への手紙」1章から8章までを上巻に、9章から16章までを下巻にまとめたものです。聖書に初めて接する方、信仰の歩みを始めた方のために分かりやすく書かれていて、全体は第一章から順を追って学ばれていますが、一つ一つのメッセージが深い霊的な内容を持ち独立しているため、どこから読み始めても、豊かな恵みが私たちの心に注がれます。

私たちが神様のみことばに目覚め、救われるためには、たった一つの聖句でも十分でした。しかし、さらに成長していくためには、多くのみことばが、聖書全体が必要です。

この本は、聖書を「研究」するためにではなく、日々の生活においてさらに深く主のみことばを味わいたいと願っておられる方々のために、すばらしい励ましとなると信じております。



なにものも私たちを
神の愛から引き離すことはできない（上・下巻）
ゴットホルド・ベック著
各巻とも価三〇〇円

お申込みはハガキに本の名前（第何集、上下巻の別）、冊数、氏名、住所、電話番号ご記入の上〒180武蔵野市吉祥寺本町4―9―11吉祥寺キリスト集会まで。代価と郵送料は本が到着後、同封の郵便振込用紙でお振込みください。10冊以上は特別価格でご協力します。

主イエスは言われた。

見よ。わたしは、世の終わりまで、
いつもあなた方と共にいます。 マタイ28:20

牧師制度がありません

私たちの吉祥寺キリスト集会には、牧師制度がありません。会社員、公務員、教師、医者、経営者、芸術家、弁護士、技術者などさまざまな職業を持つ人々が集まって、自発的に責任を分かちあい、一切強制されることなく、純粋に聖書のみ言葉によりたのみ、交わりを保つものの集いです。

会員制度がありません

もちろん名簿もありません。ですから「会員」になりたくてもなれないのです。いわゆる宗教団体的な制度は一切排除して、主ご自身のみが頭となって働かれ、導かれ、主ご自身が満ち満ちておられることのみを祈り求めている集会です。

組織・会則がありません

私たちの集会には、役員会も、総会も、定例会議も、会則も存在しません。みんなが助けあって重荷を分かちあい、全てが自発的に、喜びをもってなされています。

献金制度がありません

月定献金、年定献金などの献金制度がなく、献金は自発的に行なわれ、無記名ですから主のみがご存じです。

日曜礼拝と家庭集会

毎日曜日、10時半と2時に主の十字架の血潮をしのんでの礼拝があり、その後の福音集会では兄弟たちが交代でメッセージを伝えます。また、全国には50箇所以上に家庭集会があり、中には礼拝を行なっている所も増えています。

180東京都武蔵野市吉祥寺本町4-9-11
TEL0422－22－2016
郵便振替口座番号　東京0-56116

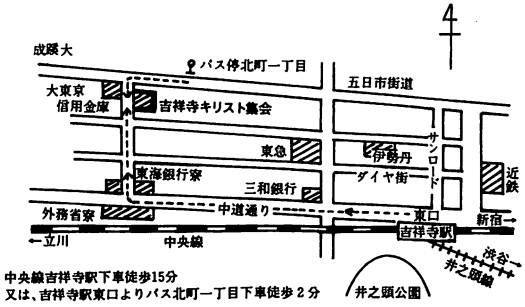
吉祥寺キリスト集会

私たちは、純粋に聖書の真理だけを学び、伝える者の集いです。会員制度を持たず、出入りは自由であり、いかなる党派、組織にも属していません。この本をお読みになって聖書と福音に関心のある方は、ぜひお気軽においでください。お電話をお待ちします。(住所・電話は1989年1月1日現在のものです)

吉祥寺キリスト集会

G. ベック　〒180　東京都武蔵野市吉祥寺本町4−9−11……0422−22−2016

日曜礼拝	10：30　および14：00
日曜メッセージ	12：00　および15：00
子供日曜学校	9：00
中高生日曜クラス	9：00
青年日曜クラス	14：30
火曜学び会	11：00
水曜学び会	19：30
木曜祈り会	19：30
春・夏・秋　軽井沢バイブルキャンプ	
各祝祭日午後　交わり会	



中央線吉祥寺駅下車徒歩15分
又は、吉祥寺駅東口よりバス北町一丁目下車徒歩2分

光よあれ
私たちは主のもの
25人の証しシリーズ
第2集

昭和59年6月1日初版
平成2年7月10日2版
編　者　ゴットホルド・ベック

装　幀　飯守恪太郎
編　集　酒井千尋
　　鈴木力・小松川幸江
写真植字　広江敦子・星淑子
印　刷　新生運動

発行所　吉祥寺キリスト集会
〒180 東京都武蔵野市吉祥寺本町4-9-11
電話　0422-21-8450(集会所)
　　0422-22-2016(ベック宅)
振替東京 0-56116

定価350円
(本体340円)

「光が、やみの中から輝き出よ」と言われた神は、
私たちの心を照らし、キリストの御顔にある神の栄光
を知る知識を輝かせてくださったのです。　（IIコリント　4・6）

定価 350円
（本体 340円）